
あれはね。

紫胡蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれはね。

【Nコード】

N0685X

【作者名】

紫 胡蝶

【あらすじ】

舞台は町にあふれる普通の歯科医院。

ようやく仕事にやりがいを感じ始めた恋愛に奥手な歯科衛生士と、女ばかりの環境にまだ慣れない新人歯科医の二人が仕事を通して綴っていきます。

外からは見えにくい院内の日常業務などを歯科衛生士目線で少しずつ織り込んでいきます。治療中に頭の上で飛び交う専門用語などが

少しは判るようになるかも(?)です。

難しい専門用語が飛び交っているようですが、実際はそんな難しい話をしている訳ではない事が判ってくるかもしれない。歯科医院の治療は『痛い』ばかりじゃないんですよ？

診療前

ごくありふれた歯科医院『さつき歯科』で歯科衛生士として働く私、
瀧野名塩たきのなじおは

分刻みの仕事を完全なる営業モードの笑顔で武装して次々とこなしていく毎日。

ドクターの指示のもと『心よいサービス』を心がけながら

治療の準備から補助 もちろん歯科衛生士として歯磨き指導から歯石や歯に付いた茶渋やヤニなどの汚れの除去などの口腔衛生指導などの予防を主にした治療を行う業務をしている。

ドクターの行動の先を読み、最小限の行動で素早く治療を進めていくのは

まるで頭の中でパズルを組み立てて片付けているような感覚で、細心の注意をはらって補助する事に最近ようやくやりがいを感じてきた24歳である。

・・・こない言い方するから生真面目だと思われてますが結構いい加減な性格で、いかにバレように手を抜く事が出来るかと日々考えているのですが
手を抜くのもめんどくさあゝくなって、
いつのまにやら、言われた事を言われた通りにしかできないマニュアル人間と化してしまいました・・・。

個性ねえな・・・私って・・・。

そんな、私が勤めているさつき歯科は

院長が女医で『竹下皐月』の下の名前を取って『さつき歯科』と命名されたというのが

命名のセンスがシンプルにモロバレで入ったばかりの頃に 先輩衛生士に

「なぜ竹下歯科ではなくさつき歯科なんでしょうね？」
と、素直に疑問を投げかけたところ

「女性は結婚すると苗字が変わるけど、名前は死んでも変わらないかららしいよ・・・」
と、想像以上に意味深長な返答をされ、どう反応していいのかわ戸惑った記憶がある

そんな理由からなのか
ここで働くスタッフは下の名前でお互いを呼び合っている。

もちろん、院長も『院長』とは呼ばれず
『サツキ先生』と呼ばれている。

そして、

私もスタッフには『ナジオ』と呼ばれている

ノリは幼稚園の先生か小児科の先生のようにだといつも思う。

そんなさつき歯科には

ドクター3名・歯科衛生士3名・歯科助手3名・受付1名・パート
& アルバイト5名所属しており、治療を行うユニットチェアを5
台とカウンセリング用の個室を1部屋保有していて、一般の歯科医
院としては大きめの規模である。

うちの病院では早番・日勤・遅番の三つの役割を

『ドクター組』『衛生士組』『歯科助手組』がそれぞれローテーシ
ョン当番するのだが。

ドクター1人・衛生士1人・助手1人がペアーを組んで必ず週に1
〜2回の遅番を担当する事になっているのである。

診療前（後書き）

初めての作品を投稿しましたので、ドキドキしています。

拙い表現と文章ですが

誤字脱字を含め内容等に不具合がありましたら、
教えて頂けると大変ありがたいです。

宜しくお願いいたします。

診療前準備・1

『本日の最終責任者』は遅番担当のである私
さつき歯科では、歯科衛生士がローテーションを組んで『本日の最終責任者』を担当する事になっている。

本日の業務を終了し

高校生のアルバイトの女の子達に掃除と片付けの指示し

自分も受付の片づけにかかっていた。

カルテの治療内容をパソコンに入力して

入力済んだカルテに入力済みのスタンプを押している

今日の分の自分が担当した患者さんのカルテを抱えてドクターの赤あか
松新まつあらたが「お疲れ様です」と声をかけてきた

さつき歯科の中で

アラタ先生はドクターの中で一番若いドクターでさつき歯科に勤め
始めて1年もたっていない新人で、

私は歯科衛生士の中では一番若手の、働き始めて4年目

年齢にひらきのあるさつき歯科の中では一番歳の近い者同士である。

私は手に持っていたカルテから一瞬顔を上げて

ニッコリと得意の営業スマイルを浮かべて「お疲れ様です。」と挨拶するが、もちろん礼儀的に挨拶しただけなので、すぐに作業にもどる

すると、不意に

「ナジオさんは、カルテの書き方や字の書き方がとても丁寧で読みやすいですね。」

と、アラタ先生から話しかけてきた

今日、初見の患者さんの状態を記入していた文字の事を言っているのだろうと思つて口を開く

「私よりも綺麗な読みやすい字でカルテを書いているアラタ先生にそう言つていただけで光栄です。サツキ先生（院長）やコウイチ先生（副院長）のカルテなんて殆ど文字ですらない暗号ですからね。」と、社交辞令に対してさりげなく軽い毒を織り交ぜて適当に返事しておく

内心、早く帰りたいんだから、話しかけてくるなよな

程度の思いも言葉ではなく雰囲気で醸し出しておく……。

実際、文字と云うより暗号の羅列に近いカルテの解読は、ある程度の知識とドクターの癖を知っていなければ解読は不可能である。

最近では、カルテやレントゲン写真などをすべてパソコン入力されている病院が増えているのだが、さつき歯科では未だに手書きが採用されている。

（あれ絶対、サツキ先生が機会音痴だからだよー！！）
つて、お局達が話しているのを聞いたことがある……
デジタル化されたらいろいろ便利になるので、頑張つて！！サツキ先生！！

と、顔にも口にも出さずに心の中で叫んでますが、実現される見込みはまだありません……。

で、話は戻つて

諸先輩方の悪筆は勉強の為に、院長や先輩ドクターの担当の患者さんのカルテを見ていて、カルテの“暗号状態”を解読するのが困難だとアラタ先生も感じていた事のように

私の返事を聞いて一瞬苦笑いをしたアラタ先生は「そういう意味で

はなかつたんですけど・・・」

と、私の毒を諸先輩方を立てたいのか小さく否定して濁した・・・。

正直になれ！アラタ先生！！

・・・って正直に「そうですね」って言われてもそれはそれで反応に困るけどね。

私の営業スマイルと小さな毒で

世間話をするような雰囲気ではないと悟ったらしいアラタ先生は

「今日の分 終わりました、これお願いします。」

書き終わったカルテを私に預けて「お先に失礼します。 お疲れ様でした」と言って診療室を出て行った。

うん、見事な引き際。

私の無言の圧力に気づいたとは、アラタ先生もなかなか見どころがある。

(なんの見どころ?!)

アラタ先生は歯科医師としては経験が少ない為にやや頼りなく

長く務めている歯科衛生士や歯科助手などにややぞんざいな扱いを受ける事が多い。

私は、自分も新人の時は頼りなく

オロオロしてばかりいた過去があるので人の事は言えないと思っ
ているし

仮にも上司にあたるアラタ先生のプライドを傷つけないように接
しているつもりである。

それが伝わっているのか、年が近いせいなのか判らないが

先日、アラタ先生は私が専属でアシストについて欲しいと思っ

るらしいと、アルバイトの女の子が耳にしたと言っていたが、
人事に関しては私にはどうする事も出来ないし 触れる必要もない
ので

話しは軽く流して終わっておいた。

そういう事は、聞かなかつた事にするのが一番。

実際、新人ドクターであるアラタ先生に衛生士の私が専属にアシス
トに就く事はない。

私の優先順位は、衛生士業務 院長 副院長 後輩の教育 アラタ
先生である。

どうしても、手が必要な時や今日のような同じ遅番の時だけしかア
シスタントにつかない。

それが、仕事を円滑に回すために必要な事だから仕方がない。
本来ならば衛生士に指示して任せても構わない業務でもアラタ先生
は自分でやっている。

一通りの治療は出来なければならないという事がというのが大きな
理由らしいが

『衛生士に任せてしまうと、アラタ先生のする事が無くなってしま
うから自分でやっている』と云うのが現実である。

私はアラタ先生から預かった『私よりも綺麗な文字』で書かれたカ
ルテをカルテ棚に片付けた。

本当に読みやすく綺麗な文字なこと。

男の人で字が綺麗で・・・なんかいいね・・・。

診療前準備・1 (後書き)

舞台は歯科医院です。

専門用語がちらほら出てきますが、判りやすい解説がつけられるように頑張ります。

・・・逆に、難しい事は書けないので、大丈夫かも(汗)

診療前準備・2

アルバイトの女の子達から掃除が終了した事を報告され
後輩である歯科助手の松田由紀と一緒に水道・ガスの元栓を閉めた
かを「水道よし！ガス栓よし！」と指差し確認を行う。

いつも思うが、意外と体育会系な確認方法だねえ、とユキと笑い
ながら

メインスイッチとコンプレッサーの電源を落とした。

電源を切ったコンプレッサー内から残ったエアの出るシューと云
う耳に痛い音を聞きながら

駅前のお店のケーキが美味しいなどとワイワイと騒ぎながら更衣室
で着替えを済ませた。

アラタ先生は先に帰ったらしく更衣室の扉が開けられて明かりが消
されている。

(使用しない時は扉を開けておく事になっている。)

電気の消し忘れがないか、電化製品の電気の消し忘れやコンセント
の抜き忘れがないか

これもやはり指差し確認で「電気よし」と言ってから戸締りをした。

コンセントや元栓を1つでも抜き忘れ、閉め忘れなどがあると
翌日大目玉を食らう羽目になるので、しっかりと確認しなければな
らない。

お局達は、本当に神経質で困る……。

いや、私が横着過ぎるのか？

でも まあ

診療終了後の診療室や更衣室は完全に無人になる為、

『コンセントから漏電して出火!』や『窓を閉め忘れて泥棒に侵入される!』

などの事態が発生して、

『翌日出勤したら診療室が大変な事に!!』

なんて事にならないように注意しなければならない。』

それはもう、口を酸っぱくしてとはこの事かと思う程に強く先輩やサツキ先生に言い渡されている。

言っている事はとても正しいのだが

閉め忘れたり、切り忘れたりしたのを発見した時に

先輩達が犯人を見つけると

「うっかり忘れました」なんて言葉は言えないぐらいの勢いで説教される。

新人の頃はあまりにも恐ろしさに、閉めたかどうか不安になって

家に着いたのに、確認のためにもう一度診療所に来て確認した事など

1度や2度の話ではない

患者さんの大切な個人情報や高価な器具などを失わないようにという事は

理解できているのだが・・・

ここまで言われると単なる先輩達のプライベートの憂さ晴らし的な八つ当たりか?!

と、最近は思い始めている・・・。

違うと思いたいのだが・・・。

たった一日コンセントを抜き忘れただけで漏電して火事になるような古い器具は使っていないし、掃除を怠っている訳でもない。

要するに

『お金を貰って働いているのだから、指示された事を間違いなくする事が仕事だ』

とでも言いたいのだろうと解釈しておく。

通用口の前で、自転車で来ているユキとアルバイトの女の子達と別れ
今日も疲れたな。

なんて思いながら駅に向かって歩き出したが、気を抜いた顔などし
て歩く訳ないはいかない。

昨今 歯科医院は街にあふれかえっている状態で

ご近所の評判によって患者数が左右される為

自分の働くさつき歯科での周りでは

あらぬ噂を立てないように気をつけるようにとサツキ先生に言われ
ている

きちんと言いつけを守り

駅に行く道すがら見知った顔を見かけてはきつちりと挨拶をする

『家に帰るまでが遠足です』それを日常的に実行しているような気
分にすらなってきた。

っていうか、私が外面がいいだけなのかもしれない・・・。

診療前準備・2 (後書き)

指さし確認って・・・。

ナジオとユキは意外と天然というか、言われた事を言葉どおりに実行する人達のように・・・。

診療前準備・3

「お疲れ様です」

駅のホームでメールチェックをしようと鞆から携帯を出した時に先に職場を出ていたアラタ先生が携帯をポケットにしまいながら声をかけてきた

職場の白衣姿とは打って変わって、ラフな服装をしたアラタ先生は診療所で会った時と少し印象が違う気がする。

職場では、『新人！』と言う文字が全体から滲み出ているかのような頼りない印象があるのだが、

私服姿のアラタ先生は『学生の雰囲気はまだ残したままの社会人』
って感じで、

若者独特の根拠のない『自信』のような物も少し感じられる印象である。

この自信が仕事でも生かされたら、スタッフ皆の対応も変わってくるのになあ〜と

心密かに思ってみたが口には出さないでおく。

アラタ先生と私の家は反対方面なのだが、

小さな駅なので上り下りのホーム同じで、電車待ちをしている時に遭遇する事はしばしばある。

同じ日に遅番があるから当たり前なんだけどね。

いつもならば、

職場の人と職場以外で接したくはないという思いがあるので、

顔を合わせても、挨拶をして通過して微妙に車両の乗り口をいつもと違うところに変えたり

面倒なので、気付かれないようにこっそりと後ろを通過したりしている。

しかし今日は、なんとなく携帯を鞆に直して「お疲れ様です」と挨拶

拶を返した。

携帯を鞆に直した事で会話をしても構わないのだと判断したのか
アラタ先生は通路の邪魔にならないように私の近くに立った

「今日も忙しかったですね」

長期の連休明けだった為、新患しんかん（初めて来院される患者さんの事）

が最近多く来院されたので最近バタバタと動き回る日が続いていた。

「本当に今日は忙しかったです。アラタ先生の患者さんも増えてきましたから

アポ（アポイントメント）予約の略）の調整をするのが大変になってきましたね」

比較的簡単な治療で済む患者さんをサツキ先生の采配でアラタ先生に回ってくるが

私はアラタ先生が新人ながらも親切丁寧な適切な対応をしていると高く評価している。

一度で来なくなってしまう患者さんはたまにいらっしやるが

治療の必要性を判りやくす丁寧に説明している姿勢が患者さんには受け入れられている様子で、最近では通院されているアラタ先生の患者さんの紹介で来院された新患の人が

アラタ先生を指名する事も多くなってきた。

良い傾向だね。

このまま、アラタ先生の患者さんが増えて行ってくれたら・・・
・うん、正直嬉しい。

「僕なんて、まだまだです」

少し照れたように下を向きながらアラタ先生はそう言った

「先生が丁寧に治療して下さるから 患者さんも安心して最後まで治療しようと通院して下さるんだと思いますよ」

私にしては珍しく、社交辞令でもなんでもなく素直に言ってみた。
「ナジオさんにそう言っていただけなんて嬉しいですね　なんだか自信が持てそうです」

笑顔で答えたアラタ先生に、

「そうですよ。自信持って下さい。と、私もつられて笑った

「あ、それと前々から言おうと思っていたんですけど

私に敬語で話さないで下さい。私の方が先生より年下ですから」

「でも、僕の方がさつきに後から入ってますから」

アラタ先生は少し困ったような顔している

「後から入ってしようと、先生はドクターですから。

敬語をやめる事でバイトの女の子達も先生への態度を改めると思いますが、
「まずから」

さつき歯科は意外と上下関係がうるさい。

ドクター＞歯科衛生士＞歯科助手＞パート&アルバイト
という力関係がある。

ドクターであるアラタ先生が先に入ろうが後に入ろうが

ドクター以外のスタッフの女の子の上司になるのである。

体育会系なノリで『先に入った者が先輩』と思うアラタ先生の考えは

私たち下の方にはありがたい優しさであると思うのだが、

アラタ先生の優しさを勘違いしている先輩や後輩が横柄な態度でアラタ先生に接する事がある

それを見ているアルバイトの女の子達が真似して、

アラタ先生に横柄な態度で接している処を目にする事がある。

目撃したらアルバイトの女の子達には『ドクターに対して行う態度ではない』とやんわりと注意はしているのだが、それを容認しているアラタ先生にも非があると感じていた。

慣れない女ばかりの職場に未だに戸惑いを感じている事は伝わってくるが、

それとこれとは別な話し

やはり、締めるところは締めて貰わないといけないと、前々から思っていた。

「ナジオさんは律義ですね」

笑いながら小さく呟いたアラタ先生に

「律儀というか、融通が利かないんですよ。」

でも、先生の優しさは さつき歯科では女の子達の為になりません。女の子達が何を言おうと先生の方が上ですから」

顔の前で人差し指を立てて念を押すように云うとアラタ先生は何がおかしいのか小さく笑っている。

「僕は、スタッフとはギスギスした関係よりも、

アットホームな和やかな関係で居たいだけですよ。」

「……………」

そう言われると、私の発言は単なるお節介って事になるじゃない！

先生の事を心配して言っているのに……

と、少し膨れていると私が乗る方面の電車が到着した

「ではお先に失礼します」

と言って軽く頭を下げてさっさと電車に乗り込んだ。

アラタ先生は電車の扉が閉まると私に小さく手を挙げて見送ってくれた。

診療前準備・3（後書き）

以前働いていた仕事場の最寄り駅が

うっかりすると、ラッシュ時に各駅停車ですら止まらない小さな駅
だったのを思い出しました。

そんな小さな駅だったら、コソコソ隠れれないと思うけど・・・

ナジオは意地でも顔を合わせないように頑張るのでしょうか（苦笑）

そんな光景、ちょっと傍から見て見たいかも（笑）

診療前準備・4

私は家に着いたら真つ先にお風呂に入る習慣がある

昔付き合っていた彼氏に「病院臭い」と言われた事が切っ掛けで始まった習慣で

自分ではあまり気にならなかったが、思った以上に病院独特の消毒の匂いが髪や体にまとわりついていているらしい。

仕事終わりに少し香水をつけたりするのだが、やはり独特の臭いはすぐには消えてくれないようである。

バスタブにお湯を張ってお気入りのバラの香りの入浴剤を入れ、ゆっくり湯船に浸かって一日の疲れをお湯の中に絞り出すかのようにマッサージをしながら寛いだ。

実家に居る時は、あまり長湯はしなかったのだが、今は気ままな一人暮らしなので何時間入っていようと誰からも文句は言われないので

自然と長湯の習慣が出来てしまった。

浴室に防水のCDプレイヤーを持ち込んだり

仕事が休みの日には、雑誌や本を持ち込んで半身浴などをしたりしている

最近、家の中で一番落ち着く場所はお風呂になったような気がする。お風呂を出る時に浴槽を綺麗に洗って、

明日帰ってきてすぐにお風呂にはいれるように掃除して出て行くのもすっかり習慣になってしまった。

めんどくさい事を後回しにするともっと面倒な事になる事を一人暮らしをしていて学んだ。

なので、嫌な事はさっさと済ませるに限る！

十分に温まった体をタオルで拭いてさっさと部屋着に着替える、

お風呂場を出て濡れた頭を拭きながら真っ直ぐにCDコンポに歩み寄りスタートボタンを押した。

バスタオルを頭に巻いて、床に座って胡坐をかくと

CDコンポに入れっぱなしになっているCDの曲が流れだす

甘ったるい歌い方をする女性ボーカリストの声が印象的な静かなジャズで、

目を閉じれば、ちょっと小粋なバーに居る気分が味わえるような曲である。

少女の様な甘ったるさで愛の歌を囁く曲はなんだか自分の不器用さを慰めてくれているようで、なんとなく気にいって最近良く聞いている曲なのである。

私がテレビをつける事は少ない。

ニュースや天気予報などはラジオや携帯やパソコンのニュースでチェックすれば問題ないと思っている、

だから、家に居る時にテレビを使うのは

レンタルビデオを借りてきたのを再生する時か

幼馴染の東條漣（とうじょうみづみ）が部屋を訪れる時ぐらいである。

私にしたらテレビは置物と同じ扱いかもしれない……。

頭を拭いていたタオルを器用に頭に巻き付けると

机に置いてあったタバコと灰皿を引き寄せて火を付ける

仕事を一日頑張った自分へのご褒美かのように

1本のタバコを楽しむようにゆっくりと紫煙をくゆらす。

『歯科衛生士のくせに』と、いつも喫煙時に自嘲気味になるがどうしても禁煙する事が出来ず喫煙を続けている

吸えない状況であれば何時間でも吸わずに過ごせるのに

吸える環境になると何本でも吸ってしまう自分の意思の弱さに苦笑

いである。

気づいていても、どうしても出来ない甘さが出ている。

外でタバコを吸おうとすると、喫煙エリアを探して彷徨わなければならぬので、

もっぱら自分の部屋でしか吸わない。

ホント、最近の世の中は 喫煙者に対して厳しい!!

だから、喫煙している患者さんに『控えて下さい』などとは言わないうようにしている。

ただでさえ、肩身の狭い思いをしているのに、病院に来てまで「辞めろ」って言われたくないでしょ?!

私自信も辞められないのに、人に辞めるように勧めるなんて出来ない!!

体に悪いのは100も承知!!

私みたいに、誰にも迷惑かけなければ喫煙しても良いじゃない!! と、誰に伝える訳でもなく 心の中でまた叫んでみる。

私、心の叫び多いよな。。。

タバコを吸いながら思う・・・

子供の頃からガサツで横着な性格な私は

今の仕事を始めて、ようやく落ち着く事を覚えたのか

仕事の時ぐらいはと意識して丁寧に物事を進めて行くようになった昔の自分がしていた事を思い出すと

顔から火が出てくるような恥ずかしい事の連続で

二度とあんな恥ずかしい思いをしないようにと努力をしているのだがやはり地は隠せないようである。

幼い頃は親の前で「いい子」になりたくて素の自分を出せなくて息苦しかった

そんな息苦しさから解放されたくて就職と共に家を出た

タバコを吸っている私を見たら 親は卒倒するだろうか？

そのまま受け入れてくれるのだろうか？

考えても答えの出ない疑問がふと頭をかすめる。

親に私は何を期待しているのだろうか・・・。

至福の1本吸い終わってから

私はゆつくりと柔軟体操を始めた

体は180度開脚をしながら前屈して肩を床につけれるぐらいに柔らかい。

社会人になってから体を動かす時間が少なくなったので体が硬くなって予想外の行動で怪我をしたくなかったのでお風呂上がりに柔軟を続けている。

スポーツジムにでも通う事も考えたが

身近な場所にスポーツジムがない為に実行には移していない。

一度家に帰ってからまた家を出るのも億劫だし

仕事の帰りに電車で家とは反対方面の電車に乗ってまで通うのも嫌だ
(基本、めんどくさがりなもので・・・)

なので、お手軽に始めたのが簡単な柔軟体操と早朝散歩。

早朝であれば、意外と犬の散歩をしている人が多いので

防犯面も考慮して、朝に軽い散歩をして 夜には柔軟をする

予想以上に、体の為になっっているらしくすこぶる快適に毎日を通している。

ゆくゆくは、

一人でハイキングに出かけたりしたいとも考えているが未だ果たせてはいない。

黙々と、柔軟体操をしていると、突然机の上に置いてあった携帯のメール着信音が部屋に響いた。携帯の液晶画面にはメール着信のマークが表示されている。確認するとミオからで「海に行こう」とだけ書いてあった。そのごく簡単なそのメールに私も「了解」と短く返事を返し、晩御飯を作る為に台所に向かって立ち上がった。

診療前準備・4（後書き）

匂いって結構きになりませんか？

ふとした時にかおる匂いはやはり
爽やかな物だと好印象ですよね！！

ナジオの日常の香りは

「病院の匂い」か「タバコの匂い」みたいですね。
女の子としてどうなんでしょうね・・・。

診療前準備・5

「やっぱりバイクって気持ちいいね〜!!」

シルバーの半ヘルを被った幼馴染の東條澗は

私のシルバーカラーの愛車のタンDEMシートから上機嫌にそう叫んだスリム化されたネーキッドタイプの単車なのでタンDEMシートはとても狭い。

(というか、もともとタンDEMシートとしての機能は望めない)

しかし、女性同士のタンDEMなので圧迫感はありません

同じくシルバーのフルフェイスを被った私も前を向いたまま「ですよ!!」とタンDEMシートのミオに向かって叫ぶ。

ミオは私の腰に手を回し背中へベッタリと抱きつく形でタンDEMシートに座っている。

私はバイクの教習所以外でタンDEMシートに座った事がないのでミオのような姿勢で彼氏のバイクの後ろに乗る事がちょっと憧れだったりするが

実際乗れるような機会があったとしても

変なプライドからミオのような体勢でタンDEMシートに乗る事はないであろうと想像する。

余談だが、

バイクのタンDEMシートに座っている女の子に

「膝でしっかりシートをはさんで体を固定させないと

急にスピードダウンした時に勢いで運転手側に滑って 運転手がタンクに挟まれて

大変痛い思いをする羽目になるよ!!

と、声を大にして言いたい!

女性でも挟まれるとかなり痛いけど

男性だったらそれはもう可哀そうな事になりますので気をつけてあ

げようね!』
と、声を大にして訴えたい!!

・・・って、実際には言わないけどね・・・。

私は、何度言ってもしつかり膝で固定してくれないミオのおかげでスピードの落とし方・ブレーキのかけ方はかなり上達したと言ってもいいかもしれない。

いや、もしかして、私がタンクを挟む足の力がなさ過ぎて、勢いに負けて前にずれてくるミオに押されて挟まってるだけかもしれない・・・

だって、ジーンズで乗ると、タンク滑るんだもん!!

あ!

でも、背中に当たる感触がうれしくてキューブレーキかけちゃう男性もいるかも?

タンクにパッド張ってるのも見かけるしね・・・

まあ、それは、お互いに話し合ってただね

って、そんな会話普通しないか・・・。

そんな私の密かな悩みもビックスクーターだったらそんな心配もないのだが、

やはりネーキッドタイプのバイクに憧れて免許を取ったので乗り換えるつもりはない。

最近は女性でも二輪免許を持っている事が多くなったが

やはり、女性が運転するバイクでタンDEM走行をしている人は珍しい昼間に信号待ちをしている時などに体のラインからすぐに女同士だと判るらしく

「頑張れ〜!!」と、何を頑張ったらいいいのか意味不明な応援が飛んでくる事もしばしばある

いつも不思議に思う・・・なんで、応援されてるんだろって・・・

私、応援したくなるほど必死に運転してる？

いまだに、その謎は解けない・・・。

家から1時間程走らせた海の近くの駐車場にバイクを止めた
浜に出てみると、結構有名なデートスポットなので

予想道理に数多くのカップルが闇に紛れるように寄り添って座っている。

なかには、寄り添うどころか抱き合っているカップルまで居る。

「なんで夜景の綺麗なスポットにはこんなにカップルが居るんだろ
うね。」

小さく毒づいた私に

「そりゃ、暗いからよ」

と、サラリと答えたミオは、どこに座ろうかと場所を物色し始めた。
カップルが良く見える場所に陣取るつもりらしく

キョロキョロとあたりを見回し「ベストポジション発見！」と言いつ
ながら街頭近くの

コンクリートの階段に座り込んだ

悪趣味だ・・・

付き合わされてる私に取ったら悪夢以外のなにものでもない

・

そう思うが、面白い観察ができそうなカップルを物色するように、
あたりを見渡しているミオを積極的に止める事が出来ず、隣に黙っ
て座ることにした。

診療前準備・5（後書き）

よく、友達とバイクに乗っている時に隣に並んだ車の窓が スーツと開いて

「頑張つて！」

つて、言われました・・・。

何?! 私 応援しないとイケないぐらいヤバイ運転してた?!

フラフラなの?! 立ちゴケしそうに見えるの?!

つて、疑問符の嵐でした・・・。

ヒョロこいのがヒョロこい単車でニケツしてるのが珍しかったから
だと思いたい・・・。

診療前準備・6

「で、最近どうよ？」

何の前触れもなくいきなり言った私の発言は、

遠距離恋愛をしているミオの話を聞くつもりで言ったのだが

「どうって何が？」

あんた何の脈絡もなく話を始めるんじゃないわよ」

と、手痛く返されてしまった。

ミオも外面はいい方なので、いつもは丁寧な話し方をするのだが、私と居る時は、地が出ると云うべきか話し方がいつもザツで辛口になってしまう。

ミオの口が悪い事は判っているのだが、予想以上にきつい返事が返って、来て少しムツとした私の雰囲気悟ってか

ミオは悪戯っ子のような笑顔を浮かべて

「なに カップルばかりいるから気まずくなってきた？」

あそこ、見てみい 熱々く 超至近距離で見つめあっちゃってる

もうすぐキスでもするんじゃない？ あそこもよ！！」

小声ではしゃぐミオに思わず大きな声で突っ込みそうになるのをぐっと堪える

ここはデートスポットで公衆の面前です！ナジオさん！！

と、自分に言い聞かす。

「な、何っ？！ もしかして 人がイチャこいてる所を見たくて夜のデートスポットに来たんじゃないでしょうね？！」

「ああ、あんた今 顔赤いわよ」。もお ウブなんだからうってか、人間ウオッチングと言いなさい」

いやいや、人間ウオッチングってあんた・・・やっぱり趣味

悪いよ・・・

しかも、ウブって・・・久しぶりに聞いたわその単語・・・。

仕事中の私は、ある人物のせいで聞きたくもない事を囁かれ続けた
おかげで(？)

ミオが思っている程、ウブではない・・・と、思う・・・。
仕事で聞いたらスルー出来るのに、何故この場でスルー出来ない？！
言葉で聞いても意味分からないからイメージ出来ないから
平気でスルー出来るけど

映像として認識してしまうとスルー出来なくなっちゃうのかもしれない。

頑張れ！　ここは職場だ！

平常心を保つのだ！

と、心の中でポーカーフェイスで居られるように自分自身に言い聞
かせていたのだが・・・
できなかつた・・・。

隣の、ミオの野次馬オーラが私を現実から逃げさせてくれな〜い
(涙)

なら、会話をして気を紛らすまで！！！！

「ねえ・・・人がイチャこいてるのを見て、あんた楽しいの？
・・・って、超ガン見してるし！！」

チラ見ならともかく、ガン見しているとは思っていなくて
ミオのその行動に軽くうるたえてしまった私は、
もう、この場からの逃亡を図るしかない！と、立ち上がろうとした
が、

そこはもう付き合いの長い幼馴染、私の行動などお見通しで、

立ち上がる前に肩をガツチリ押さえられ無理やり座らされる

「何言ってるの、ベタな恋愛ドラマをライブで見てると思えばいいのよ!!」

向こうだって人に見られてるって判っててあそこでイチャこいてるだから

見られる方が燃える人も居るしね」

「ライブで他人の恋愛ドラマなんて見たくもないわ!!」

私の肩をがっちり掴んで離さなかったミオはにっこりと完璧な笑顔を浮かべながら

「だ・か・ら・よ!! あんたの敗因をここでじっくり反省しようって言ってるんじゃない」

と、おっしやいました……。

……やっぱり、この子……恐ろしい子。

「場所が悪い。

何もこんな処で私に彼氏が出来ない反省会なんてしなくてもいいでしょうが!」

「はい、ぎゃーぎゃー騒がないの。

あんたのせいで周りの雰囲気台無しになってるから。」

そう言われて、思わず周りを見てみると

何の騒ぎかと周りのカップルが私たちの方を見ていた

~~~~~!!

やってしまった……私のばかりあ!!

さっき誓った自製の心はどこに行ったよ……。

ミオは営業スマイルを浮かべて周りのカップル達に軽く頭を下げて

集中した視線を軽く振り払った

私もつられて必殺技の「目で笑顔」で軽く頭を下げる。

仕事中は常にマスクをしているので、

私の感情を表す表情は目だけである。

なので、患者さんに安心感を与えるために、目だけで笑顔だと分かるような表情をするのは

私の必殺技である。

学生時代に担任の先生に「目で笑え！」と言われて鏡の前で無理やり練習させられたものだ」

あゝあ、懐かしい。

私が昔を懐かしんでいる間に

カップル達は私達がおとなしくなった事を確認して  
また自分たちの世界に帰って行ったようである。

未熟者でごめん・・・カップルさん達の世界にお邪魔してホントごめん・・・(拝)

## 診療前準備・7

「で、敗因は何？」

ようやく落ち着いた私に

静かに投げかけられた言葉を聞いて

自分自身の恋愛事情について思い返してみた。

母は事ある事に

「女性は結婚するまで貞操を守る」的な発言を繰り返していた

この刷り込みのおかげで世の未婚女性は全員結婚するまで貞操を守ると信じていて疑わず

『授かり婚』で結婚する事になった女性は、凄い悪い事をしている人だとさえ思っていた

こんな話は絶対に人前でしてはいけない事だと思い積極的にその手の話題には参加せず、

ミオも私に恋話をするようなキャラではないと判断していたためわざと話をしなかったただけなのだが、

それが今の状態の原因だと判断したミオは最近になってやんわりと恋話をするようになってきた

が、長年のマインドコントロールのおかげで時すでに遅く

雑誌等で軽く掲載されているだけでも恥ずかしくなって、

凄い勢いでページを飛ばして読まない努力をしよう程、恋愛に対して臆病になってしまっていた。

でも、ページを飛ばす時点で

超興味あるんだろうね・・・多分・・・

興味があるけど、恥ずかしくって読めない・・・。

なんだろうね、この徹底的な回避具合は・・・我ながら不思議だわ。

私は少し「男性」と云うものに抵抗を感じている  
とくに、切っ掛けと云うものはないのだが、なぜか「苦手」なのである。

過去に何人かの男性と「彼氏彼女の関係」になつた事もあるのだが  
どのように接していいのか判らず、「友達」感覚で付き合い始めて  
「友達以上」を求められ、期待に応えられずにすぐに別れる事にな  
ってしまうのである。

それをミオに伝えると

「あんた、相当強い呪いをかけられてるわね、あんたのお母さんも  
魔女の資格ありよ」  
と、言われてしまった。

人の親捕まえて魔女って……。

「……魔女って……ううん、でも、魔女かも……」

ミオにそう言われてしまうと、魔女以外の表現方法が思い浮かばな  
くなってしまう……。

「呪以外の何物でもないでしょ、」

今時彼氏いて、やるタイミングがあるのに彼女が心も体を開かない  
なんて……」

「まあねえ……って、あんたもうちよつと言葉選んだら?!」

「いいじゃない、誰が聞いている訳でもないんだから」

あんただから言ってるのよ。他の人だったらもうちよつと言葉を選  
ぶわよ」

「なんの告白?! 私にも言葉を選んでくれないのよ?」

「遠慮するわ。あんたに言葉を選ぶ必要なんてない」

『私って愛されてるう』と、遠くを見ながら私はまた話しだした。  
「なんかね、」

人としての器が小さいって云うか『この人なら!』って云う確信が

持てなくてね」

「器って・・・あんたも言い方選んだら？」

ニヤニヤ笑うミオに

キョトンとした表情で

「・・・選ぶような表現なんかしてないと思うけど？」

と、答えると

ミオは小さく舌打ちをした

「チツ、まだ乗ってこないか・・・まあいいわ。じゃあ、どんな人ならいいの？」

と、投げやりに聞いてきた。

って、

今、チツって小さく舌打ちしたよね？！

話題に乗ってこなかったからって舌打ちかよ？！！！

しかも投げやりってどうゆうことよ？！！

・・・とりあえず、ミオに何を言っても無駄なので、気を取り直しまして・・・。

「んとね、

力強い人って云うか、世界が破滅しても生きていけるような器の人かな」

「あんたは彼氏にゴキブリ並みの生命力を求めているの？！

ってか、あんたファンタジーの読み過ぎなんじゃない？！

勝手に世界が破滅させないでくれる？！

世界が破滅したら間違えいなくあんた存在してないわよ。

ってか、今までヒョロってした人ばかりだったよね？！趣味じゃなかったの？」

怒涛の突っ込みなんていつもの事

1言えば10は帰ってくるが

今のは100帰ってきた気分・・・

とりあえず、最後の質問にだけ返事をする  
それもいつもの事

「うん、『優しい』と『優柔不断』を勘違いしてた  
優しいけど、『俺に着いて来い』的な人がいいけど、なかなかそんな  
人と出合いがね

最終的には『お友達』になっちゃって別れちゃうのよね」

「あんた以上に『男らしい男』なんてなかなか居ないからね」

「心優しい戦国武将みたいで、話が出る人がベストなんだけどね」

・

つて、私そんなに男前な性格なのかな？」

「平成の世の中には戦国武将はその辺に転がってないわねえ」

つてか、バイクで女友達浜辺に連れて来れる奴は十分男前よつてか、  
あんたの方が武将ね」

「私が武将?! なら今まで付き合ってたのは家来?」

「家来よつていうか、公家じゃない?」

「あ、なんか適格。公家だわ。頭はいいんだけど『麻呂』よつて感じ」

「麻呂かよ! それに話が出るよつて 麻呂達が雅過ぎて武将との会  
話が成立しなかつたの?」

「いや、会話よつて云うか 私が持っていないような知識があつて

会話の意図をすぐに悟つてくれるような頭の回転が良い人がベスト  
だつただけだね」

「会話はキャッチボールよつて言うけど、居なかつたの? そんな人?」

「勉強は出来る人ばかりだつたけど、生きてきた環境があまりに  
も違い過ぎて

物事の論点がまず違つて、会話するのがしんどかつたのよ」

「一流大学出身ばかりだつたからね。勉強が出来ても会話の着眼  
点が違うと痛いかな

コメディ映画を一緒に観てて 笑うポイントが違うと、ちよつとい  
ラツとする感じ?」

「そんな感じ。痛いよ〜 一般常識と世間に対する着眼点が違うとな

んか自分の頭の悪さが光るって云う か、同じ物を見ていても 角度がまったく違うから同じ事を言ってるんだけど

会話がかみ合わないから理解するのに時間がかかるのよ」

「それは辛いね」

「自分の言葉で話をすると勘違いされて、話がややこしくなるから相手が判る言葉を選んで会話すると同時通訳してるみたいに頭フル回転でさ〜、

仕事以外で脳みそフル回転してたら 頭フラツフラで倒れそうになつたわよ」

「それですぐに別れちゃう訳だ。」

「でも凄いのは、先に根を上げるのは向こうだからね！体力勝負では常に私が上なのよね〜」

「何の自慢？！ってか、頭脳勝負じゃなくて、体力勝負だったんだ・・・。」

ミオは呆れた表情を浮かべながら私を見ると

「持久力はかなり必要だったと思うよ。」

真剣な顔をして私は言いきる

今までの恋愛はマラソンのようなものだと感じていた。

横に並んで歩きたいだけなのに、なぜか相手を追いかけて走ってしまい

気づいた時には、相手を追い抜いて独走してまっている・・・。

「頭使うわ 体開かんわで 彼氏も早々に退却って訳ね。賢明な判

断だわ」

ミオは溜息をつきながらそう呟いた。

　　どんだけ、開けっぴろげな発言なんですよ・・・。

そこは、あえて無視して流す・・・。

「拳と拳の戦いの末の友情というか、敵の前で背中を預けられるような信頼感なんか持てたらベストなんだけどね」

「ナジオさん、背中を預けないと切り抜けられない敵には、なかなかお目にかかれなと思いますし、そもそもご自分が女性であるという事を自覚はございますか？」

「例え話じゃない！それに性別って・・・どうでもいいかな。私は人としてその人と接していたいと云うか、

自分が女性だから強い男性に守られたいとかじゃなくて

その人が人として尊敬出来たらいいんだと思う。」

「あんたいい事言ってるんだけどね・・・会話の流れから賛同しづらいわ。」

ちなみに相手のスペックは？」

「あんまり気にしない。」

個性的な人でも私が尊敬出来ると思ったら全然OK！

でも、出来れば絵面の良い人だったらなおさらOKなんだけど」

「絵面って・・・あんなね」

私の理想と過去の敗因についてあらかた語り終わると

ミオは急に周りのカップルのスペックについての話に無理やりシフトチェンジしはじめた

自分から話を振っておいて自分勝手な性格である。

ナジオ「あの彼氏に　あの彼女くない？」

ミオ「あの眼鏡！！いつの時代の眼鏡だよ！！って、感じ？」

ナジオ「あれ見て、あの足であの丈はヤバいつしょ？！」

ミオ「いいんじゃない？自分が好き好んで自虐的に見曝してるだけならさ」

ナジオ「見せられる方がきつくはない？」

ミオ「見なきゃいいのよ」心頭滅却すれば火もまた涼し」よ」

ナジオ「なんの修行よ？！　心頭滅却しなきゃ視界に入らない努力が出来ないの？！」

ミオ「だって、一度目に入っちゃうと　気になってしょうがないでしょ」

ナジオ「言えてる。今度から私も修行だと思っわ。」  
そんな会話が続きした後  
ミオが「飽きた〜お茶飲みた〜い」と言った事で海辺の近くのコンビニに移動した。

ミオが買い物をする間 私はコンビニの入り口でタバコを吸う事をミオに伝えて

タバコとライターを買って

コンビニの入り口付近にある灰皿の前でタバコに火をつけた。

いつもはミオがタバコの煙を嫌う為、一緒にいる時は吸わないようにしているのだが

今日はいじめ過ぎたと実感しているのか大目に見てくれる様子である。

私がタバコを吸い終わるまでコンビニの雑誌のコーナーで立ち読みをして待ってくれる。

自分の事を大切にしてくれる友達がいる事に

深く感謝しながら、また新しいタバコに火をつけた。

しかし、タバコを吸って気分を変えようとしても

頭の中は さつきまで見せられていたカップル達の中睦まじい姿が焼き付いて離れなかった・・・。

診療前準備・7 (後書き)

次回から診療所内に舞台が戻ります。

## 診療開始・1

診療で使用するすべての器具を消毒・滅菌して

治療中に使用する備品などをすべて所定の位置にあるかどうかを確認していく。

一応、新人の教育係を一番上の先輩である壺井晴美つばいはるみ直々に任命されているので、

準備がしっかりと出来ているのかを確認してまわる。

ハルミさん曰く、

「指示を出した人間が、責任を持って確認をしなければならない」との事で、

後輩に任せただけからそれで終わりではダメだという。

ごもつともな意見である。

自分にも人にも厳しいハルミさんの事なので

私がチェックしているかどうかを、どこかで必ずチェックしているので気は抜けない。

確認作業を終えて消毒室に戻ると

床に、何かの液体がこぼれて床に小さな池が出来ていた・・・

誰の仕業か判らないが、知らずに踏んで滑ったら危ないし、

臭いがないので、危険な薬品でない事は判っているのだが

汚染された液体かもしれないので、とりあえずゴム手袋を二重にはめてペーパータオルとゴミ袋を持ってきて拭き始める。

だれ?! こんなの放置した人!!!

片付けてから移動してよ!!!

と、心の中で毒づきながら拭いていると

ハルミさんと先輩助手の津田理沙つだりさがこちらに向かって歩いてきた。

まずい時にまずいコンビが来てしまったよ〜！！

慌てて早く片付けようとゴシゴシと拭いてペーパータオルをゴミ袋に放り込むが

「なにしてるの？」

と、コソコソしていたのが災いしたのか、私の努力の甲斐むなし、あっさり見つけられてしまい

拳句の果てに、お前が犯人かと疑いの目で見られる……。

原因や犯人をとことん追及したい性格のリサさんにそう言われると正直に答えるしかないなので、作業を一度中断して立ち上がる。

「私ではありません。私が来たらこうなっていました。

もうすぐ診療時間なので先に片付けてしまいます。」

そう言うと、

「だれ？床を汚したの！」

と、リサさんが大きな声で犯人探しをしようとする。

診療時間前なのに事を大きくしたくなかったがこの人が騒ぎはじめたらしょうがないと

半分あきらめようとしたら

「綺麗に拭いておいてね。」

そう言つてハルミさんが歩きだした。

ハルミさんの顔を常に窺っているリサさんは

「だれか、ナジオを手伝ってあげて」と言つてハルミさんを追いかけ行つてしまった。

貴女達は手伝ってはくれないのね……

まあ、居ない方が気を使わない分はかどっていいけどね。

患者さんがもう待合室に入っている様子なので、

リサさんの大きな声が待合室まで聞こえる前に立ち去ろうという考  
えなのだろう。

取り合えず、話が大きな事にならなかったので一安心。  
そう思つて、もう一度ペーパータオルで綺麗に床を拭いて。  
強力な消毒液を撒いて二度拭きする。

本当に危険な薬品だったら不味いから、念のためにね

床を拭き終わってゴミを片付けていると。

「ごめん」

と、アラタ先生小声で謝りながら駆け寄ってきた。

「さつき、バー（歯を削る道具の先端）の消毒液をこぼしちゃって  
雑巾を探していたらサツキ先生に呼ばれて、誰にも頼めなくて。」

とりあえず、

一言誰かに言つてからサツキ先生の所に行つてほしかった・

つてか、なんで、バーのケースなんてこんな所に持ってきた

?!

この際、雑巾じゃなくても

ペーパータオルかティッシュで拭いてくれたらもつと良かったのに・・・

心の中ではブチブチ文句を垂れているが、  
口では

「大丈夫です。もう片付きましたから」

と、冷たく言つて診療を開始する為に、待合室の方に向かった。  
自分は大人だと思つていたが、アラタ先生に嫌味な態度を取つちや  
つた・・・

ごめん、まだ子供だったみたい・・・。

本人に直接謝れば済む話なのに、心の中だけで謝っておく。ふと、振り返ると、アラタ先生は少し落ち込んだ様子で壁に張り出された予定表を見ている。

おそらく、サツキ先生に何やら小言の一つでも言われて来た様子でその後に私に冷たい態度をとられたのでさらに落ち込んでしまったのだろう。

この人、本気で背中に哀愁ただよってますよあ〜。

ホントご愁傷様。

だからと言って、私は先生を慰めるつもりも関わるつもりはなかった。そのまま黙って立ち去る事にする。

自分の事は自分で頑張つてよね。

## 診療開始・1（後書き）

ようやく、診療室に戻れました。

ナジオとアラタ先生の仕事ぶりがこの後ずっと続きます。

専門的な言葉が多く飛び交いますが、  
なるべく補足説明を入れて判り易くしていこうと思います。

## 診療開始・2

「ここに赤いしるしが付いているでしょ？」

鏡を見ながらここが綺麗になるように歯ブラシで優しく磨いてみて」

私は今、子供の患者さんにTBI（歯磨き指導）をしている。

赤い染めだし液で歯垢を染めだして

どれだけ磨けているかと云うのを自分で確認して貰って歯磨きの練習をもらうのである。

「え〜。めんどくさい〜」

「面倒だよね？でも、綺麗に磨かないと虫歯になっちゃうよ？」

面倒だからって、大人なってもお母さんに磨いて貰う訳にはいかないでしょ？

頑張って、上手に磨いてごらん

有名な運動選手は歯が白いの知ってる？白い歯の方がカッコイイからだよ〜」

「知ってる！！でも、お母さんがあれは入れ歯だって言ってた。」

「差し歯だと思っよ・・・。」

よくある言い間違えに苦笑いをしながら話を続ける。

「スポーツ選手がさあ〜」

得点が入って笑っている時に見える白い歯ってカッコイイよね〜。

はい、白い歯を目指して赤い所が消えるように鏡を見ながら

はい！磨く！！」

「え〜」

文句を言いながらダラダラと歯磨きを始めるだが、

自分の知っているスポーツ選手の事を思い出したのか、

先ほどよりは念入りに歯磨きをするようになった。

子供に指導をする時はいかに興味を持たせるかが重要なことで、

目的も興味もなければ、歯磨きなんて面倒なだけである。

『虫歯にならないように歯磨きをしなさい』  
なんて、耳にタコが出来るほど言われているはずだが、  
良く『ちゃんと、歯磨きをしていても虫歯になったよ!』と言われる  
それは、“磨いている”のと“磨けている”の違いがある。  
たとえ一日に1回しか歯磨き出来なくても虫歯にならないと私は考  
えている。

虫歯になりやすいポイントを的確に徹底的に磨いていれば大丈夫!!

( 医学的に証明されてないけど・・・ )

ちなみに、私には1本も虫歯の治療痕が無い。

『そんなに言うなら口に中を見せて!』  
って、言われて見せる事もあるのでその時は素直に見せる。

人の口の中見て嬉しいか?!

私は仕事じゃなかったら見たいとは思わないぞ?!

素直に見せる私もどうかと思うけどな!

ちゃんと、歯磨きをしている様子をチラチラと確認しながら  
私はカルテに指導内容を記入しようと振り向くと私の背後にアラタ  
先生が立っていた。

どうやら、手があいていたのでサツキ先生に言われて私の指導を見  
学していた様子で、

カルテを自分の方に向けて覗き込んでいる。

「カルテいいですか?」

私がボールペンを握りながら静かにそういうと

「はい、すみません」

と、慌てて言って、アラタ先生はカルテを戻して一歩後ろに下がっ  
た。

そして、今度は

私が指導の時に使っている絵本や模型などを手に取って眺めている。

メーカーが市販している物もあるが、私が専門学校時代に作った教材などをTBIの時に使用している。自分で言うのもなんだが、良く出来た教材だと思う。

可愛い絵で判り易く説明出来ていると思うし、手作り感満載で温かみがある。

夏休みの宿題として製作したもののだが、自分がTBIをする時にこのように説明したいと思った事を盛り込んで作ったので

世界に一つだけの私の為の資料なので仕事で使うには最適である。なので、自分の指導時だけ使用させて貰っている。

私は、先ほど指導した指導内容を簡潔にカルテに指導内容を記入して

子供が磨き終わったのを確認すると仕上げ磨きを始める。

「鏡見て、ここね、虫歯になりやすいんだ。だからしっかりと磨いてね！」

歯磨きをする時に、力を入れてゴシゴシと磨いたら駄目だよ。

絵具についたパレットを洗う時、筆でゴシゴシ磨くより、毛先でやさしくこちょこちょってする方が早くきれいになるって知ってた？

それと同じ事なんだよ。だからね優しく、毛先を使って磨いてね。」

説明しながら丁寧に磨いていく

磨き終わってツルツルになった状態を覚えさせて

「いつもこうなるように頑張って磨くんだよ。はい、今日は終わり。口ゆすいで帰ってね。」

そう締めくくって指導を終了する。

子供を送り出した後、先ほどの患者さんの担当医であるサツキ先生の所にカルテを持って行って報告し

算定点数の記入をして貰って受付にカルテを持って行く。

先程まで自分が使用していたユニットチェアーの片付けを行い  
使用器具を消毒室に持って行って消毒する。  
消毒が終われば、また次の患者さんへと気持ちを切り替えて  
業務をする。

毎日、このような流れの繰り返しである。

### 診療開始・3

今の時間は

自分の患者さんは入っていないので、ゴム手袋をはずして手を洗ってなんの作業をしようかと考える。

サツキ先生にもコウイチ先生にもアシスタントがちゃんと付いているし

私がフォローする必要もなさそう

補充作業でもしよつかと補充が必要な物は無いかと見て行く。

ふと、手洗い場から

手洗い場の奥にある材料準備室でアラタ先生が石膏模型を見ながら考えている様子が窺<sup>うかが</sup>えた。

材料準備室で材料の補充作業をしようかと思っていたのだが、アラタ先生がいるのなら他の作業をしようと思手洗い場から移動しようとする

アラタ先生に呼びとめられた。

「なにか、ご用ですか？」

アラタ先生から少し距離を置いて顔を出すと。

「すみません、これ残り少なくなっていました。」

と、石膏の入っているケースを指さす。

「はい、判りました。」

在庫の入った棚から袋詰めになっている石膏の粉末を取り出して、ケースの蓋をあける。

ほんとだ・・・確か、朝確認した時は沢山あったのになあ・・・

そう思いながら、

ケースの中に粉末がこぼれないよう丁寧に補充する。

「私が今朝見た時は沢山あったんですけど・・・」

と、アラタ先生に言うでもなく小声で思った事を口にする

アラタ先生は苦笑いをしながらゴミ箱を指さした。

私は、嫌な予感がしながら

ゴミ箱を覗き込むと

そこには、固まって間もない石膏が大量に捨てられていた

「・・・もしかして、水の量を誤って、大量に粉末を投入しました

？」

「ええ・・・量で言ったら、フルマウスを3個流せるぐらいの量を・

・・・」

照れたように頭をかきながらアラタ先生はそう言った。

私は慌ててゴミ箱を取り出して、夕方にまとめて捨てる為のゴミ袋の中に放り込む

その上から丁寧に他のゴミ箱のゴミを掘り込んで隠す。

そして、

アラタ先生の方を向いてシーと、ジェスチャーで黙るように促す

「ハルミさんやりサさんにバレると、うるさいですから・・・」

小声でそう言うてから、周りの様子を窺う。

大丈夫、誰も居ない。

「もったいないお化けに小言を言われますから気をつけて下さいね」  
もちろん、『もったいないお化け』とはハルミさんとリサさんの事である。

アラタ先生は苦笑いしながら私につられたのか「ハイ」と小さい声でく事をした。

人の失敗には厳しい人たちなので、二人に見つからないように証拠

隠滅してしまうに限る。

穩便に事を進める為に覚えた処世術である。

（見つかった時は、倍以上の威力で説教されるのだが・・・）

私は、さっさと残りの石膏の粉末を棚に直して

バイブレーターと呼ばれる石膏を流す時に、

気泡を抜いて均等に石膏が流れるようにする器械が汚れているので、

取り外しが可能なラバー部分はずして水道で洗い流し、

器械本体についた石膏も綺麗に拭きラバー部分を元に戻した。

まるで、子供の後片付けをする母親みたい・・・。

私の後ろで黙って私の作業を見ていたアラタ先生が「ありがとう」  
「ございます」と声をかけてきたが、

「いいえ」と軽く頭を下げただで、ではと、小さく声をかけてさっ  
さと部屋から出て行った。

手が空いている時は診療所内の動きがよく見える場所で、一人でガ  
ーゼを折ったり、補充作業をする事にする。

他のスタッフと離れるのは、一緒にいるとついつい話をしてしまっ  
から、

スタッフ同士がダラダラと無駄口を叩いているのは、

傍から見てもあまり良い光景ではないし

誰も見ていないと思って気を抜いていると、

自分から見えない場所から見られていたりするので仕事場では気を  
抜いてはいけない。

女の園で敵を作らない事が一番！

仕事が終わって電車で揺られながら

窓から見える街の明かりに目をやる。

暗い夜空に浮かび上がるぼんやりとした月と

片手で足りる程しか見えない数の星

星の数よりも何百倍も多い家の明かりと街頭の明かりが  
流れるように飛んでゆき

その景色を背景に少し疲れた顔押しした私の顔が窓にくつきり映って  
いる。

毎日変わらない景色の

知らない人たちが暮らす家の明かりにぼんやりと目をやりながら  
今日一日頑張って働いた自分を心の中で誉めてあげる。

ほんの些細な事でも、良く頑張ったと褒めてあげるのだ。

本当は誰かに誉めてほしいのだが、

一人暮らしなので家族とはあまり顔を合わせないし

彼氏もない。

『なんでも出来て当たり前』の社会人になってしまうと、人に褒め  
られる事なんて稀である。

一番身近にいるのはミオなのだが

ミオの性格上が誉めてくれるはずもないので、

自分で自分をほめてあげるのである。

今日も一日無事に乗り切ったね。

明日も、失敗しないように頑張って働こうね。

電車から降りて、駅の近くの遅くまでやっているスーパーで晩御飯  
の食材を買って家に帰る。

明かりの消えた家に入るのはいつも寂しく感じるが  
自由を時間出来る気楽さを選んだ一人暮らしなので  
寂しいなんて気持ち、すぐに忘れる。

お風呂も簡単な晩御飯も終わると、ラジオを聴きながらベッドで  
読みかけの本を開く

いつもはすぐに本の世界に入り込めるのに

今日はなかなか集中できなくて

さつきから何度も同じ所を読んでいる。

いつもより時間は早いのだが、本を読むことは諦めて電気を消して寝る事にする。

ラジオは眠る直前にリモコンで電源を切るようにしている。

薄暗い室内にラジオから話題の最新曲が流れてきたが、やはり耳には残らなかった

本当に最近では自覚が出来るほどに「心ここにあらず」な状態が続いている。

海でミオに彼氏が出来ない原因を追及されてから

心のどこかに大きく開いた穴ばかり気にするようになってしまった。

・・・やっぱり彼氏が欲しい・・・。

そんな自分の気持ちに気がついた。

一番身近なミオですら

毎日べったりと一緒に居る訳ではない。

ミオにはミオの時間があり ナジオにはナジオの時間があるのである。

だから、仕事以外は一人になる事が多いのが現実である。

ミオには早くいい人を見つけて幸せになって欲しいと思っているが

その時になったら 私はどうなるのか？ という不安もある。

親友の幸せを願う傍ら

自分の傍にいつまでも居て欲しいと願うエゴイズム

自分自信が本当は何を望んでいるのかが判らなくなってくる。

そんな事をつらつらと考えているうちに

なんとなく睡魔が襲ってきた感じがしたので、  
ラジオの電源を消して目を閉じると  
静かに眠りに落ちて行った。

ひと肌が恋しい・・・。

## 初診・1

診察室の一番奥の診療台で子供に虫歯予防の為の「シーラント」と呼ばれる薬を歯のかみ合わせの溝に充填し終えて、

母親に虫歯になりやすい場所や仕上げ磨き方のポイントなどを指導する

口腔衛生指導こうくうせいせいしうどを行った。

診療を終えたのちに報告の為に子供の担当医師のもとに向かっていると

アラタ先生の声で話すとどどしい英語が聞こえてきた

どうやら、

初めて来た患者さんは日本語があまり判らない様子で、英語で問診をしている最中のようなのである

相手も日本語よりは英語の方が理解出来るようではあるが、あまり順調には進んでいない様子が感じられた

通り過ぎざまにカルテを見ると

漢字で名前が書かれている。

### 中国か韓国に多い名字

そう思いながら、やり取りに目をやると

困った顔をするアラタ先生と小柄な女性の患者さんがなんとか意思の疎通を図ろうと

一生懸命にやり取りしている様子が窺えた。

アシスタントについていた女の子の方を見ると

自分ではどうする事も出来ないので、

ただじつと先生と患者さんの様子をうかがっているのが現状のようである。

私はその場を足早に離れて

先程の自分が治療を担当した子供の担当医であるサツキ先生に  
処置内容と指導内容の報告を行いカルテに算定点数を記入して貰い、  
大急ぎで片付けを終えてから  
予定表を見ながら自分の予定が空いているのを確認して、アラタ先  
生の診療台に向かった  
私は静かにアシスタントについている女の子の横に立って  
いつも持ち歩いているメモ帳に「どこの国の人？」と書いて見せると  
そのメモ帳に「韓国」と書いて私に見せる。

ああ、韓国出身か・・・。

私は、先生と患者さんの会話が途切れるのを待って声をかける  
「（失礼します。」

私、簡単な韓国語ならを少し話せますが、私の韓国語判ります  
か？）  
「たどたどしくではあるが、  
ゆっくりとした口調で私がそう言った瞬間、  
患者さんが一瞬ビククリした表情をしてから安堵の表情に変わった。  
」（判ります！ 良かった韓国語を話せる人が居て、本当に良かった！）  
「

そりゃそうだよね、外国に来て言葉が全く通じない所に  
言葉が判る人が居たら嬉しいよね！

ジエスチャーでアシスタントの女の子に席を代わって欲しい旨を伝  
えて替って貰い  
私がアシスタントチェアに座ると  
患者さんは嬉しそうに早口で話したそうとするのを慌てて止めて、  
とりあえず

私が簡単な日常会話程度しか話せない事は伝えておかなければなら

ない

その点だけは、しっかりと伝えておかなければならない。

「（あまり難しい言葉は判りませんから簡単な言葉でお願いします。それと、出来ればゆっくり話して下さい。）」「

安心感を与える為に笑顔でそういうと。

患者さんもニツコリ笑って頷いてくれた。

患者さん私の希望通りゆっくりと話しました

「（昨日から左上の奥の歯が痛いんです）」

「（どんな時に痛いですか？ 食事中？寝てる時？ずっと？）」「

「（ずっと痛いです）」

「（判りました）」

そう伝えてから、顔を患者さんの方からアラタ先生の方に向けてる。

「アラタ先生の言葉をそのまま伝えますから、

先生はいつも通り患者さんに言葉がけして下さいね。

患者さんがおつしやるには、

昨日から左側上額さそくじょうがくの臼歯きゅうし又は大白歯だいきゅうしに痛みがあるそうです。」

私の予想外の行動に動揺していたアラタ先生は

急に我に返った様子で「診察します」と言った。

お〜！この人、順応性が高い！！

いいことだ〜。

「倒しますね」

「（椅子が動きます）」

ゆっくりと椅子が倒れると患者さんは大きく口をあけた

アラタ先生は女性にミラーを見せながら

「鏡で確認しますね」

「（鏡で口の中を見ますね）」

私は素早く胸に刺してあったペンを手に取り カルテの歯の絵が描かれた表に書き込む準備をする

「歯式取ります 右上から」

アラタ先生はミラーで全体的に患者さんの歯の部位と治療痕を言いながら診ていく

私はアラタ先生が言う治療痕をカルテの歯の絵に記号にして記入していく

一通り観ていきアラタ先生の手が左上の奥歯で止まった

「痛かったら教えて下さい」

「(歯を触ります。痛かったら教えて下さい)」

「痛いのはここですか？」

「(ここですか?)」

ピンセットで軽くコンコンと叩くと患者さんは顔をしかめてうなずいた。

「左側上顎6番の頬側、

歯石が原因で歯肉炎を起こしているようです。

動揺はありません。

原因はこれかと思えますが念のためにデンタル撮ります。」

歯の表のアラタ先生が言った部位にZsとGと、記入した。

「パノラマとデンタル撮影の説明お願いします。」

「(鏡を持って口の中を見て頂けますか?)」

ここが赤くなっているのが判りますか?

原因はこれだと思えますが、他に痛み原因があるかもしれませんので歯の写真も撮ってもいいですか?)」

近くに置いてあったパノラマと呼ばれる口全体を撮影したものと2

3本だけを撮影した小さなレントゲン写真を手に取って見せながら

言つと

「(判りました)」

「(妊娠していませんか?可能性はありませんか?)」

「(大丈夫です。撮影して下さい。)」

「(では、こちらへどうぞ)」

チェアを起こして 患者さんをレントゲン室へと誘導する

レントゲン室の前で患者さんに被爆防止の鉛の入ったエプロンをつけてもらい

まずは口全体のレントゲン写真を撮影

そして、部分的な小さな写真を1枚撮影した。

アラタ先生はレントゲンの撮影ボタンを押しながら 私に小さく微笑んだ。

業務中なので私はあえて無視――。

つつつか、撮影中に患者さんから目を離さないように！

撮影が終了して患者さんはさっき座っていたチェアに戻って貰った。

その間、いつもなら雑誌などを渡して待ってもらうのだが

日本語は読めないであろうと推測して、患者さんと小さな声で雑談をして過ごす。

しばらくしてから出来あがったレントゲン写真を

先ほどまでアシスタントについてついていた女の子が持ってくれたので

アラタ先生はライトボックスに置いて観ながら患者さんの診断が決まったのか

私の方を向いて診断結果を伝えた。

「歯肉炎ですね。P<sup>プル</sup>U<sup>ル</sup>（歯髓炎<sup>しすいえん</sup>と呼ばれる歯の神経の中に菌が入って炎症を起こす症状のもの）ではないようです。

P<sup>プル</sup>処（スケーリングと呼ばれる歯石や茶渋やヤニを除去する治療の事）して様子を見ましよう

処置中、痛みが強いようだったら浸麻<sup>しんま</sup>（浸潤麻酔<sup>しんじゆんますい</sup>と呼ばれる局所だけ麻痺状態を起こさせて治療中に痛みを感じないようにする処置の事）します。

伝えて貰えますか？」

「はい」

治療の説明の時に使用している額模型がくもけいを引出しから取り出し患者さんに見せる。

この額模型にはいろいろな種類の歯の治療の見本で並べられてある。いま、説明したいのは、

治療の仕方ではなくどの場所がどのような状況になっているかの説明なので、

別の引出しから、TBI（歯磨き指導）の時に使用している歯茎の状態を絵にしたノートを取り出して自分の膝の上にのせておく。

『（先ほども説明しましたが、ここにこうというのが沢山付いているのが原因で痛みが出ているようです。今から機械でこれを取り除く治療をします。

すぐには良くならないと思いますが、少しは痛みが無くなると思います。

治療中痛みが強いようでしたら痛くないようにする注射をしますのと言って下さい。』

治療をしてもいいですか？」

模型と絵を使用して患者さんの今の状態を自分の眼で確認して貰う。

「（判りました、治療をお願いします。）」

「治療OKです。」

額模型とノートを片付けながら後ろで私が説明しているのを聞いていたアラタ先生に報告する。

「判りました」

「私、サツキ先生のところへ報告に行ってきます」

そう言ってカルテとレントゲンを受けと取るとサツキ先生が治療を行っているチェアーへと向かった。

失礼しますとの後ろから声をかけて簡単に状況報告を行う。

日本語が話せない患者さんが来院されていて、私が対応しているの

は報告されている様子だが

手短に私がアシストについている経緯を報告してから

サツキ先生が治療で使用しているユニットチェアのライトボックスに

一言断りを入れてからレントゲン写真を置いて

アラタ先生の診断結果を伝える。

本来ならば、アラタ先生が報告するべきなのだが

ドクターがサツキ先生に報告をする現場を今から治療を受ける患者さんが目撃すると

何事があったのかと不振に思うだろうし、

アラタ先生が頼りないという印象を与えかねないので私が代りに報告を行うのである。

私の報告を聞きながら

治療の手を止めてレントゲン写真を見ながら私の説明を聴いていた

サツキ先生は

「判った」と言って、

また自分の患者さんの治療を再開した。

サツキ先生は、治療はアラタ先生に任せると云う事を無言で語っているのである。

私は「失礼しました」と、挨拶をしてから

アラタ先生と患者さんの待つチェアに足早に戻った。

「報告・連絡・相談」は社会人として必ず心得ていなければならぬ  
い事

今回のような特殊事例の場合以外でも

一応、上の人間に筋を通しておかなければ後々面倒な事に発展する事もあるのです

絶対に行うようにしている。

とくに、今回の様な事例の時は情報がある程度共有しておかないと私の単独行動ととられてあとで何を言われるか判らないので

しっかりと確認をとって行動した方が得策なのである。

「サツキ先生OKです」

小さな声でそう言っただけでカルテをアラタ先生に手渡す。

アラタ先生はほっとした表情を見ながらも、

治療は今からだと言った表情を引き締め直し、治療の準備を始める。

「スケーリング（歯石除去）しますエアスケとハンドスケーラーの準備をお願いします」

私は、アラタ先生に言われたエアスケ（エアースケーラーと呼ばれる機械の略称で歯石を除去する際に使用する）

を手渡してテーブルの上にハンドスケーラーと呼ばれる歯石を除去する為の器具を並べて

この治療が必要だと思われる器具などを直ぐに手の届く場所に置いてアシスタントチェアに座りアラタ先生の治療の補助をする為に座るアラタ先生は痛みが出ていた部位の歯石を丁寧に除去し

私も横から唾液と水をバキュームで吸引しながら、アラタ先生の視野を確保し

先生が動きやすいようにアシストしていく。

患部に抗生剤の薬を塗布する事を患者さんに伝えるよう伝えてから塗布し

患者さんに言葉かけをしながら丁寧に治療を進めて行く。

治療は無事終了し

処置が終わった事を告げてチェアを起こしてうがいをしてもらう。患者さんもアラタ先生も改めてほっとした表情を見せた

私は受付まで付き添い次の予約や支払いなどのやり取りを説明し終わった帰り際に

患者さんは私の手を取り

『貴女に会えて本当に良かった ありがとう』と言って帰って行った。

先ほどまでの状況は診療所中に知れ渡っており

スタッフを始め、成り行きを見守っていた他の患者さんにまで労を  
労われた。

特にアラタ先生には

「ナジオさん凄いですね！！すごく助かりました。ありがとうございます  
います。」

と、言いながら片づけをしている私のもとへとやって小声でお礼の  
言葉を述べてきた。

私はそれに対して曖昧に返事をして流しながら自分の業務に戻った。

実は、以前に付き合っていた彼氏が韓国出身だった事が切っ掛けで  
韓国語を勉強した事が

今になって活かされなどとは、職場では言いたくない話なのだが、  
ナジオがなぜ韓国語が話せるのか？

と、昼休憩の時にスタッフの間でいろいろな憶測が飛び交って大変  
な事態になってしまったので

「韓流ファンです」の一言で事なきを得た。

韓国映画が好きな事に変わりはないので、あながちウソではない。

話題も「ナジオも意外とミーハーだったのね」という結論で落ち着  
いてくれたらしい。

良かった・・・韓流ブームなるものが存在して・・・。

と、心から韓流ブームに感謝した。

## 初診・2

仕事が終わわり、背広姿のサラリーマンや仕事終わりのOL風の女性がチラホラと

まばらに建っている駅のホームで

携帯のメールチェックをしようと鞆から取り出すと

「ナジオさん お疲れ様です」

相変わらず学生のようなラフな服装をしたアラタ先生がにこやかに笑って

声をかけてきた。

「あ、お疲れ様です」

携帯を握りしめたまま、私もつられて笑顔で挨拶する。

「今日は本当に助かりました サツキ先生に『アラタ先生とナジオは外国人担当に決定』って言われてしまいました。今日ほど本気で英会話の勉強をしとけば良かったと思つた事なかつたですよ!!」

「でも今日の患者さんには英語判らなかつたみたいですけどね。」

私もサツキ先生に言われましたよ『今度から外国人担当』って、

でも、私の母国語は日本語なので第一言語は日本語ですが、第二言語が韓国語だからその他はキャパオーバーで無理ですよ。」

笑いながら携帯を鞆に入れながらそう言うつと

「ナジオさんつて、なんで韓国語が話せるのか聞いてもいいですか？」

アラタ先生の控えめに見せかけた直球な質問に、

またその質問か・・・と、思い

「嫌でえ〜す」と、笑いながら冗談めかして、実は素直な気持ちでそう答えると

アラタ先生が大好きな玩具をいきなり取り上げられた子供のような表情をした。

意外と子供っぽい表情をする可愛い人だな……。

アラタ先生のそんな表情を見て、  
一瞬でも可愛いと感じてしまった自分にドキツとした。

そんな自分の気持ちをかき消すように、私はわざと明るい声を出す。

「冗談ですよ。」

韓国語は、韓国映画が好きで字幕で良く観るんですけど、  
微妙にニュアンスが違っていているような違和感を覚えたので、  
字幕なしで映画が見れるようにと、独学で勉強してたんです。  
今は忙しくなって辞めてしまいましたが。」

他のスタッフに聞かれるたびに繰り返した発言を少し丁寧に説明すると

アラタ先生は素直に信じてくれたらしい、  
ナジオさんは努力家なんですな〜などと言っている。

なんか、単純……いや、素直な人、なんだ……。

「ナジオさん、今日のお礼に飲みに行きませんか？僕が奢りますから！！」

「お礼と言われて、私も仕事でした事ですから……」

いきなり言いだしたアラタ先生の提案に仕事を理由に条件反射でや  
んわりと断るが

断ったにも関わらず頭の隅の方では、一瞬どうしようか悩んでしま  
った。

極力職場の人間と関わりたくない

でも、もう一人の私が

（面白そうだから、このままアラタ先生と飲みに行こうよ！）  
と、主張している。

ちよつと可愛い表情をしたアラタ先生を見てしまった事で、先生に少くしだけ、興味がわいた事で迷いが出た。

ここで断るのも失礼だし・・・

などと、いつもでは考えられないような考えが頭をよぎる。

「ナジオさんの最寄駅でいいですから！！ここだと誰が見てるか判りませんし」

アラタ先生がそういうと

丁度タイミング良く 私が乗る方面の電車が到着を告げる音楽と共にホームに入ってきた。

断ろうか、行こうかと

返事に困っていると

アラタ先生は「行きましよう」と私の腕を取って電車に乗り込んだ。

意外と強引？！

アラタ先生の予想外の行動にドキドキしながらも電車に乗ってしまったのなら仕方がないと、

「では、一杯だけ頂きます」と返事をした。

なんだが、アラタ先生のいろいろな一面が垣間見えそうであるし・・・。

アラタ先生は満々の笑みで「はい、一杯だけ」と、まるで子供のようにニッコリと笑って返事をした。

さつき歯科の最寄り駅から私の部屋のある最寄り駅まで2駅

お店も私が決めていいと云う事になったので

駅の近くの雑居ビルの1階にある『インパルス』と云う私とミオが行きつけにしているお店に入った。

お店の内装はログハウス風で南国テイストのあるインテリアと木の色合いで

温かみを感じるアットホームな雰囲気売りしているお店である。お店に入るとインパルスのオーナーのが「ナジィーお帰り」と厨房から声をかけてきた。

いつもだったから元気に「ただいま〜!!」と返事をするが今日はアラタ先生と一緒になので曖昧に笑って手を振る

いつも座るカウンター席をスルーして、

今日は他の常連客の人と絡みなくなかったので店の奥にあるテーブル席に座る。

「ナジィーいらっしやい こちらは彼氏かしら？」

「はい、私 アンナ。」

ハイビスカス柄のアロハシャツを着たウエイトレスのアンナさんがおしぼりを私たちが座った席に置きながら アラタ先生に「アンナと呼んでね」と魅力的な笑顔を浮かべながら挨拶する。

私は苦笑いしながら

「先生こちらは山本杏奈さん通称アンナさん、オーナーの奥様です。アンナさんこちらは同じ職場のドクターで赤松先生です」

手短かに紹介する

「はじめまして、赤松です」

と、砕けた挨拶をしたアンナさんとは打って変わって

アラタ先生は立ちあがって丁寧に頭を下げて挨拶をした。

・・・しかも45度の角度で・・・

なんだ？この人!!

アンナさんは笑顔を浮かべたままくるつと私たちに背中を向けて小さくブツと嘖き出して小さく肩を震わせて笑っている。

あ・・・アンナさんのツボに入った・・・

そんな様子を知ってか知らずか

「僕はオーナーです」と、厨房からオーナーの声だけが聞こえてきた

料理を作っている最中で手が離せない状態にある様子にもかかわらず声だけでも私たちの会話に参加したかったのだろう。

そんなオーナーの気持ちを汲んだのかどうかかわからないが

アラタ先生はすつと席を立ててオーナーの顔が見える位置に歩いて行き、

「赤松です」と、また45度の角度で頭を下けている。

律儀だね」とアンナさんと私は顔を合わせて笑った。

すると、厨房から

アンナさんとおそろいのハイビスカス柄のアロハシャツを着たオーナーが

料理そつちでフロアーに出てきた。

「インパルスオーナーの山本です。」

オーナーでもマスターでも山本でも好きなように呼んでください！

「！」と、アラタ先生の手を取ってブルンブルンとふりながら挨拶していた。

そこにノリのよい常連客まで挨拶に加わって「客の白井です」「客の鈴木です」などと、勝手に自己紹介をしながらどんどん手を上のせていく。

「オーナー、なんだか焦げくさいに匂いが・・・」

「ああ！！火を止めるのを忘れてた！！」

「俺の注文した料理が〜!!」  
と、なんだかミニコントのようなドタバタ劇をアンナさんと私はお  
腹を抱えて笑いながら見守った。

アラタ先生って面白い・・・。

## 初診・3

ようやくオーナーと常連客達に開放されたアラタ先生が席に戻ってきた時を見計らって

アンナさんがビールとおつまみを運んできてくれた。

先生が戻ってくるまでの間、私は・・・放置されました。

はい、完全に放置です。

私など初めから存在しないかのような勢いの放置振りでした。

ここまで放置されると、コッソリ帰ってやろうかと正直思いましたね。マジで。

ようやく帰って来たアラタ先生を

思わず拗ねたように冷やかな目で見てしまったのはここだけの話です・・・。

取り敢えず気お取り直して、「今日も一日お疲れ様です」って事でビールで乾杯。

コクコクとビールで喉を潤して一息つく。

改めて、店内を見渡していたアラタ先生は

「お店も人もいい雰囲気ですね。」

今度から個人的に使わせていただいても構いませんか？」

オーナーと常連客達と難なく意気投合していたので、

オーナー達も大歓迎して迎え入れてくれるだろう事は判っているのだが、

店を紹介したナジオに了承を得てからと考えたのだろう。

相変わらず、律義な人である。

「不思議と落ち着くでしょ？」

どうぞ使って下さい オーナーも先生の事を気に入ったようですよ  
そういつて、私はビールをチビチビ飲み  
アラタ先生はゴクゴクト美味しそうにビールを飲みながら  
おつまみを口に放り込んでいる。

「先生、さつき歯科にはもう慣れましたか？」

私がそう聞くと、アラタ先生は複雑そうな表情をして  
「正直、まだ慣れていません。

今まで、男ばかりの環境に居たので、女ばかりの環境ではどうして  
いいのか

まだ判らない状態です。」

「女ばかりの環境ってちょっと複雑ですからね・・・大丈夫、先生  
なら上手くやれますよ。」

「少し、時間がかかりそうです・・・鬼追先生はどうだったんです  
か？」

鬼追先生とはアラタ先生の先輩のドクターで鬼追<sup>きおひこういち</sup>紘一の事で私たちは  
コウイチ先生と呼んでいるが、アラタ先生は鬼追先生と呼んでい  
るらしい

コウイチ先生は根っからの女好きで、さつき歯科の女性陣の輪の中  
に溶け込むとは意外と早かった。

そして、私が働く上で一番厄介な存在でもあった。

「コウイチ先生はすぐに馴染んでらっしゃいましたよ・・・いろ  
んな意味で・・・」

溶け込み過ぎて、たまに「セクハラ?!」と思うような発言を真剣  
な顔で

言ってくるので正直困っている・・・。

お茶目で憎めない性格なのだが、私をからかって楽しんでいるのか  
いつも困った発言をしては、私の反応を見て喜んでいる。

「いろんな意味って云うのは、判る気がします・・・。

ナジオさんもその・・・何か言われるんですか？」  
心配そうな表情で聞いてくるアラタ先生の表情を見ると  
どうやら、コウイチ先生はアラタ先生には露骨なボイストークを  
しているようである。

わーあ、絶対聴きたくない！！

想像するのもヤダわ！！

「たぶん、

先生とお話しされている内容よりはオブラートに包んでいると思  
いますよ。

そうでなければ、今頃あそこに居れない状況になっていると思  
います。

だって、あの人・・・常に脳内『どピンク』なんですもん・・・」

「確かに、発言が『どピンク』ですよ・・・

なんか、自分で聞いたといてなんですが、想像するのも怖いすね」

二人で苦笑いをしながらまたビールを一口

「コウイチ先生って真面目にセクハラ発言されるんですけど、  
なぜか許してしまうんですね・・・」

あそこまで脳内『どピンク』だと、逆に個性として認めてしまっ  
た感があつて・・・」

「ナジオさんのにギリギリセーフですか？」

「普通にアウトです。」

私が即答すると

アラタ先生は笑いながら「やっぱりアウトなんですね」「などと言  
っている。

普通にセクハラ発言の時点でアウトでしょ？

「例えば？なんて言われるんですか？」

なんだ?! 私にコウイチ先生の脳内『どピンク』具合を披露しろってか?!

まあ、どうせ、先生にも言ってるだろうからこの際話してしまおう?

例えばですか?

私はそう言って、最近あった出来事を話しました。

「私たちの白衣ってワンピースのフラスナータイプと前ボタンタイプ二種類あるじゃないですか?

この間、エプロンをつけない方のボタンタイプの白衣の時にボタンがお腹の所の1か所留め忘れていたみたいで外れてたんです。それで、コウイチ先生が教えて下さったんですけれど、

『ナジオさん、ボタン一つ開いてるよお?』

手、入れたくなるからさあ。早く留めた方がいいよ。

それとも、入れてもいい?』

って、真剣な顔して言われたんです。

しかも、準備室で器具出してる時に背後から耳元にこっそりと!! なんちゆうタイミングで嫌がらせして来るんだ?! って正直思いましたよ。

ビックリして、器具を落として不潔にってしまう所でしたし。

もっと違うシチュエーションで他の言い方してくれたりいいのに・・・って思いませんか?!

男性から女性の服のボタンが外れているなんて言いにくいのはわかるんですけど

背後から耳元で言われたのと、『手をいれる・・・』の時点で違うと思います。

セクハラ以外の何物でもないですよ!!」

「背後からって・・・でも、あの人ならやりそうで・・・言いそう

・・・」

アラタ先生は若干引きながらも、コウイチ先生なら・・・と納得したようす。

納得されてるし・・・コウイチ先生アラタ先生と二人の時  
一体どんな会話してるんだろ・・・気になるけど、絶対聞きたくない！！

「僕が言ったら、やっぱりアウトですよ？」

アラタ先生は診療所では見せない

面白い悪戯を見つけた子供のような表情をしている

「職場で言った時点で、誰が言ってもアウトでしょ？  
でも、

アラタ先生はコウイチ先生みたいな事をおっしゃらないでしょ？

ここに、引き合いに出される事じたい間違ってます。」

判らないですよ〜とか言いつつアラタ先生は照れたように笑っている。

何が判らないんですか？！

アラタ先生がコウイチ先生のキャラにキャラ替 希望ですか？！

ありえない・・・「45度の礼」人が・・・。

「そのあと、どうされたんですか？」

アナザワールドに飛んで行きそうになった思考を無理やり現実連れ戻す。

「どうもしませんよ。黙ってボタンを留めて、すぐに立ち去りましたから」

「ナジオさんってクールですよね」

「いえ、逆にそこで騒ぐ方が恥ずかしかったんで」

「やっぱりクールです」

「それって、誉めてます？けなしてます？」

「誉めてます」

子供っぽい笑い方でそう言われると

アラタ先生と一緒にお酒を飲むのも悪くないなどと思ってしまうた。

## 初診・4

あのあと、しばらく雑談してから

一杯だけの約束だったので、私は先に帰る事にした。

アラタ先生はインパルスのオーナーと常連客達と意気投合した事もあつてそのまま残留。

私は、オーナー達にアラタ先生を任せた事で心おきなく我が家の建物の前に立って自分の部屋に目をやると部屋に明かりがついていた。  
。。。

ヤツがまた来てる。。。

ため息をつきながら部屋の鍵を開けて中に入ると

「お帰り〜い〜」っと、テレビを見ていたらしいミオが、いかにも待ちくたびれた〜

感じの気だるい挨拶をしてきた。

また連絡もなく勝手に鍵を開けて部屋に上がったな〜!!

しかも、

部屋に勝手に置いて帰ったジャージに着替えて我が家のように寛ぎながらテレビを見ている。

ここは、あなたの別宅ではありませんよ?!

それに、

ご飯の準備をしてくれていたらしく

部屋の中に暖かいご飯の香りが漂っていた。

絶対、今日泊っていくつもりだわ……。

そんな、ミオの予想外のだが想定内の行動に私が疲れたように「ただいま」と返事を返すと無言で歩み寄ってきたミオにバスタオルを手渡された。

私の習慣を良く御存じで……。

そんな事を思いながら、私も無言で鞆を玄関に置いてバスタオルを受け取る。  
着替えを取ろうと衣類を納めた小さな箆笥に向かうとどうやら、洗濯物を取り込んでくれうえに綺麗にたたまれている。

これは、家事をするから今日は泊めろっていう、無言の『お願い』だな……

そんな事を確信すると、私はさっさとバスルームに向かう。

今日は長湯をせずさっとシャワーを浴びただけで

お風呂からあがると

見計らったかのように食卓に暖かいご飯が並べられる。

ミオが作った野菜炒めと煮物が食欲をそそる良い匂いだと思いつつ私は冷蔵庫の中から作り置きしてあったきんぴらゴボウを器に盛り付けて並べる。

小皿やお茶碗・湯呑を棚から出して食卓に並べていたミオは

「頭乾かしてきなさいよ」と言っ私をドライヤーのある洗面台に押しやった。

「はぁ〜い」と子供のような返事をして髪の毛を乾かしに行く。

髪を乾かし食卓に戻ってくると

ミオは食卓に食器をセッティングし終わっていて、本棚の前で適当

に本を読んでいた。

「ナジオさ、こんなたくさん本があるのに　なんで一冊も恋愛小説がないの？」

SF・軍記・歴史・ミステリー・サイコスリラーとかばっかりで、  
って

生きもの図鑑って何？　これが一人暮らしの女性の本棚？！」

「生きもの図鑑は大切よ？」

都会っ子の私にとって子どもと話をする為の必須アイテムよ！！  
虫の名前を知ってるだけで子供に尊敬されるんだから！

私は大人にも子供に喜ばれる衛生士を目指してるのよ！」

「あつそ、衛生士さん頑張ってる自然の動植物を勉強されて下さい」  
そう言っつてミオは本を本棚にしまつて食卓の椅子に腰かけた

「早く座つて　早く食べよう」

ミオはそう言っつて私席に座る前にご飯を食べ始めた

「え?!　ここまで待って　このタイミングで食べ始める?!」

「いいじゃない、別に」

「別にいいけどさ」

いただきますと手を合わせてから私も食べ始める。

「今日は仕事遅かったの？」

ミオは煮物をほう張りながらそう聞いてくるので、正直にアラタ先生と飲みに行った事を伝えた。

「へえ」。あんたが忘年会以外で会社の人と飲みに行くなんて珍しいね。

アラタ先生つて歯科医にしてはマシな方じゃないの？」

「どうだろうね・・・遊んでそうには見えないけど、

私、男を見る目はないみたいだから　判んないわ」

野菜炒めを頬張りながらそう答えたる。

実際のところ、今日までアラタ先生にまったく興味がなかったの、  
アラタ先生の事を「歯科医師」という事以外何一つ知ろうとしな

った

ミオの云う「マシ」にアラタ先生が該当するかどうかは判断しかねると云うのが正しい表現かもしれない。

「あんたが飲みに行くぐらいだから、マシなんでしょうよ。」

で、職場ではどんな感じなの？」

「どんな感じって・・・、今まで男が半数を占めるような環境にいきなり女ばかりの環境に放り込まれた子羊って感じ？」

「女の園ってきついからね・・・弱い者には容赦がないから」

「ねえ、私の職場の話は止めよう。今日は、なんかあつて来たんでしょ？」

「そつなよ！！聞いて！ 今日職場でさ！」

会社で製造技術アシスタントとして働く澁は会社の愚痴をこぼしたくて私の部屋に來た事を思い出したかのように語り始めた

「現場に出た事がなくて 書類の数字だけを見て判断してる大バカ者が多すぎるのよ！」

伝票なんて品物の型番しか書いてないのね その違いがわからないくせに

『なぜこれを使用するんですか？』って！

使い勝手がいいからに決まってるじゃない！！

メーカーのバックアップ体制がしっかりしてる品物だし

多少値が張ろうとも 確かなものを使って今の状態をキープして長く大切に使うのに

『こつちの方が安いから変えて下さい』なんていうのよ！！

確かに安いのも でも量産品でね 今使ってる物より壊れやすいし仕上げも悪いしで

メーカーの保証がない物を押してきたのよ

そうなるよ、お客さんのメンテナンスや修理に駆り出されちゃって余計にランニングコストがかかっちゃうからやめた方がいいですって言ったの。

でも、たとえばそれに変更して故障が頻発して苦情が多数着たら貴方が責任を取ってくれるのよね？って、言ったら

『コスト削減を提案するのが僕の仕事です あなたの仕事は決められた予算の中で最善を尽くす事なんじゃないんですか？』なんて言うから

それだったらあなたの推薦する商品のメリットを書面にして提出して下さい

デメリットを書面にして叩きつけて差し上げますから。って言ったら

『今、コスト削減を提案しております』の一点張りなのよ！

たぶんあれは、大人の事情みたいなものが絡んでるんだと思うんだけど、

コスト削減とか言って、適当な物を作ってユーザーさんの信用落とす方が

問題あると思うのよね。

コスト削減するんだったら要らない機能を削減したらいいのに！

小さい部品のコストを削減したって 故障しちゃったら

メンテナンスに手が取られて余計にコストかかるって！！

そんな事も判らないのが最近揃っちゃって困ってるのよ！」

一気にまくしたてる溼に「技術職も大変だね」などと軽く受け流す  
歯科医院でしか働いた事のない私にはまったく理解できない遠い世界の話である

「人間より機械の方が大切だからって冷房ガンガンに効かせた部屋に居るから

外気との温度差で体がダルイしさ」

若造は訳わっかんない事ばかり言ってくるしさ」

おっさん達の接待に付き合わされると 『結婚しないのか？』なんて言われるし！！」

若造って、あんたも若造の分類に間違いなく当てはまるよ？

なんて思いつつ、決して口には出さない……。かわりに  
「大変だねO.Lって・・・ビール飲む？」などと云いながら席を立つ  
「ビール頂戴！！ 飲まなきゃやってられないわよ！」  
と、返事するミオ。

わゝあ、今日はとことん飲む気だ〜！！

私は苦笑いをしながら黙ってミオにビールとグラスを渡し 自分用に焼酎のお湯割りを作って戻る

「『結婚』って女同士で牽制しあっちゃってるのよね・・・寿退社するのは自分が先！！って、感じで でも、おっさん達にはそんな空気が判らないらしくって

口を開けばまるで天気の話でもするように

『結婚はまだか？』 『彼は居るのか？』なんて言うのよ！

相手がいたらさっさと結婚して寿退社してるでしょ？って、感じだし  
なんであんなにプライベートな事を報告しなくちゃなんないの！！  
って、

声を大にして叫びたい！！」

なにも今、叫ばなくても・・・と、内心思いつつ口では「そうだよ  
ね、プライベートな事まで会社で話したくないよね」なんて話を合わせる

相当ストレスが溜まっているらしいミオに要らない事は言わない方がいい。

しかし、黙って頷いていると それはそれで気に食わないといわれるので

話は聞きつつ、内容に沿ったあいの手を入れる。

「でも、そこまできちゃつと あれだ 魑魅魍魎の巣窟？って感じ  
？」

と、何気なく言った一言に

「そうよ！あいつ等を人間と思っちゃつからダメなのよ！！」

あいつ等は妖怪なのよ！！ナジオうまいこと云うじゃない！

妖怪だったらしょうがないよね、人間の思いが通じないんだもん！  
と、いきなりミオのテンションが上がり その高低差に一瞬ビビリ  
つつ

「妖怪的存在なのね・・・」と、弱腰で返答すると

「妖怪より悪霊に近いわね」

納得した様子でうなずいている

・・・仮にも一緒に働てる人間に対して悪霊って・・・

などと小さく苦笑。

ミオ「悪霊退散のお札とか作っておでこに貼り付けてやりたくなくな  
ってきたわ！」

ナジオ「あなたの会社の人間はキョンシーか！」

ミオ「はっ！！もしかして！呪いとか、かけられてたりして！！」

ナジオ「なに？仕事がしにくくなる呪いか何か？」

ミオ「結婚出来ない呪い」

ナジオ「・・・結婚したかったんだ・・・」

ミオ「あつたりまえでしょ！！小学校の時の夢は『可愛いお嫁さん』  
だったんだから！」

ナジオ「『可愛い』はもう無理ね」

ミオ「無理じゃないわよ！！今でも十分可愛いじゃないの！」

ナジオ「あなたの『可愛い』の基準低すぎよ」

ミオ「世界の『可愛い』の基準は私が最高基準よ！！」

ナジオ「あなたが、万国共通の『可愛い』の最高基準って事？！平  
均はって言うのは可もなく不可もなくでしょ？あなたは不可ばっか  
りじゃないの！！」

だんだんノツてきたらしく

この後、「ボケ突っ込み」のある漫才のような会話が飲みつづれる

まで続いた・・・。

## 休憩時間・1

次の日、またまた二日酔いの頭を抱えて病院に出勤し、消毒に用いるアルコールワツテと呼ばれる消毒用エタノールを染み込ませた綿花の準備していた。

消毒用エタノールの臭いに昨日のお酒を思い出して少し気分が悪くなりそうになるので

微かに顔をしかめていると「おはようございます」とアラタ先生が声をかけてきた

いつもどおりの営業スマイルを急いで顔に張り付けて「おはようございます」と返答し

素早く周りに他のスタッフがいない事を確認する。

小動物のように テツテツテツと、アラタ先生に近づいて小声で「昨日はごちそうさまでした。」

と、小さくお礼を言う

「こちらこそ、良いお店を教えて頂いてありがとうございます。」

・・・体調大丈夫ですか？

なんか・・・顔色が悪そうですね？」

心配顔で私の顔を覗き込むアラタ先生に

「二日酔いなんです。あの後、友達が家に来て朝まで付き合わされたんです。」

皆には言わないで下さいね。

社会人の癖に、次の日に差し支える程飲むなんて！『自己管理がなっていない』って言われちゃいますから

と、苦笑いしながら言う。

そう言って『シー』と、唇に人差し指を当てつつ去って行った。

診療室内で長話は禁物である。

どこで誰が聞いていて、変な誤解をうけないとも限らない  
用件が終わったらさっさと離れる事がいちばんである。

ミオの会社とは規模が違うが やはり歯科医院も女の園で  
女性スタッフと男性ドクターが親しくする事を快く思わない者もな  
かには存在する

私は女の園でうまく立ち回って行く為に 波風を立てるような事を  
極力避けるようにして行動している。

アラタ先生が心細さから話しかけてくるのは知っているが  
ここで二人が話をする事であらぬ噂がたつてはお互いの今後に影響  
する事も踏まえて

あえて避けているのである。

そんな態度が周りやアラタ先生から「クール」と言われる由縁であ  
つたらしい……。

それにしても、

歯科医院の中でもミオの言うところの『悪霊』的存在は居る

しかし、人数が少ない為 私のように周りと自分を遮断する事によ  
つて

何とかしのぐ事が出来る。

皆で仲良くしたらいいのにと単純に思うが 女の世界は日々動くも  
ので

たった一言で全員が敵に回る事もあるし 味方になる事もある。

そんな人間の心の動きを知る為に本を読むようになり

軍記物の本から人を動かす知識を学ぶようになった。

恋愛小説が本棚に一冊もないのは 単に私が極度の恋愛に対する『  
恥ずかしさ』からである。

テレビや映画で恋愛ドラマなどで愛が実った感動的なシーンなどに  
なると

背中がムズムズするぐらい恥ずかしくてチャンネルを替えるか席を  
立ってしまう。

ニヤツと笑ってしまった自分に気づいて 余計恥ずかしくなったりもする。

時代劇などの戦のシーンなどになると『心躍る』ぐらいワクワクしホラーやサイコスリラーなどは『ありえない』と笑いながら平気で見る癖に

恋愛ドラマが『背中がこそばくて見れない』などとそれこそ恥ずかしくて人に言えない……。

ちなみに、ホラーやサイコスリラーに大喜びする私を見てミオはちよつと引いてた……。

お昼休憩を済ませて午後の準備をしに休憩室を兼ねた準備室のソファでアラタ先生が歯科医師の専門の雑誌を読んでいた

この準備室は狭いスペースに無理やり棚とソファと飲み物やちよつとした私物を置いておく個人専用ロッカーを設置している。

ロッカーが置いてある事で必然的に人の出入りが激しい。

しかも、その狭いスペースが休憩スペースのような役割を果たしているのです、

いつも誰かが座っている状態である。

しかも、入口近くにソファと棚があり、ロッカーはその奥に設置されているので

ソファに人が座っている状態でロッカーに行こうとすると、立つてもらいか跨いで行くしか方法が無いほどの狭さである。

アラタ先生が雑誌から目を離して顔をあげたので

自分はロッカーには用事が無い事をジェスチャーで伝える。

そして、ソファの正面に設置された棚にしゃがみ込んで

午後の患者さんの技工物または補綴物ほてくぶつと呼ばれる入れ歯や被せなど

が入った箱を出していった。

必要な箱を出し終わって棚の整理をしていると

アラタ先生は私の喉のあたりをジイーと見ながら小さな声で

「昨日来ていた友達は彼氏ですか？」などと聞いてきた

「はあ？」

いきなり投げかけられた言葉の意味が理解出来ず怪訝な顔をしながら昨日来ていたのは女の子だと伝えると

アラタ先生がニヤニヤしながら

「ナジオさん首にその・・・キスマークが・・・」

指で自分の喉元を指示しながら言われた

「??キスマークって何ですか？」

怪訝な表情のままそう聞くと

アラタ先生は近くに置いてあった指導用の小さな手鏡を私に渡した黙って鏡を受け取り自分の首のあたりを見ると白衣の襟元から見える喉元が赤くなっていた

「ああ、さつきから痒いと思ったたら噛まれたんですかね？これキスマークって云うんですか？」

などと、真面目に答えたアラタ先生は吹き出しそうになりながら

「誰に噛まれたんですか？」

などと、聞いてきた。

噛まれる？誰に？と、小さく首をかしげて言われた言葉の意味を考えていると

アラタ先生が小さく吹き出した。

「誰って・・・何で笑うんですか?!」

小さな声で訴えた私にアラタ先生は

「それ、絶対他のスタッフにキスマークだって思われてますよ」

どうも、ツボに入ったらしく肩をひくひくさせながらそう云うと

「笑われるような事なんですか！ 私なんか誤解受けてるんですか？」

少し焦ったように赤くなった首をこする

「僕が気づくぐらいですから、たぶん他の女の子達は昨日彼氏につけられたとか思われてるんじゃないですか」

などと、必死で笑い声をかみ殺してアラタ先生が云うと

「彼氏につけられる？・・・え？キスマークってこれの事？虫刺されですよ？これ！！」

私が右往左往しだしたのがまたツボに入ったらしくお腹と口を手で押さえて体を丸の字に曲げて笑っている。

「もう！先生笑わないで下さいよ！　どうしたら虫刺されて判ってもらえるかな・・・」

目に涙を浮かべながら

「いや、逆に隠さない方がいいんじゃないですか？堂々としてましようよ！！」

と、私にひらき直れとアラタ先生は言うが、私はそれどころではない心情！

「知ってしまったたら気になって仕方がないじゃないですか！！」

あ！！絆創膏貼ったら判らないですよね？」

救急箱を取り出して、

無理やりアラタ先生に鏡を持たせて

それを見ながら大判の絆創膏を取り出して赤くなっている喉のあたりを隠すように張り付けた

その間アラタ先生はヒィーヒィーと奇妙な笑い声を出しながら笑っていた

「目立ちますって！！そんな所に絆創膏なんて貼ったら

開き直った方がいいですって　逆に隠すとやましい事でもあるんじゃないかと勘ぐられますよ？」

完全に状況を楽しむモードに突入したアラタ先生を尻目に

「大丈夫です。これ以上触らないように貼っただけなんですから

やましい事なんてありません！！」

そう言い残して技工物の箱を持って準備室を出ていた。

準備室を出て技工物を所定の位置に並べていると

先輩の衛生士の飯盛圭子が

「ナジオ。キスマークを今頃隠しても、もうみんな見てるわよ」などと笑いながら通り過ぎて行った

コウイチ先生に至っては

「あれ？隠しちゃうの？　ちらつと見えるのが逆に情熱的で良かったの〜い〜」

なんて言いながらニヤニヤしながら通り過ぎて行く。

「キスマークじゃないです！！虫刺されです！！」

「虫だなんて、彼氏に対して失礼よ」と他の先輩達が通り過ぎざまにからかっていく

とんでもない勘違いをされている事に気付く

やはりアラタ先生の言うように隠さずに開き直った方が良かったのか？と悩みながら

午後の診療を開始の合図を聞いた。

仕事が終了してまた　駅のホームで携帯のメールチェックをしているとアラタ先生と遭遇した。

アラタ先生は小さく手を振って「お疲れ〜」と言いながら近付いて来た。

携帯を鞆に直して軽く会釈をしてから「キスマークじゃないですよ」と小さく言った。

あの後さんざん他のスタッフにキスマークだと指摘され動揺して練っている途中の印象材と呼ばれる歯の型を取る材料を壁に飛ばしたり落したりして後片付けに翻弄していると

「なにやってるの！！」

と、ハルミさんに叱られ

子供の患者さんに「どうしたの？」などと指で絆創膏を突かれたりして散々な思いをした。

「ごめんなさい、僕が指摘しなければよかったですね。」

「・・・いえ、ご指摘があってもなくても、みんなにからかわれた事に変更はありませんから」

「あ！ごめんなさい」

ふてくされてそう言った私にアラタ先生は慌てて謝った。

「ナジオさんがキスマークを知らないなんて思わなくて」

「・・・」

・・・先生、それは追い打ちですか？

正直なぜ赤くなった首の事をキスマークと言われているのかが判らないので黙り込むと

「・・・もしかして、ナジオさん・・・」

「うるさい！！」

何を言おうとしたのかは判らないが、きっと良いことではないだろうと

言葉を荒っぽく遮って入ってきた電車に向かって歩き出した。

これ以上首の事を言われなくなかったのでホームに入って来た電車に飛び乗り

周りの人に見られなくなかったので、ハンカチをスカーフのように首に巻いて家に帰って来た。

お風呂の鏡で赤くなった喉を見ながら、なぜこれがキスマーク？と考えた。

キスマークは口紅を使ってつけた後の事だと思ってるので、意味が判らない。

お風呂からあがってすぐにミオに電話で聞いてみると

「キスマークってのは、口で思いつきり吸われた後の内出血の跡の事も言うのよ」

と、サラツと言われた

「喉になんでキスするの？しかも内出血の跡って、どんだけ強く吸ってるの?!」

「・・・喉だけじゃなくて全身にする事もあるでしょ？」

内出血が出来るぐらい情熱的なキスって事でしょ。」

「全身にキスするの？」

「あんだ、キスって頬っぺたやオデコや唇だけにすると思ってたの？」

「外国の映像とかで手にしているのは、見たことあるわよ」

「・・・なんの自慢？知らなかったくせに自慢するんじゃないわよさつき全身っていったでしょ？ 個人的趣味の問題よ。」

「みんなする事？」

「個人的趣味よ。でも喉ぐらい一般的。他にも首とか鎖骨とかいろいろあるでしょ。」

あ、あと歯型とかもありよね！」

ミオにあっさり言われてドキマギしながらお礼を言って電話を切った  
その後も自分の心臓がドキドキする音がとても大きく感じてオーデイオから流れている大好き曲も全然耳に届かなかった。

とんでもない誤解をうけてしまっているらしい事は理解出来たが  
もう今更否定したところで 話を掘り返してまた誤解を受けるはも  
っと嫌だったので

訂正せずあきらめる事にした。

ってか、「歯型」ってなに？！！！！

体が温まって余計に赤く浮き上がっている喉元を鏡で見ながら大きなため息をついた。

休憩時間・1（後書き）

二日酔いの時に 消毒液の匂いって結構きつい物があります（笑）

私は良く

ダブダブのエプロンを着ると

取っ手などに引っかかります。（笑）

## 休憩時間・2

次の日は平日だがローテーションで仕事が休みの日だったので職場のスタッフに『キスマーク』を揃そろわれなくて済んだ。

今は綺麗になくなってているが

少しでも気持ち切り替えようと今日は外に出かける事にした

私は近代建築様式のビルなどの建物を見るのが好きで

近代建築様式のビルが多く現存しているオフィス街にバイクで出かけた。

最近はバイクの駐輪場スペースを備えた駐車場が増えてきた

以前はバイクの駐輪所と云いながら原付しか駐輪出来なくてを路駐するか電車で繰るしかなかったので今は大助かりである。

築100年以上はあろうかという建物を見ていると

その時代の建築家の技術やデザイン性に純粋に感動したり

建設当時の風景がどんなものだったのか？

これを使用していた人たちはどんな人たちだったのか？

などをブラブラ歩きながら考えたり

今でも使用されている近代建築のビルのカフェでコーヒーを飲みながら本など読んだりするのが私なりに楽しい時間の過ごし方である。いつも時間に追われながら仕事をしている私にとって

ただ時間が過ぎるのをのんびりと楽しむなんてなんて贅沢な事だろうと思う。

これが一人でなければ・・・と思うのだが

この趣味を理解できなかった過去の別れた彼氏を思ってもしょうがないので

今は一人を楽しもうと無理やり自分を励ましてみる。

あたりが暗くなってから

ライトアップされた大きな近代建築の近くのベンチに座ってMP3で音楽を聴きながら建築物を眺めていると

目の前をカップルが一組通り過ぎた  
どうも喧嘩しているのか険悪な雰囲気醸し出している。

いつもなら見て見ぬりをするのだが、

カップルの男性の方がどこかで見た事のあるような気がしてこのカップルの成り行きを眺める事にした。

私からよく見える場所に陣取ったカップルは  
何やら言い合いをしてる様子だった。

私には一方的に女性の方が怒っているように見えるのだが  
音楽を聴いているので会話の内容までは判らない、

一言二言短い文章で受け答えをしている様子だけが判る。

10分程その状況が続いた後、女性は急に逃げるように走って行ってしまった。

残された方の男性は、結構な距離があるここからでも判るくらい大きなため息をついて

いかにも疲れました。と、言わんばかりの勢いでうなだれた。

・・・修羅場終了？

と、思いつつも『どうせ他人』と、野次馬気分で男性のその後の行動を確かめようとベンチに深く腰をかけた。

しばらくして放心状態から覚めた男性は

私が座っているベンチの近くに座ろうとしたのかこちらに向かって歩いてきた

その男性の姿に、どこかで観た事があるような気がしてならない。

あの、姿勢よくゆっくりと歩く姿・・・どっかで、見た事あるんだけどな・・・

そんな事を思いながら男性から目が離せなくなってしまった。だんだんと近づいてくる男性の顔をはつきりしてくると、  
「またもあり得ないような偶然に見てびっくりして思わず声を上げた。『どうせ他人』だと思っていた男性は『良く知っている』アラタ先生だった!」

げっ!!

女性的にどうなんだろう?と思う声を上げてしまった私の声に反応してこちらを向いたアラタ先生は声の主が私だった事にまたびっくりした様子で立ち止まる。

「えっと・・・こんばんは」

一部始終を目撃してしまった後なので、気まずい雰囲気のままごく一般的な挨拶をした私に、

「気まずい状況に苦笑いをしながらアラタ先生も「こんばんは」と返した。」

「なんかとんでもない現場に居合わせてしまったみたいで恐縮です。」

「イヤフォンを耳から外しながらそう言うと」

「僕もとんでもない現場を見せてしまったみたいで恐縮です。」  
力なくそう返事がかえってきた

「まあ、どうぞ」

自分の座っているベンチのあいっている部分をアラタ先生に勧めると素直に隣に腰をかけた。

とりあえず、音楽を聴いている場合ではなさそうなのでMP3を操作して音楽を止めて鞆の中に直す。

「ありえないところで、ありえない人にあってしまったものでどうしていいのか判らないのですが・・・追わなくていいんですか?」

「僕もこんなところでナジオさんに会うとは思わなかったのでビッ

クリです。

彼女は追わなくても大丈夫です。

もう振り回される事に疲れてしまつてさつき別れ話を切り出して別れたところですよ。」

疲れた笑顔を顔に浮かべたアラタ先生にそうですかと、小さく返事押してライトアップされた建物を見上げた。

「ところで、ナジオさんはここで何を？」

アラタ先生のもっともな質問に建物に顔を向けたまま答える

「私、こういう近代建築が大好きで 休みの日に

ブラブラと建物を見に歩いたりするんです。

今日は、今この建物がライトアップされてる期間なので見に来たんです。」

「え？一人で？」

「一人です！！彼氏がいない事は先生ご存じだと思つてましたけど？」

少しびっくりした様子でもっともな質問をされたので少し頬を膨らませて答えた。

昨日、彼氏いないのにキスマーク出来てるよ！！つて

さんざん私の事からかつたじゃないか！！

アラタ先生は膨れっ面の私から建物に視線を変えて取り繕うに言われてみると時代の重みがあるような建物ですねと話始めた

あ！！旗色が悪くなつたから無理やり話題変えた！！

まあ、良いけど・・・。

「今まで、何も思わずに見てましたけど この建物は僕らが生まれる前からここにあったんですよ。」

何気なく言つたであろうアラタ先生の発言、

それは私のツボです・・・

そう思いながら建物を眺めながら答える

「先生、いいところ突いてきますね。」

この建物ちよつど約90年前に建築されたんです。

ちなみに横の建物、あつちとあれは約100年前」

「詳しいですね。でも100年程前と云う事はこの建物は戦争の戦火を乗り越えて現存しているって事ですよね？よくぞ残っていてくれたって感じですね。」

アラタ先生の発言がまた私のツボを刺激する。

2回目のツボです・・・。

「そうなんです、

戦争も乗り越えたし なんて言っても この建物が出来る40年ぐ

らい前には

ぢよんまげあたま

丁髷頭の人が

当たり前<sup>に</sup>このあたりを歩いていた事なんですよ!!

文明開化からたった40年でこんな建物を建てちゃうんですよ!!

凄くないですか?!」

「そうですね、文明開化する前までは

当り前のように丁髷に日本髪 着物姿の人ばかりだったんですもんね。

それが150年前ですもんね。

たった150年で強制的にですけど、

今までの長い文化をあつさり捨てちゃうところが日本人ですよ。

学習能力が高いと云うか、順応性が高いと云うか、洗脳されやすいと云うか・・・

まあ、このままではいけないという危機感のような物があつたのが

正解かもしれませんが。」

アラタ先生はそこまで言ってから私の方を見て

「でも、今までのままではダメだったから、

維新が起きて新しい物を取り入れたって事ですよね？」

### 3 度目のツボをギュッと刺激

「同じ意見の人に初めて会いました。

意外と近い所に同じ考えの人が居た事に二度びっくりですけど」

テンションが上がってくる自分にセーブをかける為にわざと、素っ気ない言い方をして

アラタ先生の方を見ないように建物を見つめる。

「この建物にまつわる人がどんな思いを込めてこの建物を建てたのかとか

歴史の教科書に出てくるような有名な世界を変えたような人達がこのを訪れた時のエピソードとかを知るのが好きなんです。

昔の人はお金の事は二の次で、最高の職人さんが最高の技術を注いで作った建物だからこそ100年もの間、震災や戦火を免れて現存しているって思ってます。

「つてか、先生の150年前を『たった』つて言うセンス良いです」

「長い歴史をみたら150年つて『たった』でしょ？」

「私も『たった』つて感じるんですけど、一般的には『たった』ではないでしょう？」

「確実に150年後つて人間死んでますからね」

そういつて笑った私をアラタ先生は眩しそくに眼を細めて見つめた「先生どうしました？」

「いや、こつやつてナジオさんが熱く語るどころ初めて見たんでなんか意外で」

「いやあ〜これでもかなり、セーブしてますけどねえ・・・。」

「意外ですか？私にしたら職場の方がありえない私ですよ」

「僕も、仕事では人格作ってますから同じですね。」

でもナジオさんをちよつと垣間見た感じですよ。」

アラタ先生が軽く微笑んだ。

ヤバイ！これ以上私の好きな話をしていたら暴走してしま  
そうだ。

## 休憩時間・2（後書き）

最近、単車を駐輪出来る駐輪場が増えて喜んでます。

単車を車の駐車場に駐輪すると 車のドライバーさんに嫌そうな顔されるし、かといって自転車と原付の駐輪場しかないと来たもんだ  
！！

単車は街乗り用としては向いていないのか？！  
と、常々思っていました。

「私が！熱く建物の事語っても先生は面白くないでしょ？」

先生の好きな話とか聞かせて下さい。」

自分が暴走をしないように

無理やり話を変えると、「そんなことないですよ。楽しいですよ。」

と、答えつつも話題を変えたいと云う私の思いを察してくれたのか自分の趣味を語りだすアラタ先生。

「僕は乗り物全般が好きです。電車や飛行機が好きで・・・特に好きなのは戦闘機です」

最後の方は少し声が小さくなった

「私も乗り物大好きですし戦闘機とか軍用ヘリとか好きですよ。」

私の返事にかなり意外そうな顔をしたアラタ先生は

「好きなんですか？例えば？」と食いついてきた。

「え？例えば・・・王道でイーグルとか・・・あえてのファントムとかトムキャット？」

でも、ブラックホークとかヒューイとかコブラとかもカッコイイですよ。」

でも、ハリウッド映画とかで悪役が乗ってるのとか見ると、

ヘリが悪役の乗り物みたいで嫌になっちゃうのでハリウッド映画は好きじゃないです。」

つてか、人間独りで戦闘ヘリを打ち落としちゃう時点で好きじゃないんですけどね。」

アラタ先生は一瞬意外そうな表情をしながら聞いていたのにファントムと言ったあたりから

突然ビツクリした顔に表情を変えて「詳しいですね！」と真顔で言った。

逆に私もアラタ先生の食いつき具合にびっくりする

「広く浅い知識があるだけですよ。」

「広く浅いって、結構浅くない知識ですけど?!」

「浅いですよ 聞きかじっただけの知識です。」

マニアって言われる程の知識があるわけじゃありませんから。

名前を並べるだけなら誰にだって出来るでしょ?」

「一般女性の口からイーグル程度ならともかく

フロントムとかヒューイはまず出てこない愛称だと思いますけど?」

「もう、そこには食いつかないください。」

そう言っただけのアラタ先生の勢いに吞まれそうになった私はアラタ先生の顔に「STOP」と言わんばかりにかざして話を止めた

自分が暴走することを恐れて話題を変えたのに先生がまさかの暴走?!

「いやいや、僕も好きですから ここは食いつきますよ」

アラタ先生は私の手を顔の前から除けさせると

本当に浅い知識しかないんですから食いつかないで下さいってと、ちよつと逃げ腰で答える

「さつき走って帰った彼女に最後に言われた一言が

『軍オタ君にはついていけない』だったんです!

別れた直後に理解してくれる人がこんなに近くにいてなんて食いつくでしょ普通?!」

そんな事が原因で別れるなんてなんて心の狭い女性

でも、それが今時の普通の人なんだろうと思いますよ・・・。

自分の趣味に理解を示してくれた事で

アラタ先生がついつい先程彼女と別れた事をすっかり忘れていた

「先生 軍オタ君だったんですか? 私は違いますよ。ただ乗り物が好きなだけですから」

「僕も軍オタじゃないです! 乗り物が好きで、その中で戦闘機が好

きなだけです!!」

「じゃあ、ブルーインパルスとか目を輝かせて見るタイプですね。」

「ブルーインパルス!!この言葉が出る時点で普通じゃないですって!!」

「ブルーインパルスは有名ですから、誰でも知ってるでしょ？」

「じゃあ、先生もしかして 彼女とのデートで海自の護衛艦とか練習機の一般公開とかに

行っちゃうタイプですか？」

「ええ、ええ・・・やっぱり駄目なんですかね？」

最初は喜んでくれたんですけど、何度も行くとどれも同じじゃない！  
て言われてしまって・・・って。」

「興味がない人がみたら、護衛艦なんて全部一緒ですからね・・・」

「・・・やっぱり、ナジオさん詳しくすぎますよ!」

「そんな事言われても・・・まあ、私の事は置いておきましょう。」

で、彼女にそれが嫌だと言われたんですか?」

「恋に恋するタイプの人だったんで・・・人の趣味に合わせるのに飽きてしまったみたいで・・・」

だんだん話に熱がこもってきたアラタ先生は自分の守備範囲の会話がどこまでできるのか

はつきりしたいらしく、会話に食いつくのと同時に私の手を取る勢いで近づいてきて来たので、また無言でアラタ先生を遮る

「すいません、ちょっと熱くなってしまうました。」と、慌てて距離を置いた。

私のレベルをはつきりと伝えておいた方がいいかもしれない。

「自分の趣味を否定させてたら辛いですよね

私もさつき先生が近代建築に対する私の思いと同じ事を言って下さった時は

正直嬉しかったです」

そう言つてペコリと頭を下げた。

「で、さつきも言つたとおり

私は乗り物が好きで、その知識の中に戦闘機があつただけで詳しくはありません。

戦闘機のスペックと名前を知っているぐらいで普通じゃないと云われるのは心外です。」

あくまでも普通の女性であると主張したい私は、きつぱりとそう言つた

「僕もそうですよ、オタクと呼ばれる程の知識を持ち合わせていないのに

『軍オタ君』扱ひされた揚句に振られる理由になつちやつたんですから」

「失礼ですけど、それは彼女・・・あ、元カノですか、元カノさんの器が小さすぎるんですよ。

いいじゃないですか、戦闘機が好きなくらい、ちなみに私の携帯、今の待受画面はイーグルですよ」

そう言つて鞆の中から携帯を出して待受画面をアラタ先生に見せた。「イーグルが携帯の待ち受け画面つて王道で良いご趣味ですね。

ちなみに僕はT-4です。」  
アラタ先生もジーンズのポケットの中から携帯を出して私に見せてくれた。

「やっぱりブルーインパルスが好きなんですネ。

その前の待受画面は新幹線のドクターイエローだったんですよ。」  
そう言いながら携帯の時計を見て愛車を駐車している駐車場の営業時間の終了時間が近い事を思い出した。

今後も職場で顔を合わせると判つていても、今のこの場の盛り上がりをもう少し楽しみたいと素直に思った。

「先生、会話が盛り上がつているところで大変申し訳ないのですが、私、駐輪場の営業時間の終了が近いので、移動させないといけませんですけど・・・」

とても、寂しそうな顔をしながら「そうなんですか」

と言って、アラタ先生も自分の腕時計で時間を確認する

「それでなんですけど、

せつかなので、どちらかで飲みながら話しませんか？」

私が控えめに提案すると

一瞬にして嬉しそうな表情に変わったアラタ先生は「はい！」

と、元気よく返事している・・・

今のアラタ先生に犬のしっぽがついてたら めっちゃ振ってそんな感じ・・・。

なんて喜怒哀楽が判りやすい人！

「じゃあ、先に自転車取って来て下さい。僕は電車で来たのでここで待ってます。」

あ、私が駐輪場って言ったので先生 自転車と勘違いしてる・

このまま訂正せずにバイクを取りに行つてビックリさせてやるのか・・・

とも考えたけど、ここにバイクを乗り入れさせる事が出来ないの  
正直に

「バイクです」と訂正

「あ、すみません じゃあ、バイク取って来て下さい」

それでも、先生は原付程度のサイズだと思つているんだろう  
な

スリムタイプのバイクとはいえ 250CCのオートバイな  
んだけどな

まあ、いいや。

「では、このへんに居てください。すぐに戻ってきますから」  
そういつて、とりあえず駐輪場に向かって愛車のバイクを出してくる  
数分してバイクのマフラー音をとどろかせて先生のもとに戻ってく  
ると

やはり、原付を想像していたのか

バイクのエンジンを止めて バイクに跨ったままヘルメットを取ると  
「・・・すみません、原付だとばかり思っていました・・・」

やっぱりか・・・

素直な反応にちょっと気分を良くしつつ冷静を装ってみる。

「ほんとナジオさんは僕の想像の斜め上を言ってくれますね!」  
そういつてアラタ先生は笑った。

お？私の華麗なバイクの登場で傷心を癒したか？

・・・そんな訳ないか・・・。

「とりあえずどこに行きましょう?」

「僕が指定してもいいんですか?」

「いいですよ。」

「じゃあ、インパルスに行きましょう!! 今日、営業してますよね  
?」

「してますよ。」

それと、絶好のタイミングで良い店の名前を出してくれませぬ。  
笑いながらそう言うアラタ先生は不思議そうに私を見た

「私が戦闘機とかに詳しい理由はインパルスのオーナーですよ。

あの人は本当に『軍オタ』でね。

お店はアンナさんの賢明なるブロックのおかげでああなりましたけど  
店の奥にはプラモデルとか写真とかがたくさんあるんですよ。

で、アンナさんがいない時に

『陸上自衛隊の歴史はなあ、昭和25年に設立された警備予備隊から始まって』

とか事あることに吹き込んでくるんですよ

しかも、私の携帯の待ち受けを勝手にイーグルに変えたのもオーナーなんですよ!!」

「そうだったんですか」と、嬉しそうにアラタ先生が答えた

「では、先生は先にインパルスに行っていただけですか？」

私は足がありますんで、家に置いてからお店に行きますから。」

「僕がそのバイク運転しちや駄目ですか？」

「免許持つてらっしゃるんですか?!」

「車の免許と一緒に中型の免許も取ったんです」

基本的に自分のバイクを人に運転して貰うのは抵抗があるが

今のこの雰囲気壊すのは悪い気がして素直に提案を受け入れる事にする

「そうなんですか、じゃあ半ヘルはあるのでこれ使ってもらって

私、タンDEMシートに乗ってもいいですか？」

「・・・タンDEM走行って久しぶりなんですよね」

「え?!私の前ですか?!」

「その案も捨てがたいのですが、良ければ僕が運転しますよ・・・」

「もしかして、私はタクシーで並走ですか・・・?」

「そんな訳ないでしょ!!」

「大丈夫ですよ! ちゃんとタンDEM走行出来ますよ! いや、

大切にされているみたいだったのでバイク運転させて貰ってもいいのかと思います」

「ああ、そうなんですか・・・私はてつきり・・・もちろんいいですよ。」

そのかわり、私をタンDEMシートに乗せて下さいね。」

そういつてバイクから降りると

半ヘルをアラタ先生に渡してシートを譲る

タンDEMシートに座る準備を済ませるとタンDEMシートに跨る。

「私、タンDEMシートに座るのは教習所以来ですよ！」

「そうなんですか？　じゃあ、遠慮なく僕に捕まったださいね」

「あははは、出発しても大丈夫ですよ」

憧れの「彼氏の腰に手をまわしてタンDEMシートに座る」の構図は自分の小さなプライドによって即座に却下

アラタ先生に一切触れる事なくしつかりバランスを取って座っている自分に

可愛げがない事を自覚・・・

「ちゃんと、捕まったださいね。」

そう言っただ、エンジンをスタートさせてスムーズに発進させる

初めてタンDEMシートに座って公道を走る景色はいつもと違って見えて

なんだか新鮮で

前を見るとアラタ先生の背中しか見えないので

憧れのポーズだと横に流れる景色しか見れないんだなんてぼんやりと考えながら

自分が運転する事なく進む愛車を不思議な感覚で跨っていた。

タンDEMシートから自宅の場所をナビしながら

自分の部屋の駐輪場にバイクを駐車してから

二人で歩いてインパルスに向かった

その道すがら、アラタ先生にインパルスのオーナーに教えて貰った知識などを

話は尽きる事なかった。

あっという間にインパルスに到着し

店に入って注文を済ませて　さっそくオーナーにアラタ先生の趣味の話をする

喜んで厨房から出てきて

一瞬にして意気投合し

他のお客さんも巻き込んで　盛り上がり始めた

「類は友を呼ぶ。隠していても集まっちゃうのね

ナジイーは私と一緒にこっちで飲みましょう」

アンナさんはそう言いながら。

カウンターから離れたテーブル席で

盛り上がるオーナーとアラタ先生の嬉しそうな顔を眺めてお酒を酌み交わして過ごした。

休憩時間・3（後書き）

ナジオ念願のタンDEM走行です。

私もバイクのタンDEMシートに座ってツーリングに行きたいわ〜！  
！

## 再診・1

夕方、込みだす時間 予約外の新患しんかん（初めて来院された患者さん）が重なって

スタッフも患者さんもピリピリした雰囲気の中  
頭をフル回転して最善・最短の方法を考えて行動していた。

コウイチ先生のアシスタントについていた私は  
手の空いているアルバイトを手招きして呼んで

「シズカちゃんこれ練ったことある？」

と、アルバイトの松井静香まついしずかにセメントと呼ばれる接着剤を混ぜた事があるかどうかを聞いてみた

今回使用するセメントは粉末と液体を適量使用して混ぜるだけなのだが

一見簡単そうに見えるが均等に手早く気泡が入らないように練らなければならぬので

見ているだけでは出来るようにはならない代物なのだ

時間があれば練習するように言っていたが・・・シズカの様子から練習していない事がうかがえた。

少しもじもじしながら

「何回か練った事はありますが・・・自信がありません・・・」  
と、小さな声で返事が返ってくる。

「練った事あるんだったら いいから練って」

断るつもりでシズカは言ったのだろうが、私があっさりそう言ったのでシズカはパニックになった。

「で、できません」

練る事をやんわりと拒否されたが

どうしてもコウイチ先生と二人の手足りない状態なので私も引くわけにいかない

コウイチ先生も何も言わないが、じつとシズカの方を見ている。

「練って」

シズカを見据えながら強くそうと

泣きそうになりながら練成器と呼ばれる混ぜ棒を握ってくれたが、緊張の為か微かに震えている。

時間がないので内心イライラしながらシズカを見つめると

震えながらもシズカは練り始めてくれた。

練り始めたのを見て今まで黙って成り行きを見ていたコウイチ先生が歯の周りのエアールと綿花で防水をしてセメントが練りあがるのを待った。

私もコウイチ先生と違う角度から先生の視野確保と防水の作業をする。

練りあがったセメントを私が先ほど作ったテック（テンポラリークラウンと呼ばれるプラスチックでその場で作る仮りの歯）の内面に流し込んでセメントを練った紙の上に載せて

シズカはコウイチ先生が取りやすいように向きを考えてテックを渡す。

コウイチ先生は向きを変える事なく受け取り歯に嵌め込む

シズカが差し出したガーゼを受け取り患者さんに

「セメントが固まるまでしばらく軽く噛んでお待ちください」と、ガーゼを噛んで貰う。

カルテに診療内容を書いているコウイチ先生を置いて

私は立ち上がってシズカに付いて来るように小さく手招きしてユニットチェアを離れた。

準備室の奥にシズカを連れていくと

「シズカちゃん患者さんの前で出来ないとか自信がないとか言わないで。」

無理やりやらせた私も悪いけど、自分の治療をしてくれる人が『自信がない』とか

言われると不安になるでしょ？

それに『出来ない』からやらなかったら何も出来ないでしょ？

他のスタッフはともかく、私は『やった事がないですけどやってみたいです』

って言うて欲しい」

私は小さな声でシズカいさういうと、シズカは壁にめり込むように小さくなっていった

小さくなったそんな姿は小動物みたいで可愛いけど、言うべきことは言わなければならぬのが私の仕事・・・

・・・正直つらい・・・

「まあ、取り合えず練習ってくれて助かったわ。

唾液の多い人でね、コウイチ先生と二人でも手が足りなくて困ったのよ。

じゃあ、今からさっきのセメントを練る練習して。

練り終わったやつは私がチェックするから、捨てずに置いておいてね。」

そう言い置いて先程のユニットチェアーに戻って行った。

シズカも社会人になったら判る事だが

怒られる事を恐れていたなら何も出来ない。

出来なかったら練習したらいいし、判らなければ調べて勉強したらいい。

1から10までお膳立てして貰わないと出来ないなんて社会人じゃ通用しないから、

自分でしないといけない事を考えて、出来る事をしないといけないそうじゃないと、自分が本当にしたい事がしたい時に出来ない・・・今から、少しずつ社会に出る練習のつもりで働いてくれたらいいと

私は考えている。

しかし、歯科医院のアシスタントは簡単なようで難しい。

術者（ドクター・衛生士）に器具を一つ渡すにしても術者が受け取ってから向きを持ち変えないように考えて渡さねばならない事とマスクをしている上に、下を向いて指示を出されるので

何を言われているのかが聞き取りづらい

術者の癖を覚えて出す器具・順番・方向を把握し術者が術野（術者が見ている治療部位）から目を離さなくてもいいようにスムーズにアシストしなければならぬ

一度覚えてしまえば同じ事の繰り返しなのでたいした事はなくなるのだが、

覚えるまでが大変。

少しずつスタッフに教えて貰うのだが、何せ現役の学生アルバイト歯科医師や歯科衛生士を目指すならまだしも、仕事に対してそこまですで真剣に考えている筈もないそれに、若さゆえで

周りの事をあまり考えない言動などで相手が発言でどうとらえるかを考えていない。

まだ社会の厳しさを体感していない学生という身分

自分にもそんな時代があったので、自分の事を棚に上げて強くは言えないが

シズカにはいい社会人になって貰いたいので後で説明する事にする。

「シズカちゃんにちゃんとフォローを入れておきましたよ」

通路でアラタ先生にすれ違い際にそう言ってきた。

話を聞いてたんだ・・・と、少し恥ずかしく感じつつ

私は自分がまたアラタ先生がフォローを入れなければならない発言をシズカにしたんだと思い

あとでちゃんと謝っておこうと思った。

コウイチ先生が患者さんのポンティックからはみ出て固まった余分なセメントを除去し

注意事項と次回の治療について軽く説明した後、治療は終了、チエアーの後片付けを他のアルバイトに任せてシズカの居る準備室に戻った。

「シズカちゃん、練習進んでる？」

そう言って覗くと、シズカは固まったセメントがついた紙を数枚見せてくれた。

「あまりうまく出来ませんでした。」

シズカから紙を受け取って一つ一つ確認してゆく

「ナジオさん」

「ん？」

「すみません」

シズカはそう言ってペコリと頭を下げた。

「ん？別にいいよ。」

これだけ練習したんだから、次から大丈夫だね。

どンドンやって行ったらいいんだよ。

自信がいたら他のスタッフに自分から『練らして下さい』って言うてやらして

貰ったらいいし。」

そう言うてシズカに簡単にセメントの練り方をもう一度説明する

「これぐらい広げて十分に気泡を抜いて 集める時に抜いた気泡が入らないようにしてね。」

もちろん、技工物に入れる時も気泡が入らないように隅から

そっと流し込むように入れてね。

これは固まるのが遅いからいいけど 結構他のセメントは早く固まるから手早くね

云うのは簡単だけどやるのは難しいんだよね」

シズカはにっこり笑って黙って頷いた。

「あと、ごめんね 私ちよっときつく言いすぎた。」

さつき、アラタ先生に『フォロー入れときましたよ』とか言われた  
んだけど

先生どこに居たの？ 患者さんが居ないからって奥に隠れてたの？」

シズカは小さく笑いながら近くの扉を指さした

そこは、準備室の隣に設置された私たちの安息の場・・・トイレ・・・

・

「トイレかよ！ こんな処に隠れてたの？」

つてか、トイレから出てきてフォローって！！なんかカツコ悪！

どうせアラタ先生の事だからサラっと言つてのけたんだろっけど「

小さく肩をすくめてそう言つと、シズカはお腹を抱えて声をかみ殺  
して笑い始めた。

シズカちゃんが笑ってくれたならそれでいいわ。

アラタ先生ありがとね。

本日の業務が終了して

駅のホームで携帯をチェックしているとアラタ先生が声をかけてきたので

私の方から挨拶をする。

「先生お疲れ様です。」

今日は素敵な所から出現して素敵なフォローをシズカちゃんに入れていただいた

ありがとうございます。」

「そんな言い方しないで下さいよ。」

皆が忙しく走り回ってる時に自分だけ仕事がなくて気まずくてちよつと、トイレで瞑想してただけですよ。」

私はアラタ先生の「瞑想」の一言に無言で冷やかな視線をアラタ先生に投げかけた

仕事中に息抜きをしたい時に用もないのにトイレに籠るスタッフは多々居る。

私もたまに籠る事もあるが

分刻みで仕事が押し迫っているので、ちよつと憧れの場所であったりする。

そんな事を一人つらつらと考えていると

「ナジオさん！今からインパルスに行きませんか？」

と、アラタ先生が提案してきた

すっかりインパルスの常連客になってしまったアラタ先生は独りでもインパルスに行くようになったらしい。

家とは真反対の場所にあるのに……。

今まで、職場の人とはあまり一緒に居たくなかった筈なのに

なんで、最近よくアラタ先生とインパルスに行くようになったんだ  
ろう？と、思いつつ

手にしていた携帯のメールの受信確認をして 予定がないかをチェ  
ックする。

「いいですよ。」

私が頷くのと同時にインパルスのある方面、つまり私がいつも乗っ  
ている側の電車が到着するアウンスがホームに流れた。

二人で到着した電車に乗り込み電車の入口付近に並んだ。

「先生、私ね、帰りの電車から見える家の明かりを見るのが好きな  
んです。」

あの明かりの一つ一つに生活があつて。

ドラマがあつて、喜怒哀楽が納められてるんだな〜って思うと、  
なんだか自分の居る世界は広いんだな〜まだまだ知らない世界が沢  
山あるんだな〜

って思うんです。」

電車内の扉付近でアラタ先生と立ちながら

ぼんやりと窓の外を流れるネオンを眺めながらそう言つと

「ナジオさんって意外とロマンティストなんですね。」

僕なんて『あそこが家だつたら通勤が楽なのに。』とか考えてます。

「

先生、意外と現実的なんですね」

そう言つと二人同時に吹き出した。

「僕、最近インパルスに行かせて貰うようになって

今まで自分が求めていた環境が手に入ったと喜んでいるんですよ  
もつと早くにナジオさんと仲良くなつておけば良かったと、それだ  
けを悔やんでいます。」

「きつと、あのタイミングで先生と話が出来るようになったのには

きつと意味があるんですよ。早くても遅くてもきつと駄目だったんですよ。だから、悔やまないでください。」

「タイミングですか・・・やっぱり、ナジオさんはロマンティストですね」

アラタ先生はそう言って微笑んだ

それは本当に優しい微笑みで、今までに感じた事のない温かい気持ちで胸がいっぱいになった。

「私、今まで女性ばかりの環境で過ごしてきたのですが

テレビとかお話に出てくる 男の人独特の無茶やノリの良さに憧れてきたんです。

それを見るたびに『なんで、私男に生まれてこなかったんだろ?』って

本気で悩んだ時期もあったんです。

思ったように振舞って、思ったように話をしていたら

『もっと女の子らしくしなさい』とか『女の子なんだから』って言われ続けて

ちよつと神経質になっちゃったんです。

それに、「名塩」って名前変わってるでしょ?

私の祖父が紙漉の職人をしていて、

名塩紙って云う襖とかに使用される和紙から取って、

日本的な女性に育って欲しいって云う願いを込めて付けたみたいですよ。

でも、親の知らないところで「変な名前」って言われてたんですけどね。

子供にしたら「和紙の名前なんかつけられてるし!」って感じですよね。

でも、女に生まれた以上、女として生きようと思って

親の望むような女性らしい女性になってやろうと努力をしてきたんです。

でも、最近気づいたので、人には向き・不向きがあるように

自分は馬鹿騒ぎが出来るようなタイプではないんだと判ったんですよ。」

インパルスでアラタ先生と二人で飲んでいて

だいぶお酒が入った事も手伝ってか

ミオにすら語った事のない素の自分を知って欲しくなったのか私は静かに語り始めた

アラタ先生もあえて口をはさむでもなく、ただ静かに頷きながら聞いてくれていた。

「自由に思った事を出来るはずなのに、無意識に行動に移すのを辞めてしまつんです。」

『常識的に考えて今はこうするべきではない』って思考が邪魔して自分の思い通りに行動出来なくて、自分で自分にイライラするんです。

そして、自分で自分が判らなくなってしまつんです。

思考回路の迷宮に勝手に入って行って、迷子になつちゃうんですよ……。

本当は、もっと「はっちゃけちゃいたいんです。もっと馬鹿笑いをしていたいんです。」

そう言いながら、机に顔をうずめるように頷垂れた

「ナジオさん、電車の中で言ってたじゃないですか

『今はそのタイミングではない』んだと、きつと神様が今はナジオさんにはっちゃけて欲しくないんですよ。

でも、本当に強く望むのならきつと願いは叶いますよ。」  
そう言つてアラタ先生は私の頭を優しく撫でた。

先生の手、温かい大きな手だ……。

「ナジオさん酔ってますね・・・もう帰りましょう。家まで送りましょうか？」

今日はいささか飲み過ぎたせいかさすがに通いなれた道だとしても

一人で返すのが心配だとアラタ先生がそう主張する

「大丈夫です、一人で帰れますよ。」

先生、そろそろ終電の時間ですから、私の事はお気になさらずに「そう言っただけで立ち上がったが、自分でも感じるぐらい足もとが少し危なっかしい

「今日はさすがにその状態では。」

『じゃあ、判りました。さようなら』って帰せないですよ！

送りオオカミにはなりませんから。ちょっと待って下さい。」

そう言っただけで会計に立ったアラタ先生の背中に向かって

大丈夫ですよ 先生、終電の時間ですよと、同じ事を繰り返している。

私、完全に酔ってる・・・。

酔っている自覚がある酔っ払って案外います。

今、まさにそうです。

どんな状況でも帰省本能とでも言うべきか

本人は家に向かって歩いていますが、道の案内までは出来ない

私とアラタ先生では身長差がありすぎるので、肩を支えてもらって歩いているが

どう見ても私を背負うようにして歩いている様にしか見えないはず・・・。

「ナジオさん、大丈夫ですか？」

明日、お休みですから家に帰ってぐっすり寝て下さいね」

「せんせー、見て！お空が綺麗だよ。お月様がとっても明るいね」

夜空を見上げながらそう言う

「本当ですね。とっても綺麗ですね。」

「せんせ〜お月様から地球を見たらどんな感じなんですかね？」

「太陽みたいに、地球が昇ってくるのとか見てみたいですね。」

写真とか映像ではなく自分の目で。

宇宙旅行って僕たちが生きている間に行けるようになったらいいですね。」

「月に？」

「行ける日がきつと来ますよ。強く願っていたらそのうちに」

2人は空を見上げながらゆっくりと歩いて行った。

ようやく私の部屋に着いた私たちは

私に部屋のカギを開けさせて部屋に放り込まれた。

アラタ先生は玄関の扉から一步も入らずに

「ナジオさん！！ちゃんと鍵をかけて下さいね！！」

と、繰り返しているが

私の脳内からはするりと戸締りという概念が抜け落ちている。

それを瞬時に読み取ったのか、

「あゝあ！もう！、んじゃ、僕帰るんで、風邪引かないように寝て下さいね！ おやすみなさい。」

と言いながら靴箱の上に置いた鍵を手に取り

先生が扉の外からカギをかけて 郵便受けから鍵を落としてくれた。

そんな先生の行動も私の脳内からするりと抜け落ちる。

そして、服のままベットにダイブして朝まで目を覚ましませんでした……。

朝起きてから、アラタ先生の家の方角であろうと思われる方角に向かって

ひたすら謝りました……。

ごめんなさい。ありがとうございます。以後気をつけます。

今日はコウイチ先生のアシスタントとして補助についていた  
今は治療に使用する器具を準備する為に 材料準備室で作業中であ  
る。

病院と云う環境上

患者さんから患者さんへの感染・患者さんからスタッフへの感染が  
ないように

消毒を神経質なぐらい徹底的に行う。

器具によって様々な方法で消毒されて保管され

清潔を不潔にしないように最新の注意を払われている。

ゴミの処分に関しても、

針やメスの刃などの危険物や血液や唾液のついた感染の恐れのある  
物は

バイオハザードマークのついた密閉缶の中に入れられ産業廃棄物と  
して処分される。

それ以外の普通ゴミなどは一般のゴミとして廃棄される

術者の癖と好みにあった術式の順序を考えながら

器具を不潔にしないように注意を払いながら準備していると

コウイチ先生が材料準備室に入ってきた。

コウイチ先生は衛生士業務がない時に主に私がアシスタントにつく  
事が多いドクターで

一緒にペアーを組んで仕事をする事が多い。

「最後ナートしようか」

「はい」

ナートとは縫合をする器具の事を指す

先程準備した器具とは別に縫合を行うのに使用する器具を別のトレ  
ーに乗せいく。

「ナジオさんは合コンとか行かないの？」

「行きません」

コウイチ先生の質問に即答。  
手を休めずに

消毒した器具が不潔にならないように注意を払いながら

引出しをあけたり 消毒保管所を開けたりして 今から必要になる  
器具を出していく。

「楽しいのに」

コウイチ先生はオートクレーブ（高圧蒸気滅菌機）と呼ばれる器具  
を消毒する機会に顎を乗せて笑っている。

コウイチ先生は

仕事中は目を守る為に透明な大きなゴーグルをかけ一見冴えない風  
貌なのだが

一歩仕事が終わると

おしやれに気を遣う今時の人間に変身する。

『コウイチ先生には気をつけよう』

それが合言葉のようにさつき歯科の女の子組の中で囁かれている程  
の女好きで

以前勤めていたアルバイトの可愛い女の子を食事に誘ってお持ち帰  
りしたとかしなかったとか・・・

結婚を目前にした彼女がいるとかいないとか・・・  
いろいろな噂が飛び交っている要注意人物である。

私はアシスタントとして担当する事が多いので、  
ドクターの中では一番話をする機会が多いのだが

真顔で下ネタを言ったり、返答に困るような際どい質問をしてきたり  
合コンでの女性の口説き方などの話題が多いので

いろいろと経験の少ない私にはちよつと苦手な存在だが、

コウイチ先生と言う人は自分の個性を相手にそれを受け入れさせて  
しまう不思議な雰囲気醸し出している人でもある。

そんなコウイチ先生

さつきからちらちらと時計ばかり見ているので

おそらく今日も合コンに行くの出だろうと推察。

だから、私に合コンネタを振ってきたのかな？

なので、興味本位に聞いてみた。

「今日の合コン相手は看護婦ですか？CAですか？女子大生ですか？」

「CA」

やっぱり、行くんだ・・・。

「って、先生確か彼女居ませんでしたか？」

私のしつもんにもコウイチ先生は口角をにゅっと上げてニヤッと笑うといるよおくと、気の抜けるような返事をした。

「それって、どうなんでしょうね？」

私がつんざりした顔をしてそう言う

「大丈夫だよ、彼女も他の合コン行ってるから」

などと、明るい表情でヘラヘラと笑って手を振っている

「そういう問題ですか？」

「そういう問題。」

コウイチ先生の笑顔の即答に私は小さくため息ついて

「はい、楽しんで来て下さいね。」

コウイチ先生に指示されたナートのセットを手渡した。

「ナジオさんって面白いよね。絶対いつか一緒に合コン行こうね。」

コウイチ先生のたわごとを背中であきながら準備室から出る。

コウイチ先生・・・私と行ったら、合コンじゃなくて  
単なる飲み会になっちゃうと思うんですけどね・・・

今日は遅番ではなかったのだが、新患（初めて来院した患者さん）の患者さんが多かったので、バタバタと忙しくなかなか帰る事が出来ずにいたが  
ようやく、帰るめどが立ったのであわただしく片付けて帰る準備を始める。

さつきから見かけないな〜と思っていたら、アラタ先生はハルミさんに指示をされて、

休憩室で自分の担当の患者さんのカルテの整理させられていた。

休憩室の奥に財布やカーディガンなどの私物を入れおくロッカーがあるので

必然的にアラタ先生の前を通っていかなければならないのだが、ソファアに座っているアラタ先生は膝にカルテを抱えているので立ち上がることが出来なかったようでした

膝を出るだけかがめて通りやすくしてくれるのだが、なにぶん足が長いので先生の膝をなかばまたぐようにしてなんとか通り過ぎて荷物を取りに行く。

先輩のケイコさんが私と同じようにロッカーに行くためにアラタ先生をまたいで行く

「もう！先生の長い足が邪魔です！！」

ケイコさんにそう言われてアラタ先生はより一層小さくなっている。

立って通路をあけてくれたら・・・

とも思うのだが、カルテを押さえておかないとカルテが崩れそうなので、それも出来ないでいるらしい。

荷物を取ってケイコさん、私の順番でまた先生をまたいで通る。

座っているのが女性スタッフならスカートの裾をまくって通るのだがさすがにアラタ先生の前でそれは出来ないでそのまま通る事にす

る。  
すると、

私の白衣のスカートがアラタ先生の膝に引っ掛かってバランスを崩し  
「ひゃあー！」と小さく悲鳴を上げながら  
後ろに引っ張られるようにしてアラタ先生の膝の上に座り込んでしま  
った。

そして、  
雪崩れるカルテ・・・

「わあ！！ごめんなさい！」慌てて立ち上がった  
まだ診療中な事を考慮して小声で必死に謝って一緒にカルテを拾い  
集める。

ケイコさんは狭い空間で手出しは出来ないと判断してか  
「先に行ってるからね」と、休憩室から出て行った。

待つてよくケイコさん！！手伝つてよ！薄情者！！

声にならない訴えを心の中で叫びつつ 冷静になるように自分に言  
い聞かせる。

「先生すみません。カルテ崩れてしまいました。」

「いいですよ。もう終わりですから」

先生は優しく笑ってカルテを拾い集める

邪魔した罪滅ぼしを兼ねてカルテを順番どおりにならべて棚に片付  
けてゆくのを手伝う。

アラタ先生と2人そろって休憩室を出て

本日の最終責任者のハルミさんと遅番のサツキ先生に「お先に失礼  
します」と声をかけて  
更衣室へと向かった。

先に更衣室では、先が上がった先輩たちが

先ほど私がスカートをひっかけてアラタ先生の膝に「お座り」して

しまったという話題をケイコさんが話題提供して出来事で盛り上がっていた。

「ナジオの白衣のスカート丈ちょっと長いんじゃない？」

あんだ、たまにエプロンを扉のノブに引っかけてたりするでしょ？ スカートの丈を少し短くして、エプロンをもう少し詰めてぴったりにしたら？」

あまり、体のラインの出るが嫌なのでダブダブのエプロンをしていたら

背中に出来た空間でよくドアノブに引っかけてしまうのである。

「そうします。」と

素直に先輩達の助言を聞いて、家で縫う為に白衣とエプロンを鞆に入れる。

先輩達には逆らいません。．．．いえ、逆らえませんが．．．

着替えを済ませて診療室を出ると

電車で帰るのは私だけなので、診療所の前で別れた。

遅い時間帯だった事もあり、通り過ぎる人陰もまばらな通りを

ヒールのコツコツという音を響かせてゆっくりと駅に向かって歩いて行った。

今までスニーカーばかりを履いていたのだが、

先日ミオの勧めで買ったパンプスを今日初めて履いてきたのである。子供みたいだが、

このコツコツ鳴る音がなんだか「大人の女」って感じで楽しくて上機嫌で駅までの道をゆっくり歩いた。

ヒールのコツコツという音は私にとって新鮮でわざと響くように歩いて楽しんでいた。

すると、私の足音に合わせてついて歩いてくる気配を感じた。私はもともとビビリなので、周りの気配などには常に気を配っている。

この気配は気のせいでも何でもなく、私についてきていると確信を持って言える。

もしかし、痴漢?!

ドキドキしながら少し早歩きになると、後ろの気配も少し早くなる。やっぱりついてくる!!!!

確定だ!!--どうしよう!と、少しパニックになっていると突然「ナジオさん!」と後ろから肩を掴まれた。喉の奥で小さく悲鳴を上げて体を硬くする

・・・え?私の下の名前?

「ナジオさん!」ともう一度名前を呼ばれた。

あれ?知り合い?

振り向くとアラタ先生とコウイチ先生がニヤニヤ笑いながら立っていた。

「もう!!--びっくりするじゃないですか!!--」

「僕はやめようって言ったんですけど、鬼追先生が・・・」

「だって、楽しそうだったから」

コウイチ先生の悪戯心を止められなかったと申し訳なさそうに謝るアラタ先生と

してやったり!!とした表情のコウイチ先生

余りにも心臓に悪いおふざけに怒り心頭の私だったが

コウイチ先生のする事なら仕方がない・・・と直ぐに諦めた表情になった

「コウイチ先生、今日は合コンだったんじゃないんですか？」

「あれ、メンバーが急にドタキャンしちゃって流れちゃった」

コウイチ先生は少し残念そうな表情をしているが、それほど楽しみにしてはなかったのか

今ではケロツとした表情をしている。

そんな私に取っただらどうでもよい話をしながら

三人とも電車通勤なので3人で仲良く(?) 駅のホームに立つと

「ナジオさん、これから一緒に飲みに行かない？」

と、コウイチ先生がそう提案してきたが、

コウイチ先生はお酒が入ると何をされるか判ったものではないので即答で断る。

「お断りします」

「赤松も行くからさ」

「え?!・・・そ、そうなんだ!」

コウイチ先生の発言に一瞬ビツクリした顔をしたくせに急に同意するアラタ先生・・・

絶対、そんな予定なかったよね?!

「アラタ先生が居ても嫌です。では、お疲れ様でした。」

そう言つて電車に乗ろうとすると

「ちよつと待つて」と腕を取られる。

「たまにはいいじゃない。」

赤松と3人で飲みに行こうよ」

しばらく、『行く』『行かない』で押し問答になった。

走行しているうちに、入ってきた電車は無情にも扉を閉めて発車してしまった。

「今日は、帰って白衣とエプロンの修理をしないといけないので、早く帰りたいんです。」

私がそう言うと

「ナースプレイでもするの?!」

と、すぐにそっちのネタに結び付けようとするコウイチ先生

「しません!」

「なんだ〜、つままないの〜。でも、しないんだったらいいじゃん行こうよ〜。」

赤松も一緒に飲みに行きたいよな?」

そう言つて、コウイチ先生は諦める気配を見せないので

私も根負けしてしまって仕方なく了解する。

それならば、と

私は鞆から携帯を出してミオに素早くメールを打つ。

「判りました、でしたらコウイチ先生、私の友達を呼んでもいいですか?」

もちろん女性ですから」

そう言つと、コウイチ先生は嬉しそうに了承する。

同じ職場で働く人間とは言え、

コウイチ先生とアラタ先生とさしで飲みに行くほど私の心臓は強くはない。

そんな時には、うちの魔王を投入するまでだ!

「友達つて美人?」

「美人ですよ」

メールを送つてすぐに手の中の携帯が鳴った。

以前から、コウイチ先生の話しをミオにしてきた。

そのたびに「実物に会つてみたい」と言っていたので直ぐに乗ってくるであろうとは想像したが

数分後にミオから返信が私の携帯に届いたのは「了解」の二文字

食いついた!!

心の中でガッツポーズを取ったぐらいの勢いでうれしかった。

ミオの方も

暇だったのか即答で返事が返ってきた事にも二度びっくりである。

「場所どうしますか？」

携帯の液晶画面を見ながらそう言うと、

コウイチ先生は自分の行きつけのお店があるのかすぐに店の名前と場所を口にした

その店の名前と場所をメールで送る。

すぐに『了解』と返信が来た

場所が決まったので3人で電車に乗って先に店に向かう事にする。

今まで何度かコウイチ先生に飲みに行こうと誘われては居たのだが、

『二人で飲みに行くのは嫌です』と、断り続けていたので

今回はアラタ先生も一緒だと先手を打ってきたようである。

・・・絶対、思いつきで口にしただけだと思う・・・。

今日もアラタ先生とインパルスで落ち合う予定だったので、別に問題はないのだが、

コウイチ先生と一緒に事が私のテンションを下げさせる。

アラタ先生が入る前の、忘年会の時に酔っ払ったコウイチ先生に絡まれて困った事があった。

あの時は本当に、殴らなかつた事を逆に誉めて貰いたいぐらいのセクハラっぷりで

それ以来、コウイチ先生には関わらないようにしているが

私の『反応が面白い』としょっちゅう、ちょっかいを出してくるの

で困っている。

コウイチ先生は結構強引な性格なので、何かあつたら、アラタ先生に押し付けてミオを連れて帰ろうと心密かに計画しながら、電車を降りた。

コウイチ先生の指定した店は

薄暗い照明で大人な雰囲気の漂う落ち着いた店だった。

今日は、シャツに黒のスキニージーンズにパンプスをはいていたので場違いな雰囲気ではなくて人安心。

店に到着してから、また店の場所と名前と自分達が座った席の正しいの位置を

ミオにメールで伝えておく。

取り敢えず、ミオが来るまで飲んで待つておこう

と、いう事になって、

アラタ先生と私はビールをコウイチ先生はウイスキーを注文した。運ばれてきた飲み物がそれぞれの手に渡ると

コウイチ先生が「お疲れ様、乾杯」とグラスを持ち上げる

私はグラスを合わせる事なく自分の手元で少し持ち上げて「乾杯」と言つて口に運んだ

アラタ先生とコウイチ先生はグラスを軽く合わせてから飲んでいる。

「ナジオさんつてそんなに俺の事嫌い？」

不機嫌そうにしている私の表情を見てコウイチ先生聞いてきた

「嫌いではありませんが、日々の発言が苦手です」

ぶっきらぼうにそう言うコウイチ先生は笑いながら

「ナジオさんの反応が楽しいからついついからかつちゃうんだよ」

「お

などと言っている。

言われている方はたまつたものじゃない。

もう少し大人になって軽く受け流せるようにしなければとは思っているのだが

まだまだ子供の部分が出てしまうようである。

「赤松とナジオさんは仲良いの？」

「普通です。」

私が即答すると

黙って成り行きを見届けていたアラタ先生がいきなり

「通り過ぎざまに、僕の膝に座って行くぐらいの仲です」

と、真顔でそう言ったので、思わず飲んでいたお酒を吹き出しそうになった。

「あれは！スカート裾が先生の膝に引っ掛かって、バランスを崩してしまつてですね！！」

強く否定をしようとしたら

「なにそれ?!どこで？」

と、コウイチ先生が食いついてくる

「休憩室のソファで、です。」

積んであつたカルテを崩す勢いで

アラタ先生がそう続ける

事実を誇張のいっさいもなく語っているのだが、何か説明するのに必要な言葉欠けているその話し方は

完全にコウイチ先生のツボを得たらしい。

「どおりで、僕になびかないと思つたら

ナジオさんは赤松の方が良かったんだ。だ・か・ら・か・あ。」

コウイチ先生は自分の中で勝手に何かを理解したらしく一人で頷いている。

「だから、あれは事故ですし、先輩も一緒に居ましたから」

私は誤解を払拭しようと、必死で言い繕うが。

「なんだ。僕一人が知らなくて、皆の公認なんだ。」

と、また勝手に私たちを関係づけているらしい。

アラタ先生の方を向いて睨むと、アラタ先生は嬉しそうに小さく笑った。



「ナジオさんって目が良いよね。」

私の顔をジーンと見ていたコウイチ先生がいきなりそう言った。

「え？ 私 コンタクトですよ？ コンタクトも眼鏡も無かったら全然見えませ。」

私はお酒を口に運ぼうとしていた手をとめて 首をかしげながらそう言つと

「……」

「……さすが、ナジオさん」

と、二人とも微妙な反応。

あれ？ 私なんか間違えた？

「背も高くてスタイルもいいし」

コウイチ先生が気を取り直したかのようにさういう

「私背が高いですか？ 祖母より小さいですし、一族の中ではちびっこですよ？」

それに、スタイルなんて全然良くないですよ！ こんな薄くてひんそな体型」

「……」

「……そう来たか」

ん？ またさっきと同じ反応……なんで？

そしたら、急に

「これって、わざとだと思つか？」

「素だと思えますよ」

ボソボソと二人でなにやら話しているが微妙に聞こえています……

・・・なに？ 私、もしかして馬鹿にされてる？

突っ込むべきか放置すべきかと悩みながら  
そんなやり取りをもやもやした気持ちで観察していると、  
仕事帰りのくせにはっちりメイクしたミオが到着した。

絶対、どこかでメイク直ししてる！！  
どっだけ気合いいれてんのこの人？！

そんな心の突っ込みをよそに

「こんばんは、ナジオの友達の東條澗と申します。」  
私たちの前に立ったミオは完璧な営業スマイルを先生方に披露した

・・・服装まで気合はいつてます。はい。  
あなた、いつもそんな気合いの入った格好で会社に言ってる  
んですか？！

それに、私が思うに、コウイチ先生に狙われると思いますよ？  
いいんですか？ミオさん？

「ナジオにはいつもお噂は窺っておりますよ。  
こちらが、コウイチ先生でこちらがアラタ先生かしら？」  
計算された微笑みを浮かべたミオは  
コウイチ先生のお前に座りながら言葉を続けると。  
想像以上の人物が登場した事で  
上機嫌になったコウイチ先生は  
嬉しそうな表情を浮かべて自己紹介をした。  
アラタ先生もコウイチ先生の後に名前を言っただけで紹介をすませ  
た。

ミオは席に着く前に入り口で飲み物を注文して来たらしく

直ぐに飲み物が運ばれて来た。

「どんだけ段取りいいのよ?!」

取り敢えず、と云う事で4人で乾杯をして

お酒を一口飲んだらすぐに

開始された会話にそつなく返事をし、

そこから話しの輪を広げていくあたり合コン慣れしているという三才とコウイチ先生の発言は、

伊達ではなかったらしい。

しばらく4人で雑談して

タイミングを見計らってトイレに立って戻ってくると

私が座っていた席 すなわちミオの隣の席にコウイチ先生が移動していた。

「ちゃっかり、グラスと器まで移動させてある……。」

「これは、飲み会ではなく やっぱりノリは合コンなのか？」

頭のなかであれこれ考えながらコウイチ先生が座っていた席に座る。

黙々と料理を食べていたアラタ先生は

コウイチ先生の予想外の食いつきに

苦笑いを浮かべて「おかえりなさい」と迎え入れてくれた。

「コウイチ先生、完全に合コンのノリですね……。」

アラタ先生に小さくそう言うと

「あ、赤松とナジオさんのラブラブカップルは

俺達の事は置いといて熱く語り合ってた。」

と、コウイチ先生のとんでもない発言が飛んできた。

「コウイチ先生何回も言うようですが誤解です。」

決して私とアラタ先生はそんな間柄ではありません!」

「あら?ナジオ、赤松先生とそんなに仲良しなの?初耳。」

赤松先生、気難しい子ですけどナジオの事宜しくお願いします。」

「判りました」

「判らんでいいです！」

三人がノリ良く盛り上がっている中、一人でムキになって訂正している

ミオにシッシと、犬にでもするかのように追い払うジェスチャーをされた。

仕方がないので、最近見た映画や読んだ本の話などをアラタ先生としながら時間を過ごす

ミオとコウイチ先生も話が盛り上がっているらしく、時々ミオの笑い声が聞こえてくる。

「最近DVD化された話題の映画に出てくるへりあるじゃないですか、あれってやっぱり松島からきてるんですかね？」

ボソツと話を振ると

「ロケ現場の場所から考えるとそうだろうね。」

多くを語らなくても、意図をさっしてくれたらしくアラタ先生が返事を返してくれる

「私、あのホバーリングの音を聞いた時に

実際に近くで聞いている音のようで少しテンションあがったんですよ。」

映画館に見に来て良かった〜って思える臨場感があって

「そうなの？俺DVDで見ただけ結構リアルな音がしてよかったんだけど、やっぱり映画館の方が良かったんだ〜」

「私、あの音の為に映画館に行っただけですよ」

「音フェチ？」

「うん、結構好き」

「そっか〜。俺も次回作があれば映画館で見るようにするよできれば、実際に飛んでいる音が聞きたいけどね。」

などと二人の共通の趣味である乗り物についてささやか盛り上がっている

「二人とも盛り上がってるねえ」

コウイチ先生が私たちを見ながらそう言う  
と今度は何？と、一瞬身構える。

「ちようどいいし、ここで二手に別れない？」

と、提案してきた。

ミオと二人つきりで話したいから、ここで解散しようと言っているのか？

と、一瞬ミオの身を案じてミオの方を見ると

『大丈夫』音を出さずに口の動きだけで私に伝えてきた。

どうやら、コウイチ先生と二人になっても大丈夫だと判断したらしい。

ミオが大丈夫だと云うのなら勝算があるのだろうと思うのだが

一瞬友達を置き去りにして帰る事に躊躇した

それでも、私の中で早くコウイチ先生から離れたかった思いが勝った。

ごめん、ミオ・・・私はあなたの判断に任せます。

「判りました。

では、私はここで解散と云う事で帰ります。」

そう言つて、自分の分の支払いを出そうとすると

「いいよ、ここは僕と赤松で出すから」

と、コウイチ先生の気前のいい言葉が飛んできた

「いえ、出させて下さい」

そう言つて財布を出すと

「今日は無理やり誘ったんだから、僕と赤松がここを出すって事で驚かせたお詫びも兼ねて。」

確かに、驚かされた事への謝罪の意味が籠っているのならば

素直に好意に甘えるべきなのかどうかと迷う。

コウイチ先生一人に出させるのならば

断固として支払いを主張するのだがアラタ先生も出してくれるのなら、

後でアラタ先生に返して自分の気持ちの上でスッキリしたらいいだろうと思いなおして、

素直に好意に甘える事にした。

「判りました、先生達に御馳走になります。

では、私はここで失礼します。

ミオ、先に帰ってるから 何も無いと思うけど、何かあったら連絡してね」

最後の言葉は半分コウイチ先生へ釘をさしたつもりなのだがあまり伝わっている様子はなかった。

コウイチ先生とミオは笑って私に手を振っている。

「じゃあ、僕もナジオさんを駅まで送るついでに帰ります。」  
と、アラタ先生も立ち上がった。

財布からさつとお札を何枚か出してコウイチ先生に渡している。  
これも打ち合わせのうちなのだろうか？

そんな事を思いつつ、お先に失礼しますと、声をかけて二人揃って店を出た。

「ミオ大丈夫でしょうか？」

「東條さんなら大丈夫ですよ。」

「だったら良いのですが」

そついいながら、ふたりで駅に向かって歩いて行く。

目の前に広がるビルとビルの間隙から空には星が一つ二つ見える

私の家からでも星は一等星ぐらいしか見えないが

ここは町のネオンが明る過ぎて星がよけいに見えない。

「今日はお月さましか見えないですね。

夜空が綺麗にみえるところに行ってみたいと子供の頃から思ったんですけど、

なかなか行けなくて。」

帰省する田舎もない都会育ちの私にはどこに行けば綺麗な星が見えるのか

星を見るのに必要な物などの一切の知識がない。

本当に見たければ、子供の時と違いバイクもお金もあるのだからとつとと調べて行動に移しているはずなのだが、

どんなに綺麗でも、一人で夜空を見上げる寂しさを感じるのが嫌なのだと

無意識に足を遠のかせているのだろうと思う。

ネオンでライトアップされた明るい夜空を見上げながら歩いていると

「プラネタリウムはどうですか？」

いきなりの提案に言われた言葉の意味が分からず

「プラネタリウム？」

と、オーム返しに聞き直す

アラタ先生は立ち止まって私の方を向いて微笑む

「プラネタリウムです。」

夜に星を見る事ばかりを考えていたので、プラネタリウムの存在を忘れていた。

星の初心者の私にでも、解説付きの天体観測が出来る場所。

なんて魅力的な誘いなんだろうと立ち止まってアラタ先生を見る。

「プラネタリウムの存在を忘れていました。」

先生も天体観測とかお好きですか？」

「興味はありますけど、一緒に行ってくれる人が居たら

星が好きになるかもしれません。」

どういう意味なんだろう？

もしかして、私、今、誘われてる？！

いや、自意識過剰になっているのかもしれない・・・

「そうですね。」

では、お友達を誘って行って見られてはいかがですか？

私も友達と行きますから」

本当はアラタ先生と一緒に行けたらと思っっているのに口では釣れない事を言ってしまう。

どうしても、自分に素直になれずにヒネタ事ばかり言ってしまう。

「つれないな。一緒に行きましょうよ、次のお休みの日に」

「私と一緒にですか？」

「はい、俺と一緒に嫌ですか？」

やっぱり誘われてたんだ……。

そう思うと急に照れて顔が赤くなってしまっ

アラタ先生に顔が赤くなつたのを見られたくなかつたので、人に道を譲る振りをして少し早歩きで先生の前を歩く

「嫌じゃないです……」

背中越しにそう言っ

「じゃあ！次に同じお休みの時に！！」

アラタ先生はおそらく満面の笑みを浮かべているのであろう声で返事が返ってきた

「ねえ、先生 飲み直しませんか？」

「いいですね。これから、インパルスに行きましょうか？」

「はい」

そして、二人揃って駅に向かって歩いて行った。

プラネタリウムに行く前に、図書館で星座の本を借りてきて勉強でもしようかな。

ある日の休憩時間　くアラタ目線く（前書き）

・・・R？

## ある日の休憩時間　くアラタ目線く

仕事がある日の昼飯は毎回私服に着替えて外に食べに行く。院長は自宅が近くにあるのでそちらに毎回食べに帰っている。

そのせいか、

他のスタッフもそれぞれ家が近くにあるので食べに帰る事が多い。皆が言うには、

温かいご飯が食べたいらしく、外に食べに行くのなら

家で食べたほうが落ち着くらしい・・・

俺は一度家に帰ってしまうとダラダラして家から出るのが億劫になってしまうから

そのまま診療所で食べた方が楽だと思うのは気のせいなのだろうか・・・

まあ、人それぞれなので口出しはしないが。

俺は昼食を先輩の鬼追さんと一緒に食べる事が多い

でも今日は、食べたいものが鬼追さんと会わなかったので、途中で別れて別々の店に行く事にした。

食事を終えて帰ってくると

先に帰ってきていたらしい鬼追さんが

休憩室の端でナジオさんと

雑誌を見ながら何やら真剣な顔をして話し合っている。

ナジオさんは自炊をしているらしく

家からお手製の弁当を持参していつも休憩室で食べている。

いつもなら誰か一人はスーパースーパーやコンビニなどで買って来た物を一緒に食べているのだが

今日は皆外に食べに行ったらしく、部屋には鬼追さんとナジオさんしかない。

ふと、

二人が真剣に何の話をしているのかと興味をわいて  
会話が聞こえる程度の陰からこっそり近づいてみる。

「やっぱり、王道に行くべきだと思っただけだ」

「それは、先生の趣味の問題でしょ？」

「いやあ、男のロマンだよ！」

「だって、そのロマンって、見せる事限定でしょ？」

自己満足のレベルを日常生活に必要なじゃないですか？」

「そんな事ないよ！ いつ必要になるか判らないじゃない！それに  
備えないと！！」

「判らない『いつ』があるんですか？！備えるって！！日常の話で  
すよ！日常の！！」

「緊急を要する時だってあるんだって！」

何の話をしているのか良く判らないが、

「あの」鬼追さんの事だから

なんとなく嫌な予感がする……。

「やっぱり、白のレースだよ！」

「ええ〜 白ですか？」

生地がテカテカしてるし安物だったら、レースの部分チクチクしそ  
うです」

「じゃあ、ちよつと高級なのを選んだらいいじゃない

そしたら、レースの部分もチクチクしないで落ち着いた感じの生地  
あるでしょ？」

「……なんで、そんなに詳しいんですか？」

「……まあ、でも日常でしょ？」

普段使いに高級なのは無いんじゃないですか？」

「でも、お洒落なやつをつけてると。」

なんとなく雰囲気が良くなるって云うじゃない」

「それはそのデザインを意識してるからでしょ？」

「だから、日常的にいいのをつけてると それに合わせた雰囲気を作れるって事だよ！」

「キュートなやつを日常で使ってたらキュートな雰囲気になるって事？」

「そういつと」

なんだろう・・・

決定的なワードが出てないのに

何の話をしているのか、

うつすら判ってしまった気がする・・・。

「で！ナジオさんはどれ？」

「ええ、私はやっぱりボクサーですね。」

「ええ！ここまで説明したのにまだボクサー?! 考え改めようよ！」

「なんで、私が先生に合わせないといけないんですか?!」

「僕は、やっぱりナジオさんにはスタンダードタイプでレースがたつぷりな白をお勧めするよ」

「私、スタンダードタイプは嫌いです。」

いつも履いてるジーンズは全部ローライズなので基本シンプルデザインのローライズです。

それにレースがついてたら洗濯の時に気を使うし！

ボクサータイプだったらお腹周り幅広ゴムだから、かがんだ時に腰からチラ見えても気にならないし

そう考えると、ボクサーのローライズタイプがベストですね」

「え、でもラインが出た時に効果的なのはやっぱりこれだよ！」

「だから、そのラインを出したくないんですって！」

ストッキング履いてその上、スリッパまで着てるのにライン出るってどうよ?!」

「何言ってるの！ 服の上からうつすら見えるあのラインがそそる

んじゃない!!

白衣だったらなお良し!!」

「・・・あんだ、仕事中に何考えてるの?!」

「ん? いろいろ?」

あ・・・やつぱり・・・

あの雑誌、通販カタログだ・・・

しかも女性の下着のページ・・・

鬼追さんのペースに巻き込まれて

ナジオさんの下着事情をしゃべらされてるし・・・。

「でもさ。ボクサーってさ、男の物って感じしない?」

「そんな事ないですよ。最近種類も多く出てますし」

「ボクサーの時のブラどうなるの? セットであるんでしょう?」

「もちろんありますよ。デザインはスポーティーな感じになるますね。」

「なんか、色気無い気がする・・・」

「そんな事無いんじゃないですか? レースが無くても色っぽいやつってありますよ?」

そう云いながらページをペラペラめくるナジオさんに

微妙に距離を縮めて 一緒に雑誌を見ようとする鬼追さん

気付いて下さい!!

ピンチですよ! ナジオさん!!

男性が、

通販カタログとはいえ

女性物の下着のページと一緒に見るは

なんとも思わないんですか?!

「ええ、これ、なんだかな。」

「いいじゃないですか、ボクサー 私8割はボクサーですよ?」

「ローライズボクサー?」

「はい」

「ローライズってどれくらいの浅さなの?」

これ以上は駄目だろう!!

思いつきり、黒い笑顔した鬼追さんからナジオさんを救出すべく

「鬼追さん、教えて欲しい事があるんですけど!!」

教えて欲しい事など何も無いのだけでも、なんとなく言ってみた!

いや、ある意味

なぜそんな状況になったのかを教えて欲しい!!

「ああ、赤松。いいところに来た。」

「はい?」

声をかけたら嫌な顔をされると思っていたのに逆に歓迎された。

「ああ、アラタ先生おかえりなさい。」

今ね、コウイチ先生と女性の下着の色とデザインの話をしてるんですけどね?

コウイチ先生が、男のロマンは白のレースだって主張するんです!」

「はあ」

だから、ナジオさん

鬼追さんに毒されてますよ……。

俺にまで女性下着の話を

ふってどうするんですか……。

「赤松はなに派? やっぱり、白のレースだよな!」

「確かに、スポーティーな感じのボクサーはロマンに合わないかも  
しれませんが」

最近では、男女お揃いのボクサーパンツとかあるじゃないですか！  
「……はあ」

まず、「なに派」ってなんですか？

「例え彼氏彼女の関係でも下着がお揃いってなんか微妙じゃない？  
「私もペアールックはちょっとどうかと思いますけど……  
でも、人それぞれですよ！ アラタ先生はどう思います？」  
「……そうですね……」

俺も彼女とお揃いの下着はごめんです。

それよりも、  
どちらかというと、

答えようがない質問はして欲しくくないです……。

「でも、脱がせる時にボクサーって色気無さ過ぎだろ？」  
「なんで、脱がせる事前提なんですか！！ 日常でしょ？ 勝負じ  
やなくて！」  
「……ええ〜っと」

鬼追さん直球すぎるでしょ！！

俺もそう思いましたけど……。

「常に、何かあるか判らないじゃないか！  
今日だって、もしかしたらこの後

奇跡の急展開で お持ち帰りされるかも知れないじゃないか！」

「ありえない事を前提に話をしないで下さい。ねえ、アラタ先生」  
「……そうですね……」

ないでしょうね、  
そんな奇跡のような美味しい展開・・・。

「そんな事判らないよな？赤松？」

「無いでしょ！アラタ先生」

「・・・え？・・・ええ・・・」

止めに入ったつもりが、

窮地に立たされた感が満載なのは

気のせいでしょうか・・・

「聞いているのか？赤松！」

「どう思いますか？アラタ先生！」

誰か助けてー！！

つつつか、

職場でなんて話してるのこの人たち！！

ナジオとアラタは

手洗い場で顔を合わせた時

譲り合いながら手を洗っていた。

「やっぱり、あのフォルムであのカラーが最高にあうと思うんですよね」

「そうですね？」

確かに、面白みのない色かもしれませんが、

だからこそ、あの色がよりよく感じるんじゃないですか？」

手袋を外してブラシを使いながら念入りに手を洗う二人

会話が唐突に始まったのに

お互いに何についての話をしているのかちゃんと判っている様子。

「でも、部隊のカラーを象徴するって点ではどうでしょう？」

「・・・確かに、すべてが一緒では区別の使用が無いかもしれないんが・・・うう〜次回に持ち越し」

そついいながら、手を拭いて

また違う方向に向かって歩き出す。

しばらくして、

歯列模型を見ながら 治療方針をかんがえていたアラタの所に  
材料の補充に訪れたナジオ

「あの音、超イイですよね？」

「さすが音フェチ。歴代の最高は？」

「歴代？ 私の中で最高はKAWASAKIですね！」

「え?! バイクですか? 僕はやっぱり、T-4ですよ!」

「私、じかで聞いた事ないですもん・・・」

「爆音最高です」

「私はカーゴ派ですから」  
お互いがお互いの方向を見ず、作業の手を休めることなく交わされた会話は  
唐突に始まった会話はまた唐突に終わって  
二人は離れて行く。

業務終了後、

診療所から駅に向かって歩いていくナジオとアラタ

「あの角度だと、入りにくいから

沿わせて入れて行くといいんですよ。」

「でも、隣接面とか・・・」

「だから角度なんですよ！」

「あゝあ、そうか。」

「じゃあ、視野確保の手の角度を変えたらいけるって事？」

「そうですね、だからアシストについてる人に角度を変えて貰えば

OKなんですよ！」

「なるほどね。これが一人でできたら完璧ですね！」

スッキリした顔のアラタと嬉しそうに笑うナジオ

・・・基本この二人の会話は診療所では趣味の話を通り過ぎざまに  
ポツポツ

外に出たら、治療内容などのアドバイスをナジオからアラタへして  
いる・・・。

普通逆じゃない？！

仕事の合間の会話 仕事帰りの会話 〱ナジオ&アラタ〱（後書き）

この二人、職場では仕事の話をお互いにあまりしません。

職場では通り過ぎざまに、お互いの共通の話題の「乗り物」の話が多いみたいです（笑）

仕事が終われば

ナジオがアラタに今までの経験上のポイントなどを伝えているみたいです。

（ナジオは他の先生達の治療方法をつぶさに見てきてますから）

ほんと、普通逆ですよね？

## ミーティング・1

週一回、全員がそろう曜日の昼一番はミーティングと決まっている。一週間の患者さんの人数の報告から始まってサツキ先生の一言、

『この間のように、日本語があまり話せない患者さんがこれからも来院するかもしれないので

個々で、少しでも語学の勉強をして頂けるとありがたい』と、云う事で

さっそくサツキ先生が本屋さんで購入してきた英語・韓国語・中国語の語学用教材をスタッフルームに置いておくので、目を通しておくようにとの事。

最近では、医療通訳なるものがボランティア等で登場しているようだが

小さな町の歯科医院に訪れる事は少ないだろうとサツキ先生は無言でアラタ先生に英語編を

私に韓国語編と中国語編を手渡した

なぜに2冊?!

3カ国語のうち2カ国語も自分が担当せねばならないのか?

と云った表情をにじませて中国語の語学用教材を片手に顔をあげると他のスタッフは私に逆指名されないように眼を合わせないように天井や床などに目をやっている

無言の強制指名かい!

韓国語はともかく、今から中国語の勉強をしなければいけないのかとややうんざりしたが、

スタッフの総意なのであれば反論してもしようがないと諦めて受け

取った。

まあ、今後直ぐに活用する事もないだろうから、気長に行こう……。

つてか、独学？！

学費 診療所持ちの駅前留学とか無し？

……無しだよね……。

『国際的な歯科医院にしましょう』と、にこやかなサツキ先生の締め言葉の後

スタッフ同士の申し送りや、意見・感想などをそれぞれに発言していく。

月ごとに院内で『家元』と呼ばれるあだ名の

待合室などに生花を活ける担当があるのだが、

これをローテーションせずに固定するなどの案があがり

ケイコさんが指名されてミーティングは終了した。

私は自分には生け花のセンスがないと自覚していたので

ローテーションから固定になって良かったと心から安堵した。

一度、私の家元当番の時に

「枯れた花を咲かせている」と受付担当の先輩、からきつい叱責を受けた事が

生け花の苦手意識の始まりだと確信している。

この間、シズカちゃんに言った「出来ないじゃなくてやってみたい」の精神はこの時ばかりはお休みしていたらしい。

「国際班 任命おめでとう」

家元に就任したケイコさんが溜息交じりで私にそう声をかけた

「ご就任おめでとうございます。家元」

お互いに損な役回りを押しつけられたと云う顔をしながら就業の間を待った。

その日の午後、ユキが頻繁に失敗をする事に怒ったハルミさんにユキともども呼び出された。

「ナジオ！あんたは、この子にどんな指導をしてるの？」

下の子の教育はあんたの仕事でしょ？」

ちゃんと、責任を持って行動を見届けて確認しないと駄目じゃない！

この子の失敗はあんたの失敗でもあるの！二人揃って反省しないさい！」

専門学校の時から存在を全否定されるぐらいの説教をされ続けていた事と

さつき歯科に入った時からハルミさんとリサさんには散々雷を落とされているので

怒られる事には慣れっこになっているのだが、

ユキは、未だに慣れられないらしく、キュツと握った手が震えていた。

その後も、ハルミさんにしばらくネチネチと嫌味や皮肉を言い続けた。

そうやってしばらくして、気が済んだのか

「判ったわね?!」

と、捨て台詞のように言っつて自分の仕事に戻って行った。

「言っつてる事は正しいんだけど、もう少し言い方を考えてくれたら・

・

っつて、いつも思うんだけど、そう思わない?」

ユキの方に向けてそう言っつと

眉間に深い皺を寄せて暗い表情をしている。

「すみません、私のせいでナジオさんまで怒られてしまっつて」

申し訳なさそうに小さく私に謝るユキに

私は笑っつて「慣れてるから」と、ヒラヒラと軽く手をふる。

「ハルミさんの言っつてる事は正しいのよ。」

だから、気を付けて。

ハルミさんは患者さんの目線で言っているの。

患者さんの身の安全を守る事と、自分の身を守る事を優先してね。

「はい」

小さい体をより一層小さくさせて返事をしているユキを笑顔で励まして

診療室へと戻って行った。

仕事帰りの駅のホームで携帯のメールを確認し鞆に直してからその鞆に入れられた語学用教材を溜息交じりに取りだしてパラパラとめくった。

緊急の会話が記載されてるからって 旅行編ってどうよ!!  
せめて、日常会話編でしょ?!!

そんな事をブツブツつぶやいているといつやってきたのかアラタ先生が私の横に立っている。

私の手元の資料を覗き込みながら「大変ですね二カ国語」と苦笑い。

「私、韓国語は少し話せますけど、読むのは苦手なんですよね・・・」

いろんな意味で1からちゃんと勉強し直さないのかな・・・」

私はそう言いながら資料を無意味にパラパラめくる。

自分で思っている以上に苛立っているらしい

「慌てずゆっくり学んでいけばいいじゃないですか。

それに、長い目でみれば自分の為になる事ですし」

そう言ったアラタ先生の顔をマジマジと見て

「やっぱり、先生のそういう前向きな考え方って私好きですよ」  
そう言っただけほほ笑んだ。

「じゃあ、俺たち付き合っちゃいませんか？」

線路の方向を真っ直ぐに見たままアラタ先生が言う。

そして、ニッコリとした笑顔を浮かべた顔をゆっくりこちらを向いた。

「なんで？」

「気が合っから」

「『趣味』じゃなくて？」

「それもあります。」

コウイチ先生の教育のおかげ（？）で

この手の話に反射的に否定的な返事をしてしまう癖が出来てしまったので

よく考えずに返答をしたが

ちよつと待て！

付き合っつてあれだよな！ 手が足りないから手伝っての付き合っつて

じゃなくて、『交際』する方のお付き合いだよな？！！

「それ、本気で言ってます？」

「かなり本気ですよ」

これって告白だよな？

それも本気って・・・

いきなりの事だったので気の抜けた顔でアラタ先生の方を見ると、

「俺の趣味を理解してくれるのが一番の大きな理由ですが、

一緒に働いていて 一番落ち着くのがナジオさんなんです。

だから、本気で言ってます。俺と付き合ってくれませんか？」

アラタ先生は照れたように笑いながらもまっすぐと私の目を見てそう言った。

頭の中がごちゃごちゃしていて

どう答えていいものかわからず ええ〜っと あのおくと  
ごによごによと口ごもっている

「今すぐに返事して頂かなくてもいいので  
と優しくほほ笑んでくれた。」

「あのお・・・私、アラタ先生の事たぶん好きです。  
でも、今はまだ『たぶん』がつかます。」

そんな状態ですが・・・あのお・・・  
そこまで言つと、もう耳まで真っ赤になってしまつて言葉が出てこ  
ず俯いてしまった。

「あのお・・・なんで、こんなところでこんなタイミングなんですか  
？」

私は、自分が落ち着く為に 若干話をそらして質問すると。

「職場以外でいつでも言う事ができたのですが、なんとなくタイ  
ミング的に今なくなつて思つて」

え?! 絶対今のタイミングがベストだと思えないんですけ  
ど?!!!!

確かに、アラタ先生が好き

でもこれは恋とかそういう物じゃないような・・・そんな気がチラ  
ツとする・・・。

返事をハッキリとする事が出来ない・・・。

「先生・・・お返事保留にさせて貰つてもいいですか？」

おずおずとそういう私にアラタ先生は優しくほほ笑んで頷く  
友達だと云えば友達のような関係なのだけれど

そこから進歩して恋人になりませんか? って事だよね・・・。  
しばらく考えさせて貰おう。

ってか、ミオに相談しよう!

それが一番だ！！

私はそう思って鞆から携帯を取り出してミオにメールを打った。

「ミオへ

相談したい事があるので家に来て下さい。

ナジオ」

## ミーティング・2

手に握りしめていたままの携帯がメールを着信した事を告げる。

「部屋で待ってる」

ミオからの短い文章のメールである。

私は携帯から顔を上げると思い切ってアラタ先生に提案してみる。

「先生、今から私の部屋に来ませんか？」と。

「今から、ナジオさんの部屋にですか?!」

いきなりの私の提案にビックリした様子で、どう返事したらよいのやら……

といった雰囲気醸し出されている。

「私の部屋でミオが待っていますから、

三人でお食事でも一緒にしませんか？」

私が重ねてそう言つと

「東條さんが一緒なんですか……判りました。御一緒させて下さい。」

と、言う事でホームに入ってきた電車にアラタ先生と二人で乗り込んだ。

電車内からミオに

今からアラタ先生と一緒に私の部屋に行く旨と

3人分の食事を用意するのでスーパーで食材を購入して帰る旨をメールする。

するとすぐに「了解」との返信が帰って来た。

最寄駅の近くにあるスーパーでアラタ先生と二人で買い出しをしている間も

私の頭のなかは、アラタ先生への返答をどうするべきか・・・そればかりを考えていた・・・。

「先生、重くないですか？ 私、半分持ちますよ？」

スーパーを出る時に「持つよ」と言ってお買い出しの荷物を全部持ってくれたアラタ先生。

人に荷物を持たせる事に慣れていない私は

先ほどから何度もアラタ先生にそう言ってしまう。

その度に先生は

「大丈夫ですよ。気にしないで下さい」

と言って、重そうに見えるレジ袋を軽々と持って歩いている。

自分の鞆以外何も持っていない状態の私は

久しぶりの女の子扱いにドキドキしながら自分の部屋へと向かって

アラタ先生と並んで歩いて行った。

私たちの歩き方は対照的で

先ほどの「付き合おう」発言から

どうしてもアラタ先生を意識してしまって うつむきがちに歩いている私

女性の部屋にあがるのにテンションが上がっているのか

微妙に上機嫌なアラタ先生は足取りも軽そうな歩み

同じ状況なのに対照的な反応を示した二人であった。

明かりのともった私の部屋にたどり着いて

鍵を開けて中に入ると

先に部屋で待っていたミオは。

「いらつしゃい」

と、まるで自分の部屋かのような態度で

アラタ先生から買ひ物袋を受け取って、

代わりに良く冷えたビールとグラスをアラタ先生に渡して

手テレビのある部屋にアラタ先生を連れていき適当に座って待つように促した。

「アテを作るんで、しばらくテレビを見て待つていて下さい」

アラタ先生は座らずに部屋の大半を占める本棚に歩み寄って棚を眺めた。

大半はSF小説が占めているが歴史小説やミステリーも幅をきかせているようなラインナップである。

そのなかで、気になっていた本があったのか

「ナジオさん、本読ませて貰っていいですか？」と、声をかけてきた

「どうぞ」となぜかミオが返事を返している。

持ち主は私なんですけど・・・まあ、別に構わないからいいけど。

何を手に取っているのかはこちらからは判らなかつたが

アラタ先生は一度読んだ事があるのか、パラパラと流し読みをしているようである。

しばらくして私が料理を手に部屋に入ると

難しい顔をして本を読んでいる。

「先生何を読んでいるんですか？」  
器を並べながらそう聞くと

「これ」

と、アラタ先生は呼んでいた本の表紙をみせてくれた

「一度読んだ事があつたんだけど、結末がどんなだったか思い出せなくて流し読みしてた」

アラタ先生が手にしていたのは、ヘリコプターが出てくる謀略物であつた。

「じゃあ、言つてもいいですか？」

話の内容を先に言われる事を嫌うと思われたのか、そう前置きをされたので

「どうぞ」

と、短く答えが帰ってくる

「結果から言うと、無事に済むんですけど・・・」

私、犯人に同情しちゃって。

あまりにも可哀想で実行させてあげたら良かったのに！！って、思っちゃいましたよ。

机の上の計算で安全性を訴えても、

実際にやってみた訳じゃないから信用して貰えないのなら、

実際にやって証明しようとした

犯人の確固たる自信が伝わってきて。

犯罪を犯してでも実証しようとした犯人になんだか思い入れしてしまつて・・・。」

苦笑いしながら私がそう言うと

「なになに？何の話？」

と、残りの料理を手にミオが部屋に入ってきた。

料理を机に置くとミオはアラタ先生の手に行っている本の表紙を見る

「ああ、落としちゃったらすッキリするのに阻止しちゃった話ね」

「あんたの言い方なんか嫌ね」

「何が？あんた、もしかして阻止出来て良かった〜って思っちゃったタイプ？」

「いや、私も落としちゃったら良かったのに・・・て思ったタイプ！」

「なら、一緒じゃない。つべこべ言わないの！ね？先生」

アラタ先生は曖昧に返事をしながらワタワタと本を本棚に戻した。

あ、たぶんこれは阻止した側の想いが強かったタイプだな・・・

と思いつつあえて触れないでおく事にする。

「本、ありがとうございました。」

結末も感想付きではつきりさせて貰いました」

あ、やっぱり阻止した方に賛同したんだ〜。

確信を持ったが、やっぱり触れないで終わる事にする。

「ビールのお変わりいりますか？」

「はい」

アラタ先生の返事を聞いてから冷蔵庫からビール出してアラタ先生に渡した。

短時間で作った煮物や炒め物が机の上を所狭しと並べられお酒と共に料理を勧める。

壁一面の本棚を見ながらアラタ先生が

「沢山の本をよんでらっしゃるんですね。」

「ナジオは活字中毒じゃなくて、物語中毒なんですよ。」

物語が切れると禁断症状が出てくるんです。」

真面目な顔をしてアテをつまみながらアラタ先生に語るとアラタ先生も真剣な表情で

「だから、ロマンチストなんですね・・・で、禁断症状ってどんな症状が出るんですか？」

「冗談を本気で聞かないでください！禁断症状なんて出ませんから！」

「自分で現実的な空想に走るっていう禁断症状がでるんです。」

「空想ですか・・・」

「妄想に近い空想です。」

「空想と妄想だとだいぶ意味合いが変わってくると思うんですけど・・・」

「現実的にありえない空想と、根拠のない誤った判断に基づいた主観的な信念の妄想

現実に入りえそうなんだけどありえなくて、ちょっと勘違いが入ってるから

現実的な妄想に近い空想です。」

「本人を目の前に置いて、人の感性にケチをつけないの!!」

「凄い表現ですね『現実的な妄想に近い空想』って」

「きっと、ナジオの頭の中は

『現代版の戦国時代で戦場を走り回っている武将』になっていると思いますよ。」

「東條さんの表現って本当に凄いですね。で、現代版の戦場って霞が関とかですか?」

「あの・・・」

「政治家ってのは難しいですね。

そうじゃなくて、ナジオってこう見えて性格はとっても男らしいんです。

しかも、漢字の漢で『漢』<sup>おとこ</sup>感じで。」

「見えないですね。

僕にはナジオさんって『大和撫子』って感じで、とっても女性

らしく見えます。

身近で見ている東條さんがそうおっしゃるならそうなんですよ  
うね。

男らしい一面も触れてみたいものですね。」

「触れてみたいなんて、先生って大胆ですね」

彼女さんに聞かれたら誤解を招きそうな発言ですよね。」

「あれ？聞いてません？

ナジオさんの目の前で付き合ってた彼女に振られたんですよ？」

「なに?!なに!!聞いてませんよ!!そんな面白そうな話し!

ナジオの目の前でって、どういうことですか?

原因は?もしかしてナジオも関係してるんですか?!」

どうも、この二人は息ぴったりに話の中心の私を置き去りにして  
会話を盛り上げる事を楽しんでいるようである。

先生を部屋に呼んだ本題にそろそろ入りたいと思っていたのだが、  
当分この二人は私を置き去りにして話に花を咲かせそうな雰囲気  
が漂っている

しかも、  
話に花を咲かせつつ　しっかり食事もとっているのでびっくりであ  
る。

私は二人の気が済むまで黙って食事をする事に集中する事に決めた。

ひとしきり語り尽くすと、そのままミオのペースで話が変わって

「で、さつき料理を作りながらナジオに聞いたんですけど  
院長先生から語学の勉強を自主的にして欲しいと語学書を渡さ  
れたそうですね。」

ナジオが韓国語と中国語 先生が英語だそうですね。  
「ってか、人に『して欲しいな』って思うなら自分がしろよな  
！」

完全に蚊帳の外に居た私は  
急に話がこちらの話したい方向に入ったな〜と思いながら  
黙々と料理を食べ続けた。

「これからは国際的に適應できるようになった方が良いつて言うの  
は判ってるんですけど」

いきなり自分に振られるとは思ってなかったので、戸惑っては  
いるのですが

長い目で見て、語学の勉強をして自分にそんな事はないと思っ  
てます。」

アラタ先生はミオの発言に真面目に答える

「でも、先生英語は中高大って勉強されてたから  
そんなに難しい事はないんじゃないですか？」

「僕は英語苦手だったんですよ。  
大学に合格してから疎かにしていたらすっかり忘れてしまいま  
した。」

ああ！これ美味しい！」

「ナジオお勧めの炒め物ですよ。」

先生は料理も趣味もナジオと合いますね。」

「いきなり何言ってるの?! あんた!」

急に話が自分の方に向いてしまったのでつい、いつもの調子で思わず突っ込んでしまった、

アラタ先生の耳には届いていなかったらしく

「さっき、付き合っただけで下さといって言ったんですけど、

保留にされたんですよ。このお料理も美味しいです。」

と、私の突っ込みはサラッと流されたあげく

私がミオにしたいと思っていたはなしまでついでようにサラッと話してるし!

「なんて、もつたない事を!

この子先生のお誘いを保留にしちゃったんですか?!

私が許可しますから付き合っちゃいなさいな

それと、その料理は私が作ったので美味しいのは当たり前です。」

思わずお酒を嘔き出しそうになった私をほったらかして

ミオだけはサラッ人の恋愛事情に許可とやらを出しつつ自画自賛しながらパクパク料理を口に運んでいる。

先生もサラッと「そうなんですか〜あ〜」とか言いながらパクパク食べてるし!

なんだよ!この会話!!

「先生はいつもご飯はどうされてるんですか?」

「朝は、喫茶店でモーニングでお昼も病院の近くのお店で適当に夕

ご飯は

コンビ二弁当や友達と外に食べに行ったりです。

最近、晩御飯はインパルスで食べる事が多くなりました。」  
と、ミオのペースであっさり会話の流れが変わってるし……。

しかも、先生もしっかり話の流れをよんで話についてきてい  
る。

会話についていけないのは私だけ？

完全にほったらかし状態……

「あそこは、お酒よりも食べ物の種類が豊富ですからね

前の彼女さんはご飯とか作ってくれなかったんですか？」

「前の彼女は、今まで包丁を握った事がなかったそうで、いつも外  
食ばかりでした」

「お弁当を作って来て公園でお昼とかなかったんですか？」

「老舗のお惣菜屋さんの高級お弁当を買って外で食べた事が1度あ  
るぐらいです」

「それってどうなんでしょうね……」

包丁を握った事がないって、学校の家庭科実習とかどうしていたの  
だろう……

と、素朴な疑問が浮かんだが

回答のない疑問をいつまでも考えていてもしょうがないのでさっさと  
忘れる

「ナジオだったら、公園とかの広場でバトミントンとかした後には手造り弁当を食べたり」

美術館や博物館・図書館とかで さわやかデートとかになると思っていますよ」

「いいですね、さわやかデート」

スカイパークとかで飛行機の離着陸を見ながらお弁当とか食べられたら最高です!!」

「で？ ナジオの返事は？」

今までほったらかしにしていたくせに

急に二人私に注目したのでドキドキして思わず俯いてしまった。

先生の事は嫌いじゃない、どちらかと言うと好き

アラタ先生になら片意地張らずに素直になれるような気がするし一緒にいると暖かい気持ちになれる。

これはやはり恋？

ならば、返事はもちろんYES

俯きながらもじもじと小さな声で

「行きます。お弁当作って先生とさわやかデート」

と答えた私に

満面の笑みを浮かべて喜んでいるアラタ先生と

「私がいなきゃ何も出来ない」って顔したミオの顔を見て

思わず笑い出した私につられて二人とも笑いだした。

「じゃあ、見事カップルが誕生した事ですし」

お邪魔虫は退散する事にしますわ〜あ〜」

と、本棚からロードマップを取り出し机にポンと置いてさっさとミ

才は玄関近くに置いた  
自分の鞆を持って本当に帰って行ってしまった。

「・・・東條さんは嵐のような人ですね」  
アラタ先生が苦笑いしながらロードマップを手にとって

「今度、デートスポットなんか掲載されているガイドマップを買い  
に行きましょうか」

「そうですね、でも最初のデートはあそこに行きませんか？」

「ああ、あそこですね」

そんな会話をしながら  
私たちは何事もなかったかのようにひたすらご飯を食べ続け  
た。

## ミーティング・2 (後書き)

ストックが無くなってしまったので

しばらく更新をお休みします。

出来上がり次第 UPするようにします。

衛生士業務の一つとして歯石しせきと呼ばれる歯の周りに石のように凝り固まった物の除去を行うスケーリングと呼ばれる業務がある。

歯石には2種類あり

一つは縁上歯石えんじょうしせきと呼ばれ口をあけてそのまま見える位置にある物

もう一つは縁下歯石えんかしせきと呼ばれる歯肉しにく(一般には歯茎はぐき呼ばれている部分)と歯の隙間に入り込んだ歯石の事である。

縁上歯石に関しては目視で除去の有無が確認でき

しかも、器具を使って手で取り去るハンドスケーラーと呼ばれる手動の除去方法と

エアースケーラーと呼ばれる超音波と水を利用した機械で除去する方法の2種類があるのだが、時短の為に主にエアースケーラーを利用して除去する場合が多い。

縁下歯石の除去では目視は難しく(なんせ歯茎の下に潜り込んで歯の根っこの方に付着している時がある為)

レントゲン写真と事前にプローブと呼ばれる器具を使って歯石の付着している部位を確認しながらスケーラーと呼ばれる器具を使って除去していくのである。

(歯石はレントゲン写真ではX線を通さないので黒く映るので見て判る場合が多い)

スケーラーという器具は本当に小さな刃物で

歯と歯肉のほんの少し隙間に刃の部分を滑り込ませて歯石を除去していくのだが、

下手をすると歯肉を傷つけて出血させてしまうので

最新の注意をしながら的確に手早く除去作業をしていかなばならない。

(実際問題、出血させずに歯石を除去する事は大変に難しく 対外出血させてしまう)

歯の形もだいたい同じなのだが、すべてが同じ訳ではなく 個人差がある事が多々ある。

それを頭の中でイメージしながら刃の向きや角度を考えて行くのはなかなか難しく

上手く除去出来ないと 引っかかりが無くなってしまい 綺麗に除去しきれなくなってしまう事があるのである。

しかも、がりがりと力を入れてひっかき過ぎると 歯に傷をつけてしまう

微妙な力加減と指先の感覚が非常に重要となってくるのである。

この縁下歯石を除去する業務をナジオは苦手としていた・・・。

しかし、衛生士と云えば歯磨き指導と歯石除去と言われるほどの大切な業務である。

苦手とかそういう問題ではないのである。

上手に除去できるように 付着している部位を的確に把握して 頭の中に付着部位を叩き込んで除去している。

もし取り残してしまつと それが原因で炎症を起こしたりするのできちんと除去しなければならぬ

それに、スケーラーにもいろいろ種類や角度があり

その中からの確な刃の向きの物を選んで使用して歯石を除去していくのである。

そして、その苦手を克服するために

イメージトレーニングや歯石に見立てた物を使って除去をする練習を顎模型などを使って行ったりもしていた。

それなのに・・・

たまたま、ナジオが手を離せない時にナジオが担当する歯石除去の患者さんが来院されて

ナジオの代わりにハルミさんが歯石除去をしたのである・・・  
そして、とりこぼしがあるのが見つかってしまった・・・  
手が空いたナジオはハルミさんに強制連行されて診療所の一番奥に  
ある準備室に連れ込まれて  
久しぶりの雷を落とされた。

「あんだ！いったい何年衛生士業務してるの？！

あんなレベルのスクーリングも出来ないの？」

と、懇々と説教され ぐうの音も出ないほど凹まされてしまったの  
である。

ようやく開放されたナジオは落ち込んだ気分を必死に隠して  
患者さんの対応に努めたが

仕事が終わってしまおうと どうしても沈んでしまった気分を上げる  
事が出来なくなってしまうた・・・。

自分の力不足のせいで患者さんに迷惑を与えてしまっていると思っ  
たら

部屋に帰って来ても居てもたってもいられず

学生時代に購入させられたスクーラーと顎模型がくもけいを出してきて

何度も何度もイメージトレーニングを繰り返した。

すべての患者さんの歯の形や歯肉の形が模型の様な綺麗な形でやり  
易い訳ではないのだが

いかに上手く患者さんの歯の形や角度をイメージして施術出来るか  
が問題である。

スクーラーと顎模型とにらめっこしながらしばらく時間を過ごして  
いると

机に放り出していた携帯が鳴った。

アラタ先生からだった。

「もしもし」

アラタ先生の名前をみて またハルミさんに叱責された事が頭によ

みがえり

思わず暗い声で電話に出てしまう。

「あ、ナジオさん？ 今から外出れますか？」

アラタ先生はどうやら外出先から電話をしているらしく車の音や風の音が聞こえてくる。

「今からですか？ 別に構いませんけど・・・」

そう返事をする

「じゃあ、俺 今 ナジオさんのアパートの前に居ますから外に出られる格好をして出てきて下さい。」

「・・・判りました」

正直このまま出かけるのではなく部屋で一人じっとしていたかったのだが

せつかく部屋の前までアラタ先生が来てくれていたなら、と急いで着替えて建物の下へと降りて行った。

少し肌寒い風が肌を撫でて通り過ぎる中

アラタ先生がポツン、と建物のそばに立っていた。

「お待たせしました。 先生どうしたんですか？」

私が声をかけると

アラタ先生は私の顔を覗き込むように見て

「ナジオさん大丈夫ですか？」

と聞いてきた

何を・・・とは云わない。 同じ職場なんだから、私が凹んでる理由もしつかり把握済みでの

お呼び出しなのだから正直に答える事にする。

「・・・正直、大丈夫ではないです。 ちょっと凹んでいます。」

正直にそう言っ、無理やり笑うと

アラタ先生は心配から優しくほほ笑んで

「では、気分転換にドライブ行きましよう！」

そう言っ、私の手を取っ、近く止めてあつた車へと連れて行っ

た。

「え？ ドライブですか？ 今から？」

私は戸惑いながらもアラタ先生について歩いて行く。

「はい、今からです。どうぞ乗って下さい」

アラタ先生は車の扉を開けて私を助手席に座らせて扉を閉めると運転席へと乗り込んだ。

「あの・・・いいんですか？」

私は今から出かけると、アラタ先生の帰宅時間が遅くなり

明日の仕事へのさし使いが出ないかと気になって思わずそう言つと

「いいんですよ。大好きな彼女のためですからね。」

シートベルト締めてください。絞めたら動きますから」

私は「大好きな彼女」と言われて思わず照れて顔を赤らめてしまった。

今が夜で良かった。

こんな顔 恥ずかしくてアラタ先生に見られたくないと思った。

私は言われたとおりにシートベルトを締めると

アラタ先生は車のエンジンをかけて静かに車を発進させた。

私はステアリングを握って運転しているアラタ先生の横で  
なんだか落ち着かない気分で座っていた。

いつも職場やインパルスで会うアラタ先生とはなんだか違う雰囲気  
がするからかもしれない。

慣れない雰囲気のままさから、車内に静かに流れている音楽に耳  
を傾けながら外の景色に目をやる。

私はあまり夜にバイクで出かけたりはしない。

翌日の仕事の事を考えて早めに帰宅する事も理由の一つだが

一番の大きな理由は視界が悪くなり、危機回避に対する反応が遅く  
なりそう怖い・・・

それに、自分の身体能力がそんなに高くない事を自覚しているので、  
必要以上に無茶な事はしないようにしている。

運転免許は持っているが、車を運転するよりもバイクを運転する方  
が好きなので、

車ではなく単車を買って愛用している。

- ・・・維持費を無駄だと感じてしまうのも原因かもしれないけど・・・

バイクを運転する時には当たり前だが脇見が出来ない

それに、ヘルメットを被った状態で常に聞こえるのは

エンジン音・マフラー音・自分の呼吸音である。

助手席の窓の外を流れる景色と心地よい音楽が新鮮で

さっきまで落ち込んでいた気分が少しだけ上向きに変わった。

ちよっと現金かもしれない・・・。

「先生、よくドライブとか行かれるんですか？」

私はおもむろにそう聞くと 視線を前に向いたまま「たまに気分転換で行きますよ。」と、軽く返事が返ってきた。

ストレス発散か？

「そうですね。私は夜にあまり運転しないので、結構新鮮です。」  
「運転していたら、景色なんて見られないですからねえ。」 今日  
は堪能して下さい。」  
アラタ先生はそう言って笑い、私もつられて笑う。

それなら、遠慮なく堪能させて貰いまあゝす

しばらく会話も少なく外の景色見ながらゆっくりとシートのもたれ  
かかっていると

信号待ちで止まった時におずおずと云った感じで私の方を見ながら  
「あのおゝ」

と、何か言いづらそうに口ごもるアラタ先生。

私は赤く光る信号をボンヤリと見ながら

「なんですか？」と、答えると

「あのお、仕事以外の時に『先生』って呼ぶのを辞めてもらえませ  
んか？

仕事中みたいでちよつと・・・」

「あ、そうなんですか？ では・・・あ・・・赤松さん・・・」

「なんで？！いまさら苗字?!?!」

「え？ なんとなく？」

「今まで下の名前に『先生』で呼んでいて、敬称を取って呼んでく  
ださいってお願いしたら、なんで急に苗字になるんですか?!?!」

「だから、なんとなく・・・あ、青に変わりましたよ。」

信号が変わった事を知らせると先生は慌てて車を発進させる。

「ナジオさゝん」

運転しながら泣きそうな表情で訴えるアラタ先生に

「はいはい、判りましたよ。アラタさん」

私はクスクス笑いながらそう言っていると、先生は嬉しそうにほほ笑んだ。

二人で冗談を言い合いながら過ごしていると

車内のカーラジオから

不器用な言葉で愛を叫ぶ事で有名なグループな曲が流れ始めた。

「あ！！私、この曲好きです。」

「俺も、このグループの曲好きです。学生時代に良く聞きました。落ち込んでいる時に聞くと『頑張れ！』って応援されている気がするんですよ。」

ナジオさんは？」

「私もなんですよ。」

御世辞にも綺麗とは云えない言葉ばかりの歌詞なのに、想いが伝わるって言うか。」

「そうですね。あの曲を聴くと

想いを伝えるには難しい言葉なんていらなんて思えるんです。」

「本当に。」

そんな話をしながらしばらく車を走らせたアラタ先生はようやく目的の場所についたのか、車を駐車場に入れた。

「あの・・・ここってもしかして・・・」

「公園ですよ。」  
そう。

アラタさんが車を停めた場所は

埋立地に作られたスポーツ施設などを集めたところにある公園で住宅街にあるのと違って

広い土地を活かしたアスレチックジムや芝生などがあって

休日の昼間であれば、家族連れがお弁当などを持って遊びに来そうな所なのだが、

今は夜なので人が殆どない・・・。

「公園ってね、子供の為だけにあるんじゃないんですよ？」

「はい？」

アラタさんが言いたい言葉の意味がいまいち理解出来ないでいる私に夜は大人も遊んでいいんですよなんて言いながら、アラタさんはゆっくりと私の前を歩いて行く。

結果、

子供のように遊びました（笑）

もう、誰もいない公園でかなりテンションが上がりました・・・等間隔に高低差をつけて並べられた切り株で押しあたり（危ないって！）

雲梯うんていの上を手放して歩いたり（だから、危ないって！！）

ロープを蜘蛛の巣のように張った場所で追いかけてこしたり（無茶するな！！）

絶対子供がいる前では出来ないような危険な遊びをして遊びました・

ある意味、大人の遊びだわ・・・

遊具と遊具の間に設置されたベンチで一息ついているといつ買ったのかアラタさんに缶コーヒーを渡された。

私は遠慮なく受け取って、ありがとうとお礼を言ってから一気に半分ぐらい飲んで喉の渇きを潤した。

「ほんと、公園って大人が遊んでも良い場所だったんですね」

私がそう言うとアラタさんは嬉しそうに笑う

「気分転換にいいでしょ？」

「はい・・・もしかしてアラタさんも気分転換に夜の公園で遊んだりするんですか？」

「ないですよ！ってか、ヤローが夜に公園ではしゃぎ回ってたら、いろんな意味で危ないでしょ?!」

確かに、そんな現場を目撃したら

私なら間違えなく回れ右してその場から即離れる……。

「……そうですね。」

確かに、男の人が夜の公園ではしゃいでたら、ちょっと怖いです」

そう言つて、苦笑いすると アラタさんは ね？ と云つて笑つた。

「ナジオさんならこういう場所の方が喜んでくれると思つて。」

アラタさんは頭をポリポリ掻きながら照れたようにそう言つた。

たしかに、夜景を見に行つたりするよりもこう言つた場所の方が気分転換になる。

アラタさんは、私の事をよく判つてるな。

逆の立場だったら、私はアラタさんをどこに連れて行くだろ

う……。

そう思つて、しばらく遠い目をして考えていると

「ナジオさん？」

アラタさんが私の方をうかがうように見ている。

「……あ、すみません。大丈夫ですよ。ちよつと考え事してました。」

私は慌ててそう言つと

「それならいいんですけど……。」

まだ心配そうな顔をしている

「いやあ、先生は私が喜びそうな所を良く御存じだと思つて。」

私がそう言つと

「当たり前じゃないですか、いつもナジオさんのこと考えてますから。」

アラタさんは笑顔でしれーっとそんな事を言う。

言われた私は意味深なそんな言葉に返事も出来ずに俯いた

恥ずかし〜い！！　いきなりそんな事言つなよ〜〜〜お〜

声にならない心の叫びをあげながらも

動揺を顔に出さないように必死に落ち着こうと試みるが

逆に先ほどのアラタさんの言葉が耳にこびりついた様に

何度も何度も頭の中を駆け巡った

自分の耳のあたりがカァー！！と熱くなっているのを実感した。

ヤバ〜い！！　今が夜で良かった〜！！

こんな顔誰にも見られたくない！！

私は動揺を隠そうと必死になったが、

横でアラタさんが　クツツと笑いを堪えているらしく肩を震わせている。

「ナジオさん可愛い」ボソツと言われたそんな一言がまた私の羞恥心に火をつける。

だからあ〜！！　そんな事言わないでえ！！！！

ってか、顔が赤いのがモロバレじゃねえか！！

舞い上がりすぎて、言葉づかいは完全に地が出てる状態ですて・・・

しかも心臓は『これ以上はムリ〜い！！』　ってぐらいバクバクしてる！！

そりゃもう、短距離走を全力疾走してる勢いで！

そんな私を見てアラタさんは嬉しそうにニコニコ笑っている。

私は走って逃げだしたい想いをぐっところえてベンチの上でより一層小さくなった。

「ナジオさん、ちょっと歩きませんか？夜風が気持ちいいですよ。」

アラタさんがそう言って、立つように促して歩き出す。  
私は言われるまま立ち上がり、前を歩くアラタさんの踵を見ながら歩いた。

「ナジオさん、見てください。綺麗ですよ。」

私はそう言われて 顔を上げると

そこは、先ほどまでいた場所よりも少し開けた場所に出たらしく街灯の間隔が少し広く設置されているようで、少し薄暗い場所だった。アラタさんの方を見ると空を見上げていたのでつられて見上げる。そこには、私の住んでいる所よりも少し数が多い星空があった。

「この辺りは暗くても、遠くの方が明るいから余り見えないんですかね・・・」

「そうですね・・・」

そう言いながらも、いつもより綺麗に見える星空に私は先ほどまでの恥ずかしさがどこかに行ってしまったように星空を見上げてた。

「プラネタリウム行きましょうね。」

「はい」

そうして、しばらくふたりで夜空を見上げて過ごした

経過観察・3（後書き）

この二人の事なので、  
何事もなく

真っ直ぐ家に帰ったんでしょね・・・たぶん。

## ある日の休憩時間　〜コウイチ目線〜

いつもお昼休憩になると　私服に着替えて外に食べに行く。  
以前は一人でふらつと足の向いた方向のお店で適当に食べて返って  
来ていたのだが、

最近は赤松と二人で食べる事が多くなった。

やっぱり、一人で食べるより誰かと食べる方が楽しいと実感し始め  
た今日この頃。

そんな今日は、なんとなく食べたいと思う物が赤松と合わなかった  
ので

途中で別れて別に昼食を食べる事になったのだが、  
たまには一人になるのも悪くないかもしれない。

おっと？いきなりの前言撤回？

でも、俺は一人で自由に過ごすのがけっこう好きらしい。  
今頃気づいた。

そんなどうでもいい事をつらつら考えながら

診療所に戻つてくると　人の話し声が聞こえた。

休憩室に目をやると赤松とナジオさんが二人で話しているらしい

俺は取り敢えず、白衣に着替える為に更衣室に入って着替えを済ま  
せる。

本当はあまりつけたくはないのだが、目を保護するために作ったゴ  
ーグル型の眼鏡をかけ直して“コウイチ先生”の出来上がりである。  
このまま診療所に入るまでの時間をさてどうやって過ごそうかと考  
えて

更衣室にあるソファアに座ったが

赤松とナジオさんの二人がどんな会話をしているのか気になって休  
憩室に向かう事にした。

「・・・結構敏感に反応してしまっ

「そうなんですか・・・ナジオさんってなにげに凄いですよね？」  
「なにげってなんですか?! なにげって!」

敏感? 反応?

なんだか、俺が好きそうなワードが聞こえてきたので  
思わず足を止めて二人の様子を窺うことにした。

ふたりは、4人掛けのテーブルに向かい合うように座って話をして  
いる。

話の内容は真面目な性格の二人の事だから、

職場で俺好みの話をしているはずはないと推察される。

ナジオさんにはいつも「この脳内どピンク!」と言われる事が多い  
俺。

確かにどピンクな時もあるが、常にはではない。

ナジオさんの反応が面白いから毎日からかって遊んでいるだけなの  
だが、どうやらナジオさんはお気に召さないらしい。

いつも「セクハラだ!」と言って怒っているが俺にはそんなに嫌が  
っている風には見えないのは気のせいなのだろうか。

まあ、そんなセクハラ発言もナジオさんだから問題ないだろう。  
俺の頭の中でそう結論づけていると二人が再び話し出した。

「そういう意味では得意かもしれません。プローブの要領で見えな  
くても

指先の感覚だけで特定できるから、スケーリングの要領でそつと除  
去って感じ?」

「あ、それ判る気がしますが やった事がないので俺にはちょっと  
判りづらいです。」

「そうですね。私はミオにやらされてますから、やる機会があり  
ますけど

先生なんてやる人居ないでしょ?」

「いないですね〜。あ、今度ナジオさんでためさせて下さいよ！」  
「いいですけど・・・」

赤松がそう言うとナジオさんはごにごにと俯いてしまった。

なんだ？ 仕事の話をしていると思ったがなんか艶っぽい話だったのか？

仕事の話をしているなら更衣室に戻ろうかと思っていたが艶っぽい話ならば是非俺も参加したい！

ナジオさんの反応最高に面白いし！

そう思っ止まっていた足を進めて休憩室内に入った。

「あ、コウイチ先生お帰りなさい」

そう言っナジオさんと赤松が俺を迎え入れてくれた。

「ふたりで何に楽しそうな話してるの？」

俺はそう言いながら赤松の隣の席に座ると

「空気中を伝わる音の振動と 耳かきの話です」

赤松が簡単に説明してくれたが、簡単すぎて意味不明・・・思わず

「はあ？」と云った表情になる。

「アラタ先生、その説明 全然説明になってませんよ。」

そう言っ苦笑いするナジオさん

やっぱり、こいつらの話す事は真面目だな・・・ん？耳かき？

「振動と耳かきがどうつながるの？」

俺は素直にそう聞く

「空気中に伝わる音の振動の方ですけど

携帯を鞆に入れている状態で道を歩いている時に、たとえば電車が傍を通過すると

空気中に伝わる振動で鞆が微妙に振動して、鞆の中で携帯が鳴ってバイブしているような感覚だっ話してたんです。だから、携帯が鳴っていないのに

電話がかかってきたと思つて携帯を取り出して『あれ？携帯鳴っていないや・・・』つて思ふ事がある。つて話をしてたんです。」「ナジオさん敏感に反応し過ぎですよね？」

確かに、敏感すぎる・・・つて、そんな振動によく気がつくな！

それよりも、

その誤振動（？）が空気中に伝わる音の振動だつてよく気がついたな！

「・・・そうだな・・・で、耳かきは？」

予想通りの真面目な話にちよつとがっかりしつつも次へ促す

「耳かきは、プローブを使う要領で耳垢の場所を特定してスケーリングのように除去すると痛がられないつて話をしてたんです。」

予想を裏切らない真面目な話をしてたんだ・・・  
やっぱり、こいつらはこいつらだ・・・。

昼間つから何を期待していたのが自分自身でもさっぱり判らないが、取り敢えず、ナジオさんをからかつて遊ぶ事にする。

「じゃあさ！！ミオさんのついででいいから今度僕の耳かきもして欲しいな！」

そう言つと、ナジオさんは怪訝な表情をして

「どうやったたら、ミオの『ついで』な状況が訪れるんですか？」  
と、言ってくる。

これは期待を裏切らない反応をしてくれる前兆！

「状況なんて作ればいいんだよ。で、いつ作る？」

「そんな状況一生訪れないと思えますけど？」

「なんで？さつき、赤松もナジオさんの実験させてくれつて言つて

たじゃない。」

「~~~~!!! そ・・・それは!!!

お断りする前にコウイチ先生がこっちにいらっしやっただから  
返事をしてなかったただけです!! ってなわけで、アラタ先生お断りし  
ます。」

「え? 『いいですよ』 っていつてませんでしたっけ?」

「!!! いつ! 言ってますん!!!」

ナジオさんはワタワタと落ち着かない様子で言葉を重ねている。

うん、良い反応! ナジオさんのこの反応が楽しい。

落ち着いた雰囲気でも冷静に仕事をこなしているナジオさんがとる  
こっという反応が楽しくていつもちよっかいを出していると言っても  
過言ではない。

「残念。お断りされてしまいました。」

と、赤松は全然残念そうにない様子で言う。

・・・もしかして、

こいつもナジオさんのこの反応を楽しむために言ってるのか?

それなら赤松と同士になるのだが・・・

正直、この同士は要らない気がする・・・。

独りで堪能したい。

「耳かきって事は膝枕だよな? いいな、ナジオさんの膝枕で耳か  
きして貰ってるミオさん」

俺がそう言つと、目に見えて引いた様子をしながらナジオさんは

「何が良いのか理解できないんですけど・・・」  
と、言っている。

「目の保養?」

おどけてそう言つと、ナジオさんは本気で引いている。

あれ？やりすぎた？ 話題変えとこっ。

「それにしてもさあ、ナジオさんってさ、

俺と話をする時、喜怒哀楽の『努』の割合がマジで多いよね。」

「コウイチ先生が私を怒らせる事ばかり言うからです！」

「えへえ、そんなつもり無いんだけどな。」

「いい加減、自覚して下さい。そのうちセクハラで訴えますよ?！」

「それは勘弁だな。」

「それなら自肅要請願います！」

「出来るかな。」

「是非して下さい。」

うん、良い反応。

打てば響くこのナジオさんの反応がホント堪らない

そうやって、俺はいつもナジオさん相手に遊んで仕事の疲れを癒しているのである。

今度はどんなネタで楽しもうかな!!

## 小話 距離

ローテーションが全く同じなので、週休二日の休日は同じ曜日の平日になる。

なので、二人は日曜日よりも比較的好いている平日に一緒に出掛けることが多かった。

そんな二人が訪れた場所が図書館・・・

「ナジオさん、どんな資料を探してるんですか？」

「郷土資料です」

「好きですね、歴史」

歴史的建造物を見るのが好きで、その建造物などを調べるうちに郷土研究の資料などに目を通すようになったのが切っ掛けだったりする・・・。

今回なぜ、図書館に訪れたのかというと

本当はふたりでプラネタリウムに行く予定だったのだが

事前に調べたところ、今日に限って休館日・・・

なので、ほかに行きたいところはあるか？

と、アラタさんに聞かれたので、以前から気になってた図書館が遠方にあると、ポロッと言った所

ドライブがてらにお弁当を持って朝から車で向かうことになったのである。

図書館の後は近くにある緑地公園でお弁当を食べてまったりとすこく予定である。

ミオの行っていた爽やかデートそのままだ・・・

そして今、二人で入口付近のロビーにいる。

私は自分の調べたい資料は決まっているので、そんなに時間はかか

らないと伝えると

アラタ先生はそれでは自分ものんびりと読みたい本を探して待つて  
いますと言ってくれたので、一時間後にロビーで待ちあわせして別  
れた。

私が探していた資料は「市史」と云った

その市限定の資料で資料が遡れる初めの方（石器時代とか）から始  
まって現代へと繋がっているの

平均10巻前後ある分厚い資料なのである。

重さにしたら、1巻あたり1キロ前後ぐらいはありそうな気がする。

・・・（マジで）

資料によってはとても貴重で持ち出し禁止になっている物が多く  
鍵のかかっている棚に収められている物もあつたりする。

私はそこまで貴重な資料を望んでいるわけではないので

一般に貸し出し可能な資料の前に立ってお目当ての資料を探した。

近代建築から始まった興味が

歴史的建造物へ進み歴史へと興味が移り変わっていった今

私のブームは「荘園」である。

荘園とは

奈良時代から戦国時代にかけて存在した中央貴族や寺社による私的  
大土地所有の形態または所有地の事である。

学生時代は歴史なんて全然興味もなくて、

ただただ

先生が黒板に書いた文字をマシンのごとく書き写すだけの毎日だ  
った気がする。

（そして、友達の間を飛び交っていく私のノート）

このブームもいつまで続くか判らないけれども、納得いくまで調べ  
て満足したい！！

それだけの事なのだが、この情熱が学生時代にあつたならば  
私は今頃 歯科衛生士をしていなかった事だけは事実である。

目の前にある資料に手を伸ばし、目次で私の興味がある年代を探して目的のページをさがしたり言葉だけで検索をかけたりして調べていく。

その中からまた新たに興味のある事柄を探しては調べ、また探しては調べ・・・って、そんな作業を繰り返していく。

そうして、

興味のある事柄を示す資料は後でカウンターで印刷許可を貰ってコピーをさせて貰うか

量が少なければ、ひたすらマシンのごとく書き写す。

そんな作業をしていると、あつという間に1時間が過ぎてしまったのでロビーに戻った。

人影もまばらなロビーにあるソファに腰替えていたアラタさんは私に小さく手を振っている。

「お待たせしました。ずっとここに居らっしゃったんですか？」

待たせてしまった事の罪悪感を感じながらさういふと

私の頭にポンと手を置いてそんな事ないですよ。と言って立ち上がった。

「満足した？」

「はい、満足しました。連れてきてくださってありがとうございます。」

さういって笑うと、アラタさんは嬉しそうに目を細めた

そして、

二人でゆっくりとした足取りで玄関から表に出て駐車場に向かって歩いていく。

「目的の資料はあった？」

と、アラタさんがさう言った。

「はい、おかげさまで。さすが大規模の図書館の事があります！」

先生は、その間何を読んでいたんですか？」

私は微妙な距離を置いてアラタさんの少し後ろについて歩いていく  
「俺は、見逃した雑誌のバックナンバーを見つけたからそれを読ん

で過ごしてたよ。」

アラタ先生が気持ち後ろを歩く私に振り向き気味にそう言う。

「戦闘機ですか？」

「医療雑誌だよ。航空機ものなら逃さずに必ずGETしてるから  
そうですね」と言いながら

やっぱり、この人は・・・休日の時まで仕事の事を考えれる  
なんて

どんだけ真面目なんだか・・・。

と、心の中で思った。

すると、いきなりアラタ先生が私の腕をつかむ

「ん？」

私が不思議そうに取られた腕を見てアラタさんの顔を見ると

「微妙な距離が話にくいから、こうやって歩こう。その方が話しや  
すい。」

そういつて、アラタさんは自分の腕に私の腕を絡めさせて歩き出し  
た。

~~~~~!!

恋人見たい!! (恋人だよ!)

恥ずかしさから赤らめた顔を俯けながらも腕を離さず

少し浮足立った足をなんとか地につけてアラタさんのゆっくりの歩
調に合わせて歩いていく。

駐車場がもう少し遠かったらよかったな・・・。

目の前に見えてきたアラタさんの車を見ながらそう思ったことは
決して誰にも知られたくないと思った・・・。

定期健診・1

私は何気なく本日の自分が担当する患者さんの来院予定表を見て硬直した……。

奴らが来る……。

しかも、

狙い澄ましたかのように一番最後の時間に……。

今日は、遅番の日なのでお昼からの出勤して

午後から使用する消毒済みの器具などの片付けを独りでしている時だったのだ。

思いつきり嫌な表情をしたのを誰にも見られなくて済んでよかった。

憂鬱な気持ちを押し隠して業務をこなし、スタッフがちらほらと帰り始めた頃。

とうとう奴らが定期健診で来院する時間となった……。

「お願いします。」

そう言つて、二枚の診察券と保険証を受け付けに出して

待合室のソファに腰掛けたのは長身で細身の少年二人。

その姿を見たアルバイトの女の子達のテンションが一気に上がった。

二人は整った顔立ちをしており、学校ではさぞモテる事であろう。

私はため息をつきながら、二つ置かれたカルテを手にとって眺める。

田村諒成・仁成

その二人は兄弟で、私の甥っ子だった……。

私には14歳年の離れた姉が一人いる。

私が小学生の時に結婚して、すぐにリヨウが産まれ

その2年後にはジンが産まれた。

ジンが生まれてしばらくたってから、

実家の近くに家を建てて今でもそこで家族4人で暮らしている。

私は幼いころから、仕事をしていた姉に変わって二人の子守りを強制的にさせられていた。

そのせいで、私は姉と遊んだ記憶よりもリョウとジンの二人と遊んだ記憶の方が多い。

気持ち的には甥っ子というより、兄弟と云った方がしっくりくる関係なのである。

そうして、今日の予約!!

本来ならば、コウイチ先生が担当なので アラタ先生が担当するこの時間に来院する事は無いはずなのだが、リョウとジンが私の甥っ子だと知っているスタッフがこの時間に予約をいれたのだと・・・思う・・・。

もしくは、・・・

うちのねえちゃんがねじ込んだか・・・。

深くは考えたくないのだがおそらく後者である気がする・・・。そんな事を思いながら私は小さく気合いを入れて待合室へと続く扉を開けた

「リョウ・ジン。どっちからする?」

私がつつきら棒にそう聞くと無言で手を上げるリョウ。

そして、読んでいた本を投げるようにジンに渡して診療室に入ってきた。

また背が伸びたな・・・

私、すっかり抜かれちゃったよ・・・。

私は女性の中でも、わりと背が高い方なのだが、それをゆうに超している。

顔が良くて背が高いなんて、

モテる要素がいっぱいじゃん!!

・・・性格悪いけど。

そんな事を思いつつ、ユニットチェアへと案内して座らせてエプロンをかける。

「かわりは？」

「ない」

これ以上ないぐらい短いやり取りをしてから

私はドクターチェアに座って

倒すよ。と声をかけてユニットチェアを倒した。

「口開けて」

私はミラーを手にとってリヨウの口腔内をチェックしていく。

顔だけじゃなく、歯並びまで綺麗なりヨウ。

『男だつて、歯並びが綺麗な方がいいに決まってるじゃないか!!』と、幼い時に無理やりネエ（私が呼んでいる姉の愛称）に歯列矯正させられたおかげで

本当に綺麗な歯並びをしている。

それに、今まで虫歯になった事が一度もない。

高校生になった今でも、顔を合わせれば必ず私はリヨウの歯磨きをする。

小学生の時に、私に歯磨きをされるのが恥ずかしかったのか抵抗してなかなか歯磨きをさせてくれなかったのだが、最終的に母親怖さでしぶしぶ口を開いてくれていた。

今では何の抵抗も無く当たり前のように磨かせてくれる。

何だかんだ言っても、可愛い甥っ子の一人である。

一人で歯式（その人の治療痕や歯並びの特徴やその時の症状などをカルテに書きとる事）をとり。

ハンドスケーラーを取り出して、少しだけ付着した歯石をチョイチョイと除去してから椅子を起こして嗽をさせる。

「歯ブラシ持ってきた？」

私がそう聞くと、ごそごそとポケットからケースに入った歯ブラシ

を渡してくる。

私は歯ブラシを受け取ると、まずブラシの毛の部分を見た。歯ブラシの毛先が開いていないか、先端がへたっていないかをチェックする。

何度か使用しているがまだまだ使用可能な事を確認すると、またチェアを倒して少し磨き残しが合った場所に軽くブラシを当てて

歯垢しゅうを除去していく。

そして、またチェアを起こす。

「とくに、問題はないけど、最後にアラタ先生に見て貰うから、ここで嗽して待つててくれる？」

私はジンの方に行くから。」

私はそう言つてカルテに今おこなった内容を記入する。

「アラタ先生つて誰？ いつものゴーグルじゃないの？」

あなた・・・仮にも先生に向かつて

『ゴーグル』つて・・・

どんだけ失礼な奴なんだ！！

私が陰でコウイチ先生の事を

『ゴーグル』つて呼んでいるって

勘違いされたらどうしてくれるの！！

私は誰にも見られないように、顔をひきつらせた表情でリヨウを睨みつけ

「今の時間にコウイチ先生はいないの。この時間は赤松新先生しかいないから、最後にアラタ先生に見て貰うの。（お前、私の職場で不用意な発言をするな！！）」

私がそう言つと、リヨウはふうん、と言いながら

長い脚を組んで背もたれにもたれるようにしてゆったりと座りなおした。

すかさず、アルバイトの女の子が待ち時間の暇つぶし用に情報雑誌をリヨウに差し出した。

リヨウはニッコリとほほ笑んで女の子に　ありがとう　と言って、受け取った。

ヤバイ！！

あのタイミングで

雑誌を渡したと云う事は・・・

『ゴークル』発言聞かれてた！！

女の子はリヨウにつこりとほほ笑まれてたせいか、顔を真っ赤に赤らめて準備室へと足早に逃げて行った。

・・・うん。

耳に入ってなさそう・・・。

そんな女の子の後ろ姿を見てから、私の方に顔を向けたリヨウに

リヨウ・・・私の職場で色気を振りまくな！

そして、間違ってもナンパはするな！！

と、眼だけでリヨウに訴える。

付き合いは誰よりも長いので、

私の言いたい事を察したりリヨウは小さく肩をすくめて雑誌に目を通し始めた。

さっさと、仕事しろって事か・・・。

私はアラタ先生にリヨウの状態を伝えてからジンを診療所内に呼ん

だ。

リヨウが『俺様』な性格ならジンは『気遣いの人』なのである。

幼少の頃のジンは、リヨウが何かを仕出かす度に、リヨウかわりにひたすら謝っていた。

気が小さいのかと思いきや、予想外の所で大胆になるのである意味家族の中で一番要注意人物なのかもしれない。

あのネエの子供だから

当然と云えば当然かもしれないけど……。

私はリヨウと同じようにジンをユニットチェアに誘導して座らせ「ジン、かわりはない？」

と、リヨウの時とは打って変わって優しく問いかけると満面の笑みで「うん、大丈夫だよナジイ」と、返事を返してきた。

なんて可愛いの！ ジン！！

とくに、リヨウの後だから

余計に可愛く見えるわ！！

親バカならぬ叔母バカぶりを発揮しそうになって、グツとこらえる。私は声をかけてユニットチェアを倒してジンの口腔内くわうくわうないをミラーで確認していく。

ジンは歯列矯正の必要がないほど歯並びがわりと綺麗だった。

本当に、小さい頃から手のかからない子で、私はリヨウとジンのどちらかの面倒を見て欲しいと言われたら、迷うことなくジンを選んだ。

程良く甘えてくれるが、我儘な事は一切言わない良く出来た子なのである。

ごく稀に、腹黒さが垣間見れて冷や汗かかされる時もあるが。

ある程度の所で甘えさせてストレスを溜めないようにはさせている

と出てこない黒さなので、大丈夫だと勝手に安心している。

私が見ていない時の

腹黒ジンの苦情は受け付けませうん。

私には遠慮なく甘えてくれるので可愛くって仕方がない甥っ子である。

リヨウと同様 歯式を取って ハンドスケーラーで少しだけ付着した歯石を除去して

持参して来た歯ブラシを出させて歯ブラシを当てる。

ジンは私の教えを忠実に守ってくれているので、リヨウのように磨く前に歯磨きのチェックなどしなくても、ちゃんとした物を使っている事は知っているので確認せずにそのまま使う。

そういえば、

ジンは私が仕上げ磨きをする事を

嫌がった事は一度もなかったな。

リヨウが嫌がって暴れて無理やり仕上げ磨きをした後にニッコリ笑って私に自分の歯ブラシを渡して仕上げ磨きをさせてくれるのである。

二人の仕上げ磨きをする事が、私の楽しみなのだと思っていたのかも知れない。本当に優しい子だ。

ジンの定期検診も無事に終わってアラタ先生に報告に行くとリヨウは治療を終えて待合室に戻っていた。

ジンをアラタ先生に任せて 私は片付けの準備に取り掛かる。受付でカルテのデータをパソコンに入力していると

カウンター越しにリヨウが覗き込んでくる。

「へえ〜。ナジオ、ちゃんと仕事してるポイじゃん。」

「ポイじゃないの。ちゃんとお仕事してるの!」

私は軽くリヨウを睨みながらそう言つと、テキパキと入力を済ませる。

「あんた達晩ご飯は？」

「母ちゃんが、ナジオと食べて来いって。」

「・・・言われると思つた・・・で、ネエは？」

「父ちゃんとデートしてくるって。」

自分たちの息子、妹に押しつけてくんなや！！

結婚して17年になるが、未だにネエと義兄ニライはラブラブで

事あるごとに、息子達を実家や私に預けてデートに出かけている。

姉夫婦の仲が良い事は喜ばしい事なのだが、

余りにも頻繁なので、いい加減ウンザリしていた・・・

それを察したのが、リヨウが高校生になってから二人の面倒をみる事は少なくなった。

ジンが料理作るのを少しずつ覚えてきたから食事面で問題が無くなつたからである。

一度ジンが作った料理を食べた事があるが絶品だった。

パスタなんかもう最高！！

もしかしたら、

ネエよりも私よりも料理が上手になるかもしれない。

「判つた、片付けが終わつて私が着替えて来るまでどっかで待つて。」

私がそう言つと、治療を終えたジンが待合室に戻つてきた。

「ナジイ、僕ナジイの手料理が食べたいなあ。」

「あ、俺も！久しぶりにナジオの手料理が食べたい！」

リヨウはともかくジンに甘えられると嫌とは言えない。

「え？・・・いいけど、時間がないからあんまり手の込んだのは作れないよ？」

と、すぐに了承してしまう。

実は、今日 仕事が終わったらアラタ先生とインパルスに行く予定だったが急遽予定変更。

冷蔵庫の中にはあまり食材が残っていないが
駅の近くに遅くまでやっているスーパーがあるのでそこで材料を買って帰ればいいだけの話。

あとで、アラタさんに説明して別の日に変更してもらおう。

私の中の優先順位は

ネエ（リヨウとジンを含む） > 仕事 > アラタさん
なのである。

アラタさんには申し訳ないが、育ってきた環境と云うべきか、条件反射と云うべきか・・・。

だって、うちのネエはちょっと性格がぶっ飛んでて

ちよっと機嫌を損なおうものなら、大変な事になるんだから

！！

未然に人災が防げるなら、絶対予防するでしょ？！

人災・・・うちのネエはまさしく災害を巻き起こす人なのである。

「あ、それと、母ちゃんが。」

お金はナジオに任せておけって言った。」

やっぱりか！！ あのネエの事だから絶対云うと思った！！

私はこんな事だろうと思ってロッカーに置いてあった財布からしづしづりヨウとジンの治療費を出してお会計を済ませた。

この確信犯！！

甥っ子の医療費を妹に払わせるなんて、

どんな姉なんだよ！！

ってか、来るなら来るで、

事前に私に連絡しやがれ！！

私は心の中で絶対に口には出せない罵詈雑言を叫び続けた……。。

私は『院外で待つてて』って言ったつもりだったのに、なぜか待合室で私が仕事を終えるのを待つている二人・・・

アルバイトの女の子達がソワソワして全然片付けがはかどらない事態に陥りました・・・。

なんとか、女の子達のお尻を叩いて片付けをさせて

全員更衣室に押し込んで着替えていた時も女の子達が大興奮で

「ナジオさん！！ さっきの患者さんとどういった関係なんですか？！」

「え・・・甥っ子」

「凄くカッコいいんですけど！！」

「彼女いるのかな？！」

「私はジンセイ君の方がいい！！」

「ええ〜！ やっぱリョウセイ君でしょ？！」

なんて、私に質問しているようで自分たちで盛り上がっている。

私は無言のため息をつきながら着替えを済ませて

女の子達が着替え終わるまでの間にアラタさんに急に二人とご飯を食べる羽目になったので、今日はインパルスに行けないとメールを送る。

あの二人とご飯を食べるより

アラタさんとインパルスに行きたかった！！

そんな思いを込めてメールを送信する。
すると直ぐに

『判りました。また今度ね。』

と返事が来る。
話の判る人でホント助かる。

私は戸締りをして更衣室を出て待合室で待っていた二人を迎えに行く。

そこはすでにバイトの女の子達が群がっており、なんとなく二人が学校でどういう風に過ごしているのかが垣間見えた気がした・・・。

この子たち、意外と積極的だったんだね・・・。

こんなの、お話の世界だけの現象だと思ってたわ・・・。

もう両手に花とはこの状態！って注訳がどこかに入ってるんじゃないかと、私はキヨロキヨロとあたりを見回してしまった。

「あのおく、お楽しみ在所大変申し訳ないのですが、戸締りをしたいので

外でやってもらえませんか？」

私がそう言つと、女の子達に笑顔を振りまいてリョウがさっさと診療所を出て行った。

その後ろを「では外に出ましようか」と女の子に声をかけながらジーンが女の子を連れだつて出ている。

あいつら、この状況に慣れてやがる・・・。

取り敢えず、

全員が出て行ったので戸締りをして指さし確認でガス・水道の元栓電気・コンプレッサーの電源が切れているか確認してから戸締りを出して診療所を出た。

相変わらず続いているハーレム状態。

なんとなく場を崩すのは申し訳ないと思つて、無言で手を上げてリ

ヨウ向かって（ごゆっくり）と合図を送ってから、クルツと背中を向けて駅に向かって歩き出した。

さて、晩ご飯は何にしようかな・・・と、3人分のメニューを考えながら歩いていると後ろから急に左腕を取られた。

そして、私の腕に自分の腕をからめてくる。

その手は振り向かなくても誰だが判る。絶対にジン。

そう思つて左側を見ると、ニッコリ笑顔のジンが私の腕を抱え込むように掴んできた。

そして、その後ろを優雅に歩くりヨウの姿がちらり・・・。

昔は私の左手がジン、右手がリヨウと仲よく手を繋いで並んで歩いたが、手を繋いで歩くのはリヨウが小学校の高学年になったら止めた。

ジンも同時期ぐらいに手を繋ぐ事は止めたが、たまに腕を組んで歩くと喜ぶ。

何だかんだ言つても甘えん坊なのだろうと私なりに納得している。

「ナジイ、買い物して帰るんでしょ？ 一緒に行こう。」
そう言つて、べったり私にくっついてくる。

ある意味、

中学生にもなつて叔母と腕を組んで歩くのって

どうなんだろうね・・・ジン。

そう思いながらも、ジンに甘い私はされるがまま拒まずに歩く。

すると、人の後ろを歩くのが嫌いなリヨウは足早に私たちを追い抜いて、当たり前のように私たちの前を悠然と歩く。

「って、言うか！ 手料理が食べたいって言ったのに、なんで鍋?!」
リヨウがブツブツ文句を言いながら私達の前を歩いている。

「しょうがないじゃない！ 予定もなくいきなり食べざかりが2人

なんて直ぐに準備出来る訳ないでしょ!!」
そう。

メニューは何にしようかと、悩みに悩んだ結果、野菜もたくさん食べれる分量もそれなりにあるからちゃんこ鍋にする事にしたのである。

「僕は、ナジイが作ってくれるものなら何だつて喜んで食べるよ!」
そう言ってくれたジンはレジ袋にパンパンに詰まった食材を両手に提げて歩いている。

「ジン。本当に重くない?私、半分持つよ?」
スーパーを出る時に何も言わずにジンが荷物を全部持ってくれたのである。

さすがに、3人分の鍋の材料を一人で持つのは大変だったので、ジンが持ってくれて大助かりである。

しかし、荷物を全部持つて貰うと、逆に申し訳なくて困ってしまう。
「大丈夫だよ、ナジイには今からご飯を作って貰うんだから、これくらい当たり前だよ」

やっぱり、ジンは優しい子!!

なんて良い子なの!!

・・・それに比べて・・・。

「リヨウ、ジンの姿を見てなんとも思わないの?!」

私は前を歩くリヨウの背中に向かってそう言つと

「俺は、お前達の前を歩いているから、ジンの姿なんて目に入るわけないだろ。」

「なに言ってるの!!あんたも食べるご飯の材料なんだから、ちょっとぐらい手伝わらどうなの?」

「好きで荷物持ちを買って出たんだから、助けてやるのは逆に失礼だろ?」

いっすすがすがしいまでの手伝わない宣言に私は脱力しつつ、ジン

と並んで歩く。

相変わらず俺様なりヨウである。

そんなやり取りをしつつ私たちは部屋にたどりついた。

「ホント、いつ来ても男の匂いのしない部屋だよな！」
部屋に入ったリヨウの第一声がそれだった……

ミオがいつ襲撃してくるか判らないから
アラタさんを部屋に呼べないから
ミオの匂いしかないんだよね……。

「いいじゃない。ナジイに悪い虫が付いていない証拠だよ。」
と、荷物を台所に置きながらジンが言う

中学生に心配された……
しかも、悪い虫限定？！

なんとなくか、微妙な心境を抱きながら私は靴を脱いで部屋に上がる。

いつもは何とも思わない自分の部屋だが、さすがにガタイのデカイ男が二人も居たら狭い。

台所もミオと二人で立つてもなんとも思わないのに、ジンと私が立つと狭くて身動きが取れない……。

「ジン、向こうでテレビ見て待ってて。」

「え？手伝うよ。」

「でも、ここ狭から……。」

「……うん、判った。運ぶ時呼んでね。」

そう言つて、心優しいジンは寂しそうにテレビのある部屋へと入つて行った。

構つて欲しかったのかな？

でも、ごめんね。

ここ本当に狭いから……。

そして、最初から手伝う気なんてサラサラないリヨウは、本棚から適当に本を取り出して、ベットに腰掛けて読んでいる。

リヨウはある意味空気の読める子なので、狭い部屋なのを判っていて最初から邪魔にならない所に最初からいてくれていてるのは長年の付き合いで判ってるんだけど……。

なんだろう、判ってるけど……微妙に腹立つ!!

何様だよお前?!

と、私の胸中穏やかではない事だけは確かです……。

取り敢えず、鶏ガラスープで出汁を作っているあいだに、私は晩ご飯を作るべく食材を切ってはザルに盛り付けて行く。

豚肉・鶏肉・鶏肉のつみれ・魚のつみれ・鮭の切り身・貝柱・エビ・わかめ・もやし・キャベツ・ごぼう・白ネギ・うすあげ・豆腐

一人暮らしの家に3人分の食材を乗せるザルなんて存在しないから、ある程度はで炊いてから、後から入れる材料だけを家にあるザルを総動員して盛り付けておく。

しかも、鍋もそんなに大きくないので何度も炊き直さなければならぬのが難点であるのだが……。

瀧野家でちゃんこ鍋と云えば、無くてはならない土生姜とゴマ!!

(一般的?)

あとニンニクを入れたい所だけど、全員明日の予定もあるだろうから敢えて出さない。

最後の締めの中華麺を出して、食材の準備は完了した。

私はカセットコンロを食卓の上に置いて、ガスボンベの残量があ

るかどうかを振って確認してコンロにセットする。

「ジン。器を並べるの手伝って。」

私がその声をかけると、手持無沙汰でテレビを見ていたジンは嬉しそう台所に来て器を出すのを手伝ってくれた。

ジンに尻尾がついてたら、絶対振ってたね！

帰宅して数十分で晚ご飯の準備を終えた私はリヨウにも声をかけて3人で食卓を囲む。

「はい、お待たせしました。召し上がれ」

「・・・」

「いただきます」

手を合わせるが何も言わないで食べようとするリヨウと、「いただきます」と手を合わせて言ったジン。

リヨウよ、反抗期なのか？

反抗期も良いけど、食べ物には感謝しろ？！

「ニイ、ナジイが怒ってる。」

私の顔色を読んだジンがリヨウの肘をつつく

「あ？・・・いただきます」

今気がついた、と云った態を取りながらいただきますと小さく呟いて食べ始める。

ネエがいたら、絶対ブツ飛ばされてたぞ！リヨウ！！

ってか、私だから敢えて言わなかっただろ？！！！！

うちのネエは、意外と（？）礼儀にうるさい。

御近所の方に御挨拶するのは当たり前で、「ありがとう・いただきます・ごちそうさまでした」をちゃんと言わないと、情け容赦なく

鉄拳が飛んでくる。

私なんて小さかった時にちゃんと『いただきます』って言ったのに聞こえなかったからと言って、食べようとしていた御茶碗をひっくり返された事が何度もある……。

しかも、ネエによつて落とされたご飯を『聞こえるように言わなかつたあんたが悪い!』と、食べれる範囲で食べさせられるのである……。

食べれなかった部分は本気でご飯に『ごめんなさい』と謝つて泣く泣く処分するのである。

食べ物を粗末にはしてはならないと言いながら、食べ物を粗末にさせる真似をするネエ。

あの人の考えは未だに判らない……。

「いただきます」

私も気を取り直してニッコリほほ笑んでからいただきますと手を合わせた。

やっぱりご飯はギスギスした空気で食べるより、和やかな雰囲気食べる方が絶対に美味しい!

私が笑うと、ジンも笑顔になつてご飯を食べ始める。

諸悪の根源のリヨウは『我関せず』と云つた風に食事を始めている。こいつ……本気で可愛くない……。

「で、ナジオは付き合ってるやついないの？」
おもむろにそう聞いてきたリヨウ。

それに対して私は正直に言うべきか秘密にすべきか正直悩んだ……。

だつてさ……言ったら

ネエが面白半分で診療所に乗り込んできそうだし、

ネエの反応が未知数で怖い……。

私は、アラタさんの存在をネエに知られるのが怖い。

アラタさんは絶対に“あんな”ネエに耐えられないと思う……。

あの自由人なミオが『心の師匠』と決して真似して欲しくない人を
本人に無断で

師匠呼ばわりしている人なのである。

（ネエが『師匠』呼ばわりしている事を知ったら、『弟子ならば』
と、情け容赦なく引きずりまわされる事をミオは良く理解している
ので、決して口には出さない。）

アラタさんにかかりの衝撃を与えかねない存在のネエ……。

私、どうしたらいいの!!!

そんな考えに囚われて、思わず頭を抱えた私を見た二人は何かを察
したらしく。

「……やっぱり、居るんだな。彼氏」

何も言っていないのに、即効バレテしまった……。

さすが、誰よりも付き合い長いだけあるわ……。

そして、私の悩みがネエの存在だと判っている二人
「ナジオは良いじゃん、妹だから。」

俺たちなんて息子だぜ？ 俺たちが彼女を連れようものなら・・・
な？」

そう言つて、苦い表情でジンを見るリヨウ。
苦笑いで頷くジン。

ああ、あんた達もやられたんだ・・・。

きつと、二人は母の存在ネエによつて彼女と別れた事があるであろう。
私も、やられた事があるからなんとなく判る。

産まれた時からネエと一緒に生活をしている私たちは『災害』扱い
で慣れているが、一般の人間がネエに遭遇するとトラウマになる。
本気で。

私に初めて彼氏が出来たのは専門学校の時

ミオの紹介で会つて付き合う事になったのだが、その時はまだ実家
で生活をしていたので、初めてのデートの帰りに彼氏に家まで送つ
て貰ったのだが、そんな遅い時間にはなっていなかった（たしか、
8時ぐらい？）なのに、なぜか実家の玄関の前で“雷頑固おやじ！”
といった感じを醸し出したネエが仁王立ちで私の帰りを待ち構え
ていた。

両親には『帰りが遅くなります』と、連絡して了承を得ていたのに、
帰つて来て即効ネエに怒られた・・・彼氏も巻き込んで・・・。

それはもう、筆舌にしがたい程の罵詈雑言を私と彼氏に情け容赦な
く浴びせかけ、なぜか『成人するまでは家族以外の人と一緒に遅い
時間まで出歩きません』と誓約書まで書かされた。

そして、その彼氏とは次の日ぐらいに別れた。

あの人には今でも申し訳ないと思う。

絶対、恐怖体験の一つとして
記憶の片隅で一生付きまとうと思うし……。

後で聞いた話、あの時ネエは私を待っていたのではなく、義兄ニイと喧嘩して家を飛び出し、ニイがネエを迎えにくるかもしれないと思って実家の玄関で待っていたらしい……。

いつまで待っても迎えに来ないニイに痺れを切らした時に私が帰ってきたので憂さ晴らしをしたらしい……完全に八つ当たりされたのである。

私はそれ以来、彼氏が出来たらひたすらネエの存在を隠してきた。その他にも、彼氏のみならず友達にもネエの魔の手(?)は遺憾なく発揮されて、自分で言うのもなんだがネエのせいで友達が少ないと言っても過言ではない。

そんなネエを母として持つ二人には成人するまで母ネエというとてもなく高い壁が立ちはだかる事は間違いない。

あの壁ネエを乗り越えられるほどの友達とか愛する人が出来たら、それは本物だと思う。

だから、諦めずに頑張れ！

と心の中で小さくエールを送っておく。

「で、彼氏ってどんな人？」

「リヨウの彼女はどんな子？」

アラタさんの事に関してはまだ誰にも触れられたくないの、リヨウの質問に話をそらして質問を返す。

「俺の事は良いんだよ、今はナジオの彼氏の話だよ。」

「私の話は今いいの。リヨウ……今日の待合室の光景で、私はなんとなくあんた達の日常を垣間見た気がする……頑張ってるネエから逃げきれよ。で、彼女ってどんな子？」

話しながらも食事の手は止めずに、引かないリヨウに私も負けじと言葉をかぶせて行く。

「ナジイ、僕を含めないで」

「いやいやあ、あんたも十分手慣れてたよ。」

「ニイと一緒にしないでよ！僕は人員整理してただけだから！」
それが手慣れてるって言うのよ。そう言いながら私は味の染みた薄揚げを食べる。

「そう言えば、最近のジンの行動は怪しい・・・」
リヨウは豚肉を食べながらそう言う。

お？！ やっぱリジンにも彼女がいるのか？

私は興味津津な表情で鶏肉を食べながらジンの方を見る。
豆腐を食べながら苦い表情のジン。

「違うよ。向こうが勝手に勘違いしてるんだよ。」

勘違いって言うても、

付き合っていると思われる行動を取っているって事だよな？！

いやあ〜！！

中学生のお付き合いって気になる！！

どこ行くの？！

なにして過ごしているの？！！

私は中学生のお付き合いが気になって矢継ぎ早に質問を重ねる。

だってさ、今時の子がデートでどこに行くのかとか凄く気になる！
しかも、リヨウじゃなくてジンって事もポイント！

若干、興奮気味の私を冷たい視線で黙らせたのはリヨウ。

「ナジオ、興奮しすぎ。」

「ええ？そう？」

「ナジイ、だから勘違いされたただけだって言ってるでしょ？僕の話

「し聞いている？」

「聞いてるよ。」

私がニコニコしてちゃんと話を聞いてますアピールをすると、リョウがため息をつきながら、

「・・・なんか、今一瞬 ナジオと母ちゃんが姉妹なんだって実感した・・・。」

って、言ってきた・・・。

やめて!!

それだけは絶対に言われたくない!!

私はリョウのその一言で一気にテンションが下がった。

お互いの彼氏彼女の話には触れられたくないと言う事がお互い判明したので、私たちはその話題には一切触れず、差しさわりのない程度の会話をしながら、締め中華麺もしっかり食べて食事を終えた。

凄いやね！レジ袋にパンパンに入っていた食材が

一瞬にして無くなった挙句

冷蔵庫にあった残り少ない食材も

きれえくに無くなったんだから！！

食べざかりの男の子2人の食欲恐るべし！

ジンに手伝って貰いながら後片付けを済ませて、食後の御茶を入れて三人でまったり飲む。

「で？ネエ達、何時ぐらいに帰ってくるって？」

なんとなく目に付いた時計を見ながらそう言う

「さあ？聞いてない。まあ、俺たちだけで留守番出来ない歳でもないから。」

確かに、リヨウはもう高校生だからある程度の事は自分で出来るし、ネエを反面教師のようにして育ったから、見た目以上に常識人だったりする。

ジンが（必然的に）料理を作れるようになってから、ネエとニイの二人は事あるごとに二人で出掛けるようになった。

リヨウ曰く、さすがのネエも子供たちを置いて自分達だけ遊びに行くのには抵抗があったらしいが、リヨウとジンがネエ達に「二人だけで行って楽しんで来てくれ！」と懇願したらしい。

両親が仲の良い事はとても嬉しいのだが、ラブラブバカップルな二人に俺たちを巻きこんでくれるな・・・と言う、心の叫びを込めての嘆願だったらしい・・・。

ネエよ・・・どんだけ子供に気を使わせるの?!!

そんな事を思いながら、ふと部屋の隅に目をやると洗濯物が綺麗に畳んで置いてありました・・・。

あ・・・洗濯物取り込むの、すっかり忘れてた・・・

あれ？ この洗濯物は今朝仕事の前に干したやつ・・・
しかも、綺麗に畳んで並べてあるし・・・。

この場にいるのは3人、私は洗濯物の存在を忘れていたから、私を省くとしてのぞくはリヨウとジン・・・リヨウがそんな事するはずないから・・・。

「・・・ジン、洗濯物・・・」

私が綺麗に畳まれた洗濯物に目をやりながらそう言つと、

「ああ、取り込んでおいたよ。」

と、さらりと言われてしまった。

「あ・・・ありがとう・・・」

私はなんだか言いたい事を伝える言葉が上手く出てこなくてどもりながらも取り敢えずお礼の言葉を口にする。

「別にいいよ、気にしないで。」

ジンがニッコリ笑ってそう言った。

・・・でもさ・・・身内とは言えさ・・・

私もいろいろと見られたくない物があるんだけど・・・

まああ、私が必要以上に神経質になるのもどうかと思うので、その点は深く追求せずにサラッと流してしまおうと思ってジンの方を向いた。

「ナジイって意外と胸あるんだね。」

それはもう良い笑顔でサラッとそんな事を口にするジン。
「それにしても、シンプル過ぎて色気のない下着だよな。」
とどめを刺すように話に乗ってくるリヨウ。

こらああああああ！！！！

「あんた達ね！！人の下着を偶然見てしまっただけなら許すけど、感想なんていらなから！！私がどんな下着をつけようとあんた達には関係ないから！！」

私は慌てて洗濯物の山を抱えて箆笥の中にしまい込む。

「確かに関係はないけど、男として忠告の一つでもしてやろうかと」「いらんわ！！」

先日もコウイチ先生に同じような事を言われた……。しかも、それを高校生のリヨウに『男として』忠告された……。ちょっと凹む。もしかしてアラタさんにも同じ事思われる？！

私は心の隅で、自分の下着のレベルアップを図ろうと思った……。

「つつつか！お前ら食うもん食ったんだから、さっさと帰れ！！」

「そんなこと言わないでナジイ。久しぶりに会ったんだから、もう少しゆっくり話そうよ。」

「そうだぞナジオ。すぐ怒るのはお前の悪い癖だぞ。」

何故か、諸悪の根源のはずのジンになぜかなだめられ、リヨウに諷められる。

え？！ 悪いの私？！！！！

納得のいかない思いを抱きつつ、大人の自分が子供に嗜められている現状もどうかと思いなおして、落ち着くべく大人しくその場に座った。

「母ちゃんの下着はもうちょっと……」

「その話はもういい！！」

なおも下着の話の続けようとするリヨウ。その横で、

「こづいっただ感じの……。」

「……。」

どこから持ち出したのか通販カタログの下着のページをめくっているジンから無言で雑誌をひったくる。

下着の話はコウイチ先生でお腹いっぱいなので、あなた達とはしたくありません。

って、どうか、叔母の下着事情に介入してくるとは、恐るべき高校生と中学生……。

特にジン。

叔母さんは貴方の行く末が心配です。

今日も、私はコウイチ先生のアシスタントとして補助業務についていた。

今の治療内容は虫歯の部分を削って、ぽっかり空いた部分を光重合レジンと呼ばれるペースト状のプラスチックのような白い樹脂材料を充填する治療である。

この光重合レジンは可視光線と呼ばれる青白い光にあてると硬く固まるので、とても扱いやすい事と歯の色は個人差があるので患者さんの歯の色に近い色が選べて、見た目的にもそこに虫歯が合ったなどと判りにくくなる便利な材料なのである。

切削した部分にエッチングと呼ばれる材料を塗布して歯の切削面をざらざらにして水洗・乾燥させてから充填するとレジンが外れにくくなるので、唾液がつかないようにしっかりと水洗・乾燥させる必要がある。

そして、プライマーを塗布してから隣の歯と隣接するような部位に充填する場合は、隣の歯とくっつかないように透明のフィルムを一枚張って成形し、可視光線照射器を使って光を照射して硬化させる。この可視光線の青白い色が綺麗で、いつも見ちゃうけど、本当は目に悪い光線だから直接見ちゃいけないんだよね〜え。

そんな可視光線を数秒照射して材料が固まってから、いらないバリの部分を取り軽く研磨してた後に、コウイチ先生が無言で手を出したので、私は咬合紙occlusal paperと呼ばれる赤と青の紙が挟まった器具を渡す。この咬合紙とは、歯のかみ合わせの部分の高さや当たり具合を観る器具で、高ければ、大きくハッキリとした跡がつく、逆に低ければ全く印が付かない。

その印が均等になるまで調節するのである。

「カチカチカチカチと噛んで下さ〜い。今度はギシギシギシギシと横に動かして下さい」

そう言つて、コウイチ先生は先ほど固めたレジンの高さの調節を観る。

先ほど盛った材料が気持ち高かつたのか、タービン目の細かいバーを使って少し削つて均等になるように合わせて行く。

「ストリップス」

短く言つた言葉に反応して、私はとっても小さい紙やすりのような物を先生に手渡す。

ストリップスとは、歯と歯の間の隙間をあける為に、ヤスつて削る為の道具である。

いつもは先ほどの咬合紙の時のように何も云わずに治療をしている部位からあまり目を離さないで手だけを出して器具を渡すように促される。

先生の癖や好みによつて使う器具などが変わつてくるが、それは事前に確認しているのでタイミングを見て順番に渡していく。

ちよつと、ボーつとしている時とかには先ほどのように欲しい器具の名前を言われて渡す事があるが、今の状況では別に言わなくても渡したのに……。

と、先生の言動を不思議に思つていたら、

「あ！ストリップつて言つても、服を脱ぐ訳じゃないですよ〜お」

と、コウイチ先生は誰も聞いていないのに歯科医院でしか通用しないような親父ギャグを飛ばして女性の患者さんの苦笑いを誘つた……。

前フリかよー！！

つてか、病院で脱ぐ訳ないだろー！！

愛想笑いされてますよー！！

患者さんの微妙な反応を無視するかのようにニコニコ笑っているコウイチ先生は、綺麗な女性の患者さんの時に妙にテンションが高くなる。

女好きの本能が、仕事中にまで発揮されるのか、切っ掛け作りに突拍子もない事を言うのは止めて頂きたい！
そして、テンションの高さが空回りして今回のような微妙な空気が巻き起こる……。

病院の名前に関わるような事だけは、
絶対に言わないで下さい！！

私は冷ややかな目でコウイチ先生を一瞥してから無言で治療を続けるように促す。

コウイチ先生の治療が終了した後片付けをしている時にアラタ先生に遭遇したので、

「コウイチ先生が女性の患者さんに歯科医院でしか判らないような微妙なギャグ飛ばしてました……」

「……あの人はホントに……」

「間違っても、先生は言わないでくださいね。」

「俺は言いませんよ！！」

そんな短いやり取りをしてその場を離れた。

アットホームな環境を望んでいるアラタ先生の事だからもう少し空気を読んで患者さんとは和やかな環境を目指すだろうけれども、一歩間違えたらコウイチ先生のギャク発言に繋がる……普通繋がらないか……コウイチ先生が特殊事例な事を忘れてた……。

私がさつき歯科に入った時はもうちょっとマトモな人だと思っていたけど、いつの頃からか脳内どピンクを隠さなくなったのかと遠い記憶を探るが、思いつく限りセクハラ発言に悩まされる日々しか思いだせないので、自分の為に考えるのを止める。

再診2-1（後書き）

表現に不自然な所と不親切なところがあつたので、少し訂正しました。

ちなみに、歯科医院で使用される器具の名前で面白い名称とか呼び方とかがあります。
それも、ちよいちよい挟んでいきます。

11月3日訂正。

・・・打ち間違えた・・・

ありえない間違いに自分自身にツッコミ・・・。

「ちゃんと確認しよう！」と強く反省・・・。

再診2-2

「EXTします。」
「エキスト」

コウイチ先生が私に短く指示を出す。

「はい。」

私はすぐに浸麻（しんま）浸潤麻酔と呼ばれる一般的に多く用いられる局部麻酔の事）を用意して先生に渡すと先生は患者さんに「麻酔しますね。」と声をかけて注射の針が痛くないように表面麻酔を塗布してから浸麻を打った。

「麻酔が効いてくるまでしばらくお待ちください。」

そう声をかけてからEXTで使用する器具を準備する為に消毒室へと向かった。

EXTとはextractの略で『抜く・抜き取る』という意味。つまりは抜歯（しゅじ）する事を意味する。

一般的に歯科医院では抜歯の事をEXTと呼ぶ。

なぜなら、縫った糸を抜く抜糸（はっし）と同じ発音だから・・・だと思っ・・・。

紛らわしいから抜歯の方はEXT、抜糸の事はさつき歯科では「ばつ」と呼んでいた。（他の病院での言い方はしりません。あしからず。）

「ヘーベルは直ですか？曲ですか？」

「両方」

「ナートしますか？」

「・・・たぶんしない。」

私は消毒室まで一緒についてきたコウイチ先生に器具を出しながら使用する器具を清潔なトレイの上に出していく。

ドクターの手を止めることなく治療が最後まで出来れば、アシストしていて気持ちがいい。

途中で器具を取りに行くのはなんだか自分のヨミが浅かったみたい

でちょっと残念な気持ちになる・・・（私だけ?!）

それに、しっかり準備が出来ていると不測の事態が起きても迅速に対応できればそれだけ患者さんの負担も軽くなる。

私たちの考える1番は患者さんに気持ち良く治療を受けていただく事。

その考えのもと、さつき歯科のスタッフ全員が動いていると言つて過言ではないと思う。

それはもう、サツキ先生が毎日口を酸っぱくして『患者さんの事を一番に考えた行動を!』つて言われてますから、みんなその精神で動いている・・・はず・・・たぶん。

話は戻つて器具の話。

歯科医院で使用されている器具は、同じ器具の事なのに呼び方が複数ある事が多い。

判りやすく言えば、商品名で呼んでいるか正式名称で呼んでいるかの違い・・・だと思う。

（ごめん、これもあやふや・・・）

私からしたら、お菓子の事を「スイーツ」と呼ぶか「デザート」と呼ぶかの違いぐらいにしか思っていない・・・。

ヘーベルも別名をエレベーターとも呼ばれる器具で、おもに歯と歯肉（歯茎の事）の隙間に入れて手この原理を利用して歯を脱臼させる器具の事である。

形のイメージ的としては、マイナスイライバーのような形と云えば形をイメージしやすいかもしれない。

器具の呼び方は指導していただいた先生や教科書などに影響されるようで、私はエレベーターと習ったがさつき歯科ではヘーベルと呼んでいるから私もヘーベルと呼んでいる。

このヘーベルには、使用する部位に合わせて太さの違いや、先端が真っ直ぐな物と曲がつた物など存在する。

その時の状況によっていろいろ使い分けがあるので必要かどうかを念のために確認しておく心安心。

本数も1種類ずつしか保有していないので、他の患者さんで必要になった時に消毒中で使えないなんて事が起きないように、必要な物だけを使用するように心掛けています。

(一度使用すると、次に使用できるように消毒するのにとても時間がかかってしまうので使用しないかもしれない器具は出さないように心掛けています。)

ナートとは針と糸を用いて歯肉(歯茎の事)を縫い合わせる事をいう。

EXTを行う時にヘーベル以外であと一つ必要な器具がある。

それは、鉗子と呼ばれる器具である。

形のイメージとしてはペンチのような形と云えば判りやすいかもしれない。

これも、使用する部位によって形がいろいろとあるが、これは先生に確認などしなくても抜く歯の部位によって決まっているので敢えては聞かない。

鉗子で確認をするとしたら残根鉗子と呼ばれる、歯の根っただけが残っている状態の物を抜く時に必要になる器具のだが、今回は必要なさそうなので、あえて確認しなかった。

最後に必要なのが鋭匙と呼ばれる文字通り「鋭い匙」のような物が必要になる時もある。

鉛筆の両端に耳かきのような形の物が付いた器具を想像していただけたらと思う。

それは、EXTを行った後にきれいに清掃するための道具だと思っただけだと思います。

そのすべての器具は、消毒室の中で嚴重に不潔にならない保管されている。

それを“不潔にならないように”取りだしてコウイチ先生に確認してもらおう。

先生のOKが出たら、最後に患者さんに止血の為に噛んで貰うガ―ゼをトレイの上に出して準備完了。

麻酔のかかり具合を確認して大丈夫であれば治療開始である。

無事にEXTも終わり使用した器具を速やかに消毒して次に備えていると、コウイチ先生が私の所にやってきた。

わざわざ私の所に来て手を洗わなくてもいいのに、私の横で手を洗っている。

「あの、正直邪魔なんで他でやってもらえませんか？」

コウイチ先生にそう言うと、

「別にいいじゃない。」

なんていいながらもどここうとしない。

仕方がないので、私が他の場所に移動して作業をするとコウイチ先生がついてくる。

「先生・・・遊んでないで、仕事してください。」

私がつま息交じりにそう言うと、

「僕、この後予約入ってないんだよね。」

「なら、他の作業してください。」

「いいじゃない別に。」

小さな子供なら許すが30過ぎた大人にやられるとつっつっしい・・・。

私はイライラしながらも、言っても聞いてくれないのなら放置するしかない・・・と諦めてコウイチ先生を相手にせず補充作業などを始めると

私たちがいる部屋の奥からリサさんが出てきた。

「コウイチ先生、ナジオ構って遊んでないでちゃんと仕事して下さい！」

そう言って、通り過ぎて行った。

「ああ、あ、ガミーに怒られた。」

ガミー？ ガミーって何？

ガミガミ怒るのガミー？

私はコウイチ先生の言った事の意味が判ら判らなくて、キョトンとした表情でコウイチ先生を見て「先生、ガミーってどういう意味？」と聞いてみた。

すると先生は

「ガミースマイルの『ガミー』だよ。」

「え?!ギミースマイルじゃないの?」

「え?ガミーでしょ?」

「はぐ歯茎が見えてる笑い方の事?」

「そう、それガミースマイルでしょ?」

「あれ?私、ギミースマイルって習った気がする。」

「ま、いいんじゃない?」

「それは、いいですけど。女性に対してひどいあだ名つけましたね。」

私はコウイチ先生を冷たい目で見ると、先生はエヘヘって笑いながら消毒室から出て行った。

私も陰でコウイチ先生に変なあだ名つけられてそんな気がする・・・。

聞きたいような聞きたくないような・・・。

お昼御飯を食べた後のなんとも気だるい時間帯。

この時間になんとなく辛い仕事は、支台歯しだいし（虫歯などで治療して、歯に被せなどを被せる時の土台となる歯の事）を形成している時に、バキューム（水や唾液を吸入する掃除機のような物）で頬つぺたや舌をよけるようにドクターの視野を確保しつつ、水や切削したカスなどを吸引していくアシスタント作業かもしれない・・・。

ジーツと意識を1点集中させて手を1ミリも動かせない状況で止まっていなければならぬというのは意外と辛い。

動いては行けないと思えば思う程手がプルプル震えてくる・・・。
次の作業を考えながら頭と手を動かしているのであれば大丈夫なのだが、お腹が満たされた時間帯にひたすら同じ体勢でじつとしていると訪れるのが・・・睡魔・・・。

バキュームで吸引するしか作業がないので、集中力が切れがちで・・・。
それに、バキュームで一カ所を長時間吸引し続けるのは意外と難しい。

なぜかと云うと、場所によるがほんの少し手を動かしただけで全然違う場所に移動してしまうからである。

しかも、何の支えのない高めの椅子に腰かけて、若干前かがみ姿勢のまま腹筋に力を入れて腕を動かさないようにただじつと動かないようにしなければならぬのである。

一度試して頂けると判るが、この体勢意外ときつい。
座るのがつらいなら立てば・・・と思うが、アシスタントチェアと患者さんが座るユニットチェアの隙間が以外と狭いのと、一歩も動けない状況で立ち続けるのもユニットチェアの高さによっては座ると同じくらいつらかったりするのである。

そして今、私はコウイチ先生のアシストをしながら魔の時間に先ほ

ど述べたバキュームでの唇と排除しながらの吸引作業である。

最初は、バキュームを2本使って作業していたのだが、コウイチ先生がミラーとタービンを使用している状況で、バキュームを2本も使用するとさすがに患者さんの口の中がいつぱいになってしまつて、先生の視界を妨げる事になるので、バキューム一本で補助をしていた。

ただじつと、切削部位を観ながら同じ姿勢を取り続けると集中力が途切れがちになって、少しずつバキュームの位置がずれて行く・・・

何度か、コウイチ先生にさりげなくバキュームの位置を戻されながらアシスト作業を続ける。

ごめん、コウイチ先生！　ちゃんと集中してアシストしますから！！

心で強くそんな事を思いつつも、どうしても意識が飛びがちになってしまう・・・。

すると、コウイチ先生が急に私のお腹をミラーの柄の部分でツンツンと突いてきた。

しかも、狙い澄ましたかのように体勢を維持するのに一番力を入れている辺りを・・・。

正座していて痺れいが切れてしまった足を突かれたような感じ・・・。

ごめんなさい！

ちゃんと吸引するので、

地味な嫌がらせするのは止めてください！！

そんな思いを抱きながら、頭を小さく振って自分の中から睡魔を追い出す。

良く考えて！

一番この状況で辛いのは患者さんだよ？

長時間、口を開けっ放しで、バキュームで水分吸われて口の中カラツカラツ状態って結構つらいからね。

私は自分自身にそう言い聞かせて気合いを入れなおす。

そして、なんとか乗り切った！私はやり遂げた！！

そんな思いを抱きつつ、歯の型を取るべく印象材を練っている。

無事に歯の型が取れると、切削する前に採取した歯の型を基にして樹脂で仮の歯を作ってくっ付けて治療は終了した。

「ナジオさん寝てるしい〜」

「・・・すみません、つい・・・」

「気を使ってミラーの柄で突いたけどお、遠慮なく指で突けば良かったかなあ〜？」

消毒終了後にコウイチ先生に地味に嫌味を言われる・・・。

完全に私が悪いんだけどね・・・。

なんでおネエ言葉になってるの？！

そこへ、治療を終えたアラタ先生がやって来た。

「あれ？どうしたんですか？」

私とコウイチ先生の纏っている微妙な雰囲気を感じて不思議そうな顔をして聞いてくる。

「ナジオさんがあ〜、治療中に寝てたからあ注意してたのお〜。」

「ナジオさんが居眠りなんて珍しいですね。ってか、なんでそんな喋り方なんですか？」

私の疑問をサラツと口にするアラタ先生。

「え？本気で怒る程の事じゃなくて、『立場上注意してる』って感じだからかな？」

「立場上ね……」

アラタ先生は苦笑いをしながら、通り過ぎざまに私の頭をポンポンと軽く叩いて奥の部屋へと行ってしまった。

「で！」

「で？」

コウイチ先生がいきなり『で！』と、言ったので私もつられて『で？』と返してしまった。

「で、今日仕事後に反省会として飲みに行こう！」

「……断ります。」

なんか、『立場上』から良い事でも言うのかと思ったのに『飲みに行こう』ってこの人は一体……。

「なんで毎回断るの……！」

「コウイチ先生とは飲みに行きたくないからです。」

「だからなんで？」

「先生絡んでくるからヤダ」

「絡まないからさあ」

って、もうすでに絡まれています……。

再診 2・3 (後書き)

そして、このあと

コウイチ先生の魔の手から逃げ切ったナジオであった。

アラタ先生が仕事中に私の頭ポンポンと叩くのは『今日、インパルスに行きませんか?』の合図。

OKならば、通り過ぎざまなどに肩をポンポンと叩き返す。

(予定などが入っていてダメなら、手で小さく『x』印を出したりして返事している)

最初はお互い肩を叩いて合図をしていたのだが、いつの頃からかアラタ先生は頭をポンポンと叩くようになった。

・・・なんか、子ども扱いされてないか?!

と、云う事で、あの後も『ナジオさんは付き合いが悪い』『絶対絡まないから』『たまには一緒に』などと言いつつ募るコウイチ先生の魔の手(?)を逃れて業務を終了してから駅へと急ぎ足で向かう。いつもはアラタさんと駅で待ち合わせしてから一緒にインパルスに向かうのだが、今日はコウイチ先生も私たちと同じ時間帯に業務が終了するので、捕まるとそのまま飲み^{インパルス}に強制連行されてしまう恐れがあるので(特にアラタ先生が)暗黙の現地集合なのである。

「ホントにありえませんか・・・アシスト中に寝るだなんて・・・」
私は先ほどから芋焼酎のお湯割りを片手に、同じ言葉を繰り返している・・・。

まだ酔っぱらってはいない

・・・ハズ・・・たぶん。

「あの時間帯は、眠たいですもんね。」
慰めるように正面の席で頂垂れた私の頭をアラタさんは優しく撫で

てくれる。

「そうなんですけど・・・業務中に居眠りって、どんだけ緊張感がないんだろうつて自分で自分に膝詰の正座で説教したい気分です・・・」

本気で落ち込んでる私に「どんだけ真面目なんですか」と、小さな声で呟きながらも頭を撫で続けてくれる。

「でも、あの時間にアシストしながら結構寝てる人いますよ？ユキさんとかりサさんとか・・・」

確かに、私も何度か居眠りしているユキとかりサさんを目撃したことがある・・・。

しかも、アラタ先生のアシスト中に・・・。そして、先生は起こさずに一人で治療してたんだよね

アラタさんは本当に優しいね。

でも、仕事中にそれってどうかと思うよ？

「いや、自分の治療されてる時にアシスタントが居眠りしてたら患者さん嫌でしょ?!」

「でも、口開けて寝てる患者さんもいますよ?」

「・・・治療中に寝るなんてどんだけツワモノ・・・。」

「ですよねぇ。」

たしかに、治療内容によっては患者さんも寝てる時はある・・・。日々の仕事や生活いお疲れのところ、治療が長時間になればそりゃ寝たくもなる。

私が治療している時に眠たそうな様子だったら『必要なときは起こしますから。』とユニットチェアを倒して眠りやすくする時もある。

でも、それはバキュームやタービンなどの器具が口に入っていない状態での話。

アラタさんが言うように器具を口に入れたままの状態で寝れるなん

て、よっぽど疲れていらつしやるのだろう……。

「え……ちなみに、切削中に寝たらどうするの?」

「患者さんに断って開口器（口を閉じないように固定する器具）を入れて続行する。」

開口器を入れてまで寝るってどうよ?!

治療途中で、どうしても口を閉じて欲しくない場合に使用される開口器は、主に子供の患者さんに使用する場合が多いが、大人で使用している所を見たことがない……。

「それって、さつき歯科でした事あります?」

「ないですよ。」

「でしようね……。」

さつき歯科でそんな事したら、100%ハルミさんにお呼び出しを食らうと思う……。

そんな危ない橋を渡るようなアラタさんじゃない事は判っているので、冗談だと勝手に判断して話題を変えてみる。

「それにしても、コウイチ先生がピンポイントで一番腹筋の力入っているところを突かれたときには『うひゃ!』ってなりましたよ!」

「……なんか、微妙に鬼追さんに嫉妬してます……。」

私の言葉にムツとした表情で答えるアラタさん。

そうですよね……付き合い始めたとはいえ、手以外に触れた事のない自分の彼女に一歩間違えればセクハラで訴えかねない行動に出られてあんだからね……。

「あはははは……。」

なんか、私……地雷踏んだ?!

私は背中に冷たい汗がツツツと流れるのを感じつつ、笑って話題をさっさとそらすべく頭の中で違う話題を探していると

いきなりアラタさんに手に持っていたグラスを強制的にテーブルに置かされて、両手を握られる。

「鬼追さんに馴らされないで下さいね！ナジオさんに触れていいのは俺だけです！俺も男なんで、いつまでも理性と戦い続けるのはつらいです。だから鬼追さんに付け込む隙をあたえないで下さい！」
真っ直ぐに私の目を見てストレートにそう言われて、顔を真っ赤にして俯いてしまう。

もう、恥ずかしくて顔を上げられない！！

『触れていいのは俺だけ』って・・・

きゃー！！

めちゃくちゃ恥ずかしい！！

私はアラタさんに言葉に悶絶。

なんか、サラッと殺し文句言われたような気がする・・・。

酔った勢いで発言かと思っていいたら、意外と本心だったらしくアラタさんの目に『本気』と書いてあった……。
そして、握りしめた手をまだ放して貰えない。

いやあ……まあ……そのお……
なんといいいますか……。

「なんか……すみません。いろいろと無防備みたいで……」
「ホントですよ！無防備のくせに警戒心が人一倍強いんですから！」
「！」

『無防備』なのに『警戒心がある』
なんか、意味わかんないんですけど……。

私はアラタさんにそう言われて思わずキョトンとした。

そんな私の顔を見てアラタさんは

「俺はナジオさんに触^ふりたい。でも、ナジオさんは触^ふられるのが苦手なのか俺が近づくといつも一歩下がって距離を取るんです。」

「はあ……（ごめん、無意識です。）」

「それなのに、鬼追さんに触^ふれられてる……一番危険な人なのに……」

「……危険なものも、仕事中には離れられる距離の限界があると
思うのですが……。それに、触^ふれるって器具で突^つかれただけ
なだけだね。」

「だから、それが無防備なんです。職場なら大丈夫って思ってる
でしょ？」

「……思ってます。」

「それが、ダメなんですよ！」
「・・・はい、すみません」
なぜか、説教されています。

なんで、こんな事になってるんでしょう？

「だから、触れるのは俺だけにして下さい。鬼追さんに隙を見せないで下さい。」

両手をがっしり捕まれた状態で凄まれては『はい』以外の返事なんてできませんよね・・・。

「以後気を付けます。」

私はシヨンボリして頂垂れる。

すると、アラタさんは優しく笑って私の手を放して頭を撫でた。

「ナジオさんにもつと触れてもいいですか？」

「？先ほどから手とか頭とか触ってるじゃないですか？」

「もつとです」

今日のアラタさんはストレート過ぎます！

たしかに、私は変化球な発言には気づかないけどさ！

だからと言って、ここまでストレートに言われると、恥ずかしさのあまり顔が上げられなくなる。

どう反応していいのか判らなくて、戸惑っているとアラタさんは席を立てて厨房の方に向かって歩いて行った。

アラタさんが席を立てた際に

私は戸惑いながら心を落ち着けようと小さく深呼吸した。
しばらくすると、アラタさんが戻ってきた。

「ナジオさん行きますよ。」

「行く？」

頭に疑問符をたくさん浮かべた状態のままの私の手を取って立ち上

がらせたアラタさんは『おやすみなさい』とマスターやアンナさんたちに声をかけながら店から出て行った。

「あれ？お会計！」

「さっき払いました」

てつきりお手洗いにいったのかと思っていたらお会計をしに行っていたのか！！

「あの、お金」

私がおずおずとそう言うと

「今日はいいです。」

「でも……」

「なら、今度ナジオさんのおごりって事で。」

「……わかりました、ごちそう様でした。」

そんな会話をしながらも、アラタさんは私の手を引いたままずんずん歩いていく。

駅とは反対方向。

かといって、私の部屋の方向ではない。

アラタさんはいったいどこに行くのだろう？

私はそんな事を思いつつ黙ってアラタさんについてゆく。

私はどこに連れて行かれるの？！

誘拐ですか？

私は絶賛拉致られ中ですか？

私はそんな事を思いながらどこに連れていかれているのかさっぱり判らない状態で、アラタさんに手を引かれて歩いていました。そして、しばらく歩いてたどり着いたのは堤防。

そういえば、私の部屋って川の近くにあったな・・・。

アラタさんが私を連れてきたのは大きな川の堤防でした。しかも、スーパー堤防。

私の実家からここまで、子供の足でこれる距離ではないので、川や河川敷と云う場所にあまり馴染みがない。

この川ではないが、以前、ミオと二人で川から打ち上げる花火大会を堤防の上から見た以来。

急に街灯が少なく視界が少し悪くなったからなのか、アラタさんは私をエスコートするように階段をゆっくりと上がっていった。

お酒飲んでるから、

気を使ってくれてるんだね。

アラタさんって、気配り上手だね。

数十段の階段を上りきると視界を隔たる事のない広い夜空があった。

都会育ちの私には建物と建物の中に居る事は当たり前で、視界を遮る物のない光景というのはなかなか新鮮であった。

なんか、

高層マンションに住む人の気持ちがちよっとだけ判った気がする……。

結構気持ちいい。

視界を少し下げて、川の反対側に街のネオンが夜空を明るく染めている部分を眺める。

沢山の人がああ光の中で仕事や生活をしている。それを遠くから眺めている私。

なんだか、シュミレーションゲームで街を創ってそれを眺めている『神様』になつたような気分になつた。

神様気分のまま今度は頭上を見上げる。

頭の真上にはネオン以上の明るさで大きな月が明るく光って浮かんでいた。

そういえば、長い間お月様を意識して見てなかったな。

お月様ってこんなに綺麗だったんだね。

私が夜空をボーツと眺めながら

「改めて見ると都会って明るいですね。でも、私はネオンよりも今日のお月様の方が綺麗で好きです。」

と、云うと、アラタさんも「そうですね」と言いながら一緒に夜景を眺める。

そして、そのまま真上を向いたアラタさんは小さくため息をついた。「どうしたんですか？」

「もう少し見えると思ったんだけど、明るすぎて見えないね。」

お月様は薄雲がかかっているが、綺麗に見えているのでおそらく見えないのは星の事。

堤防の上は薄暗いのだが、明るすぎる周りのネオンのせいで星は片手で足りる数しか見えない。

「対岸の街のネオンが明るいですからしょうがないですよ。」
「そうですね。」

私達の背中側、つまり今歩いてきた場所は住宅街だから、対岸の街程のネオンはないが思った以上に明るい。
どちら側から見ても、明るすぎて星が良く見えないと思う。

アラタさんが川の方に降りる階段の一番上の部分に座ったので、私も同じようにアラタさんの隣に並んで座った。

狭い階段だったので、アラタさんの体にピッタリとくっついた状態で……。

「プラネタリウム……なかなか行けませんね……。」

川を眺めながらボソツと呟いたアラタさん

「そうですね。楽しみにされてたんですか？」

私がそう言つと、

「ナジオさんと一緒ならどこだって楽しいですし、本当はプラネタリウムよりも本物の星空を見せてあげたいんですけどね。」

アラタさんは、はにかんだように笑った。

「ここでは星が数える程しか見えませんもんね。」

私は本物の星空が見たいと以前に話していた事を覚えていてくれた事が嬉しかった。

そして、アラタさんはやっぱり優しいなあ〜と、思いながら座ったまま夜空を見上げながらそう言った。

「でも、今日のお月様は本当に綺麗ですよ〜。」

私がそう言つと、急に視界が暗くなつてお月様が見えなくなった。

あれ?と思つたら、アラタさんの顔が目の前にあつた……。

え?!?!?!

近っ!!!

と、思っている間にチュツと軽く唇と唇が触れる程度のキスをされた。

「ね？ナジオさんって無防備でしょ？」

アラタさんはそう言って私の横で悪戯が成功した子供のようになっている。

一瞬の出来事に思考が停止状態に陥ってしまった私は、まるで長い間油をさしていない口ポットののようにギツギツと首だけアラタさんの方に向けると、すつと手が伸びてきて頬を撫でられた。

「ナジオさんの頬っぺたって、柔らかくてすべすべしていてとっても気持ちが良いですね。触っても良いですか？」

『触ってもいいですか？』って、

すでに触ってるじゃないですか・・・

なんて、心でツツコミつつ戸惑っている私をよそに、アラタさんは私の頬っぺたをムニムニと親指と人差し指でつまんで、びによおくと引つ張ったり突いたりして遊んでいる。

なんだ？この状況？！

先ほどのアラタさんの行動についていけない私は、どう反応しているのかと戸惑っていると、不意にムニムニつまんでいた指を離して手のひらで両頬を挟まれる。

そして、また先生の顔が近付いてきて、今度は先ほどよりも少し長く唇が重なった。

「ほら、また油断した。」

そう言って、顔を少し話したアラタさんは私の唇をじっと見つめながら指で唇をなぞった。

「俺以外の人に触れさせないで下さいね。」

「・・・はい」

私がそう言うと、満足したようにニッコリ笑って今度は私の背中に手をまわして深く口づけをした。

私はビクッと身をすくめたが、アラタさんに優しく背中を撫でられてようやく肩の力を抜いた。そして、おずおずとアラタさんと同じようにアラタさんの腰に手をまわして受け入れた。

酔いも手伝ってか、

今日のアラタさんはなんだか大胆ですね……。

それにつられた私も……。

再診2・6（後書き）

相手の行動の先を読んで動く事を仕事としているナジオは
経験は少ないが知識は少しあるので、

アラタのちよつとした動きから行動の先を読んで

触れられる事を無意識に警戒して避けていたようです。

（ナジオはビビりで奥手なもので、どうしたらいいのか判らなくて
怖かったんでしょうね（汗））

ならばと、ナジオに行動を悟られないようにフェイントかましたあ
たり、アラタの作戦勝ちなのでしょうか・・・。

小説 迷子の迷子のナジオちゃん ～アラタ目線～

「アラタさんどうしょよぉ～!!」

今日はせっつかくの休日なのに、どうしても外せない予定が入っていてナジオさんと別行動をしていた。

そして、用事を済ませた帰り道、泣きそうな声で携帯にかかってきたナジオさんからの電話が冒頭の一言だった。

一瞬何事かと思ったが、とりあえず話をちゃんと聞かなければと思ひ、焦る気持ちを抑えてナジオさんに話の続きを促す。

「ナジオさん、落ち着いてください。どうしたんですか？」

「アラタさん！私、自分がどこにいるのか判りません！」

「・・・はあ？」

かなり混乱しているナジオさんの発言の意味が全く分からない・・・。

ええ～つと。

取り敢えず俺が落ち着け。

電話から聞こえてくる外の様子から、バイクのエンジン音とマフラー音が聞こえている。

もし転倒してしまっても、ナジオさんなら通行人に手伝ってもらって起こすだろうから、そんな事では電話などしてこないはず。

バイクが転倒してしまって起こせない状況ってわけではないようだ。たぶん、バイクに跨った状態で俺に電話をかけているんだと思う。

そういえば昨日、『明日は一人でツーリングに行く』と、話をしていた。

目的地はバイクに跨った時に決めると言っていたので、今日どこに向かっているのかは知らないが『どこにいるのか判らない』って事は

・・・たぶん、また道に迷ったのだ・・・。

ナジオさんは普段はしつかり者なのに、実は方向音痴である。地図はちゃんと読める。

俺が運転する車の助手席で地図を見ながらナビをしてもらった事があるが、迷うことなく目的地に着いた。

それなのに、一人で知らない道を走ると絶対に道に迷うらしい。不思議な人である。

目的地周辺になると、目的地の手前の方で無性に曲がりたくなるらしい・・・そして、やめておけばいいのに無駄な冒険心が悪い方向に働いて、案の定迷子になるのである。

ちなみに、自分が迷子になっていると自覚し始めると『犬のおまわりさん』の曲をエンドレスで口ずさんでいるらしい・・・。

道路の看板とかで都市名で表記してあれば判るが、町や村の名前などが表記されたら急に位置関係が判らなくなって焦り始めるらしい。焦りだすと自分の行きたい方向がだんだん判らなくなってきて、バイクの小回りを活かして（？）無意味に細い路地とかに入り込んで勝手に抜け出せなくなってしまうらしい。

もう、曲がりたくて、曲がりたくて、しょうがない衝動に駆られるそうだ。

ナジオさんは『甘い誘惑なのです。』と言っていたが、迷子になって困っておいて、どの辺が『甘い』のか意味不明である。

そしてその『甘い誘惑』は、歩いている時でも突如として起こるらしくて、二人で一緒に歩いている時に、ちょっと目を離すと勝手に脇道に入って行って迷子になっている事がよくある。

探し出すのが結構大変なので、最近ではそれを理由に無理やり手を繋いで歩くようになった。

その点だけちょっと嬉しかったりするのだが・・・。

つとー！

今はそんな事より、

迷子のナジオさんをどうするかって事に集中せねばなるまい。

取り敢えず、今の状態の確認から行っていく。

「ええーつと、ナジオさん道に迷ったんですね？」

「私、迷子になったので、犬のお巡りさんにお電話してみました！
！」

「・・・っ！！」

犬のお巡りさん（俺）じゃなくて、

本物のお巡りさんに聞いて下さい！

いつも冷静なナジオさんはたまに天然ボケな発言を連発している時もあるが、基本的に真面目な発言が多い。

しかし、焦って心に余裕がなくなってくると意味不明発言を連発する癖があり、それに伴いわけの判らない行動をとる事もある。要するに、焦れば焦るほど回りが見えなくなっていくのである。

まあ、今回の『犬のお巡りさん』発言は可愛いので保留。

とりあえず、落ち着いて今の状況を説明させなければどうしようもない。

「ナジオさん、どのあたりを走ってたんですか？」

「大きな道を走ってました！」

「・・・そりゃ、そうでしょ。」

ああ、天然恐るべし・・・。

「どっち方面に走ってたとか、看板や目印になるものとか何か・・・

「ここ住宅街で、看板とか目印になるような物かは何もないんですけど・・・あ！あの！！コンビニが見えます！コンビニの近くにいますみたいですよ！！」

住宅街なら住所が書いてあるプレートがそこらじゅうにあるでしょう・・・

それに、コンビニの近くって、全国に何千店舗コンビニにあると思ってるんですか？！

この件については今後の為にも改めてツッコミを入れるようにしよう。

「・・・とりあえず、そのコンビニに行って道を聞いてみて下さい。」

「判りました！コンビニで道を聞くんですね！」

「はい、気をつけてツーリングに行ってきた下さいね。」

よかった、無事解決だ。

と、思ったらオズオズとした声で

「・・・あのお」

と、続けるナジオさん。

「どうかしましたか？」

「あのお、私何処に向かえばいいんでしょうか？」

「はあ？」

この人まだテンパってる？

どんだけ天然なんだ・・・。

「目的地に向かえば良いんじゃないですか？」

「目的地ないです。だから、どうやってコンビニで道を聞けばいいのかが判らなくて・・・」

もうお手上げです……。
俺にどうしろと言うのですか……。

「……」

「……」

「ええ〜っと、とりあえず家に帰るってのはどうですか？」

「家ですか？」

「はい、俺用事が早く終わっただんで、今から帰るところなんです。良かつたらこの後会いませんか？」

「今から遊んでくれるんですか?!」

遊ぶって……子供か!!

でもまあ、この発言も可愛いのでツッコミ入れずに保留。

「はい。会いましょう。俺はナジオさんに会いたいです。」

「私もアラタさんに会いたいです。じゃあ、早く迷子から脱出して、アラタさんに会いに行きますね！」

可愛い!素直なナジオさんはめちゃうくちゃ可愛い!!

俺も荷物を置きに一度家に帰ろうかと思っていたけど、このままナジオさんの部屋の前で待ってしよう。

ああ、俺もバイク買おうかな。

そしたら、方向音痴のナジオさんのナビが出来るし、

なんならタンデム走行でツーリングって最高じゃない?!

このあと、無事に部屋まで戻れたナジオを玄関前で待ち伏せていたアラタによって無事(?)捕獲されました。

小話 迷子の迷子のナジオちゃん くアラタ目線く（後書き）

ナジオの方向音痴炸裂とアラタの心のツツコミ爆発です。

人を頼る事をしないナジオちゃんが唯一アラタさんに頼るのが『道案内』

方向音痴のナジオちゃんにとって、アラタは人間ナビゲーターなのでしょうか？

そして、ツツコミながらもナジオに頼られる事が嬉しいアラタ。

迷子になられて困るけど、そこがまた愛しくてたまらない点だったりするのかも。

小話 意外と「和」な人 ㄱアラタ目線ㄱ

休日の今日、ナジオさんは夕方まで用事があると云う事だったので、用事が終わってから会う約束をしていた。

朝からお昼にかけては家でゆっくり過ごししてから、少し早めに家を出て大型書店で本を物色して過ごした。

少し早め待ち合わせに着いたので、さっき買った本を読みながらナジオさん待とうかとも思ったが、ナジオさんよりも先に俺の方から声をかけたかったので、俺と同じように待ち合わせをしている人たちを観察したりして時間を過ごした。

壁にもたれながらぼーっとしていると、着物を着て風呂敷包みを手にした女性が目に入った。

着物の良し悪しは良く判らないけども、洋服であれば派手な配色だと思ふのだが、着物だからなのか不思議と落ち着いた雰囲気にとまっついていて、若い女性が着るにはピッタリなような初々しさがあった。

姿勢良くしずしずと歩く姿が何とも言えず色っぽくとても目を引く着物姿だった。

ナジオさんがああゆう着物を着たら似合うだろうなあ。

なんてナジオさんが着物を着ている姿を想像していると、その着物の女性が真っ直ぐと自分の方に向かって歩いてきた。

同じ場所で待ち合わせか・・・

それにしても、着物で待ち合わせなんて粋だな。

最近、着物を着る女性をよくみかけるな。

なんて考えていると。

「アラタさん」と、ナジオさんの俺を呼ぶ声が聞こえた。

え？どこから来たの?????

と、声の方向を見ると、『ナジオさんが来たら似合うだろうなあ』
と思っていた着物を着た女性が立っていた。

つまり、俺が見とれていた女性こそナジオさんその人だった。

距離があつたとはいえ、ナジオさんに気付かなかつただなん
て!!

「え?!どうしたんですか!! 着物なんて珍しい!!」

「ちよつと、今日は着物を着ていける場所だったので・・・似合
いませんか?」

着物ばかりに目が行って、その着物の女性がナジオさんだなんて気
が付かなかつた事に動揺して、着物のナジオさんを褒めるのをす
っかり忘れていた!!

しかも、着物姿で上目使いに『似合いませんか?』なんていつも以
上に可愛い!

「とっても良く似合いますよ。まさか、着物で来るとは思わなかつ
たのでちよつとびっくりしました。」

何とか冷静を装ってそういうと、ナジオさんは嬉しそうに笑った。

「これ、私が縫つたんですよ。」

ナジオさんはそう言って着ている着物に触れた。

「え?!この着物を縫つたんですか?」

「ミシンを使わないで、ちゃんと手縫いで縫つたんですよ。それに、
着付けも自分で出来るんですよ。この着物、派手ですが綺麗な柄だ
つたので、普段着用に縫つたんです。可愛いでしょ?」

そう言って、俺の目の前でぐるりと一回りしてポーズングして見せ
た。

・・・可愛過ぎて、鼻血出そう・・・。

取り敢えず、この後の目的地も決まっていけない事だし、立ち話もな
んだからと近くの喫茶店へと移動した。

その移動中。

いつもの調子で歩いていたら、小走りでも必死についてくるナジオさ
んに

「ごめんなさい、あまり歩幅を大きく歩けないので、今日だけはゆ
っくり歩いてくれませんか？」

と控えめにお願いされて、もう心臓が爆発するかと思うぐらい可愛
かった。

そして、思考回路停止寸前の状態でなんとか見つけた喫茶店に入っ
て取り敢えず落ち着く。

ギャップ萌え、マジやべえ・・・。

「凄いですね、着物が縫えるし着れるだなんてナジオさん器用です
ね。」

注文したコーヒーが来たのでそれを飲みながらそう言つと

「今、浴衣を縫ってるんです。縫いあがったら、浴衣デートしまし
ようね。」

なんて、はにかんだ笑顔で言われて俺は一瞬、顔の締りがなくなっ
た・・・。

早く来い、夏！！！！

「いいですね、浴衣デート。 ナジオさんの浴衣姿是非見たいです
！」

「アラタさんは浴衣持ってますか？」

「俺は持つてません。」

俺は今まで着物はおろか浴衣や甚平すら着たことがない。
写真で見た七五三の姿も洋服だった気がする。

「じゃあ、もしよかったら・・・アラタさんの浴衣を私が縫ってもいいですか？」

「えー!!」

「今からなら手縫いでも間に合いますから、一緒に浴衣着てデートしましょ？もちろん、着付けはちゃんと私がしますから。」

「是非!!」

ナジオさんと二人で浴衣デート・・・。

今すぐ来い!夏ううっ!!!!!!!!

「着物で初詣とかも行きたいですね。浴衣の次は着物縫いますね。間に合うかな？」

嬉しそうに話しているナジオさんが眩しくて、もう正面から見れませんが!!!!

やべえ、妄想がとまらねえ!!!!!!

「・・・さん?・・・アラタさん?」

妄想が爆発してしまって、ナジオさんの話を全く聞いていなかった俺。

「あ、ごめん。なに?」

「なに?って・・・なんかブツブツと独り言を言っていましたよ?」

「え?!」

「白いモワモワした何とか・・・とか、草履が何とかって・・・。」

「俺、そんな事つぶやいてた?」

「ええ・・・。」

「ごめん。で、何の話だったっけ?」

俺はあわててナジオさんの話に耳を傾ける。

「浴衣の柄は私を選んでいいですか？つて、聞いたんです。」

「ああ、お任せします。」

「判りました。じゃあ、今度採寸させて下さいね。」

「はい。出来上がりが楽しみです。」

「うふふ、アラタさんの為にひと針ひと針丁寧に思いを込めて作りますね。」

「　　っ！！！！！！！！」

着物姿のナジオさんはヤバイぐらい色っぽくて可愛い！！

この後、ナジオさんのいつもの10倍は出てるんじゃないだろうか？！と思言えるほどの色気と愛らしさに魂が抜けそうになるのを堪えるのに必死になったのはここだけの話である。

小話 意外と「和」な人 〵アラタ目線〵（後書き）

もう、アラタはナジオにメロメロです（笑）

P M T C ・ i (前書き)

時間設定は再診2 - 6の次の日です。

酔った勢いって凄いね？

冷静になった時のあの恥ずかしさったらもう！！

アラタ先生に家の前まで送って貰って一人になってからのあの悶絶。ふとした時に思い出して、真っ赤になってジタバタと暴れている姿。誰にも見られなくて良かった。独り暮らし万歳！！と、本気で思った。

キスされるよりも、それを思い出して赤面してる自分に対して悶絶。

仕事で顔を合わせた時にどんな顔して合えばいいの！！

なんて、自分でも意外な乙女な考えにドブプリはまりながらも出勤し、ドキドキしながら診療室に向かうといつも通りのアラタ先生に普通に挨拶された。。。

アラタ先生は通常営業が出来るんですね！！

ちくしょう！！

思い出してジタバタしていた私は

未熟者って事ですね！

自分と先生の恋愛偏差値が見えたような気がしてちょっと凹んだ。。。

まあ、仕事は仕事。

プライベートはプライベート。

タイムカードを押した瞬間から

仕事モードに気持ちを切り替えて今日も一日頑張ります！！

午前中の業務が終了した時に、サツキ先生に了承を得て、休憩時間に機材をお借りして鏡を見ながら自分の歯の歯面清掃しめんせいそうをしていた。それを見た後輩のユキに「ナジオさんって器用ですね。」なんて言われた……。

そう？やれば出来るもんだよ？

職業柄、毎食後歯磨きはキッチンとされているのだが、お茶や紅茶を飲むのが好きなので、着色ステイン（お茶・コーヒー・紅茶・赤ワインなどを飲み続けていると歯につく茶渋のような物の事）が前歯などにつきやすいので、定期的にこうやって機械をお借りして自分で除去している。

そこへ、少し早い時間にも関わらずアラタ先生が診療室に入ってきた。

「ナジオさん、器用ですね？ よかったら俺がPMTC（プロフェッショナル・メカニカル・トゥース・クリーニングの略）をしまし
ようか？」

と、言ってくれたので、お言葉に甘えてしてもらったことにした。

さすがに自分でやるには手の向きなどの限界があるのでホント助かる。

「ナジオさんって、治療痕ちりょうこんがレ充じゅう（レジン充填の略で白い樹脂を虫歯などで削った部位に詰める治療の事）とシーラント（虫歯御坊の為に、奥歯の溝の深い部分に透明や乳白色の樹脂を充填して虫歯を予防する治療法）しかないんですね！」

となぜか大興奮のアラタ先生。

基本的に、痛みや不具合を感じて来院される患者さんの口の中を毎日見ているので、治療痕が少なく補綴物ほてつぶつ（おもに金属で作られる、

歯の欠損部分を補うための詰め物）が一つも入っていない私のような患者さんが来院される事は結構少ない。

皆、痛い時にしか来院しないからね・・・。

「でも、歯周病に気をつけて下さいね。」
私は口を開けたままの状態なので、「あー」と、取り敢えず返事をしておく。

先生

釈迦に説法ですよ・・・。

まずは下顎前歯舌側部分の隣接面に少しだけ付着している歯石をハンドスクレーパー（歯石をとる器具）でちよいちよいつと除去してく

れた。
今度は私が準備しておいたコントラ・アングル・ハンドピースという低速回転する器具に持ち替えて、コントラの先端にロビンソンプラシと呼ばれる小さなブラシをつけ、研磨剤2種類使い分けて（粗い・細かい）を使って私の歯を磨きあげ、ロビンソンプラシを外して今度はラバーカップと呼ばれるシリコンで作られた器具をコントラの先につけ替えて仕上げをすると、歯面がツルツルになってとてもスッキリした。

自分で取るのも簡単だけど

人に取ってもらおうと気持ちがいい！

アラタ先生にやって貰ったから余計に？！

つつつか、結構丁寧に念入りにされてる気がするのには気のせい？

私は綺麗になった自分の口腔内に満足して嗽をする。

「アラタ先生ありがとうございました。良かったです、今度先生のPTCしますから声かけてくださいね。」

「PTCですか？」

「はい。PTCです。なんなら、ハンドスケーラーでのスケーリングもセットで。」

私がそういうと意味深な笑い方をして

「是非お願いします。あと、もう一回だけチェア倒しますよ。」と、言つて椅子を倒した。

これ以上の処置なんてあつたっけ？と思いつながらも素直に椅子にもたれると、アラタさんが何やらゴソゴソと引き出しから取り出して丸めた綿花につけている。

私は何をされるのかと先生を見上げると、

「口は閉じてくださいね。」

と言つて、私の唇になにやらぬるぬるするものを薄くつけていく。

・・・もしかして・・・ワセリン？

そして、つけ終わると「椅子起こしますね。」と言つて椅子を起こしてくれた。

「・・・もしかして、ワセリンですか？」

「はい、ちよつと口唇が荒れてたので。ワセリン塗布しました。今度はちゃんとした薬用リップ買ってきて塗布してあげますね。」と、笑顔全開で言われた・・・。

ええ・・・つと、

あの・・・

なんだか、いろいろとすみません・・・。

今後、維持管理に努めます・・・。

リップぐらい自分で塗れるので、

嬉しそうに塗布するって言わないで下さい。

P M T C ・ i (後書き)

補足として

P M T C (P r o f e s s i o n a l M e c h a n i c a l T
o o t h C l e a n i n g の略) とは

歯科医師や歯科衛生士が専門の器具を使用して行う歯面清掃の事。

P T C (P r o f e s s i o n a l T o o t h C l e a n i n
g の略) は

歯科医師や歯科衛生士が歯ブラシ・デンタルフロスなどを使用して
行う歯面清掃の事です。

11月12日

うお！！ 補足にタイプミス発見
こっそり訂正。

P M T C ・ 2 (前書き)

今回は前半器具の説明が多いので読みづらいかもしれません・・・。

昼休憩に入るまでには少し時間があつたので、この時間を利用して器具のメンテナンスをしようかと、私はプラスチックテストステイク（カッティングテストターとも云う）という名前を言えばすぐく仰々しいが、簡単に言えば単なるプラスチックの細い棒で、各チエアーに配置された私たち歯科衛生士の商売道具の一つと言えるスクレーラーの切れ味を一つ一つ丁寧に確認していった。

ハンドスクレーラーと呼ばれる器具は、歯石を除去するスクレーリングと呼ばれる治療などに利用される小さな刃物のような器具で、使用部位によって使い分ける為にたくさん種類が存在する。

歯肉（歯茎の事）より上に付着した歯石を除去する時に使用されるシックルスクレーラーと呼ばれる鎌の形をしたスクレーラーと、歯肉より下の歯の根っ子に近い部分に付着した歯石を除去するためのキュレットスクレーラー（鋭匙型）と呼ばれる頸部の部分が歯の角度に添えるようにいろいろな角度に曲がったスクレーラーなどがある。

それを一本一本丁寧に切れ味を確認していき、切れ味の悪くなったスクレーラーを研いで、昼一番からでも使えるように消毒しておくのである。

このスクレーラーを研ぐ事をシャープニングと呼ぶ。

シャープニングにはシャープニングオイル（潤滑油）とシャープニングストーンと呼ばれる砥石を用いて手で刃の角度に沿わせて丁寧に研いでいくのである。

結構、面倒な作業ではあるが、ナジオはこの作業が大好きであった。

「お？ナジオ、シャープニングしてくれてるの？」

そう言つて声をかけて来たのは先輩衛生士のケイコさんである。

「助かるわぁー。私シャープニングが苦手だからあまりやりたくないんだよね。」

このシャープニングはさつき歯科では衛生士の仕事である。

どこの歯科医院でもそうかもしれない・・・一番の商売道具だから、当たり前と言えはあたりまえなだけだ。

先日、すっかり忘れていてサツキ先生の命によってアラタ先生がさせられていたが、残念な結果になっており、あまり綺麗な仕上がりでなかったため、ナジオが出来るだけ進んでするようにしている。
(自分の為に)

そこに、治療を終えたコウイチ先生も現れた。

「ナジオさんシャープニング？ストーンは何使ってるの？」

シャープニングなんてドクターがするものじゃないと思っているコウイチ先生らしい発言と言える視点の発言である。

「これは、アーカンソーストーンです。」

「アルカンサス？」

「・・・言い方の違いでしょ？私はアーカンソーで習いました。」

「僕は、アルカンサスストーン。ケイコさんは？」

「アーカンソー」

「ツチ」

今、ツチって舌打ちされた！！

コウイチ先生は医療器具ではよくある「同じものでも呼び方が違う」物の多数決を取りたかったのだろうか？

ナジオにしたら「春菊」と「菊菜」の違いぐらいにしか感じない些細な事をいつもコウイチ先生はツツコンでくるのである。

あんなの、方言か標準語か位の違いしかないっつうの！！

意味が通じたらそれで良いんだよ！！

さっきの舌うち、少数派に自分が分類されたから「ツチ」って意味だったのかも。

コウイチ先生は少数派より多数派好きなのかもしれない・・・。

「じゃあ、宜しくねえ〜。」

と言いながらケイコさんは他の作業をしにその場を離れた。

それに伴い（？）コウイチ先生もその場を離れた。

そこへ入れ替わるように診療を終えたらしいアラタ先生が現れた。

「シャープニングですか？研ぎ方教えてください。」

道具よりも技術を知ろうとするのはアラタ先生らしい発言。

つて、云うか。

前回のシャープニングを誰かにダメだしされたんだろうね・・・あれ修正するの大変だったもん。

「教えるって事のものでもないのですが・・・力を入れずに、一定の角度で動かしていくだけですよ。」

そう言つて、アラタ先生の見えやすいように体の角度を変えて研いでいく。

研ぐ前の鈍になったスケーラーとテストスティックを渡して、どの程度鈍になっているのかを確認してもらってからシャープニングして、もう一度テストスティックでカッティングテストをもらう。

「凄い！そんな簡単にシャープニング出来るんですね！コツとかがあります？」

「コツですか？・・・深追いしない事でしょうか・・・？」

「深追いですか？」

「はい、もっと・・・もっと・・・と思つたら、だんだんと力が入つて角度が変わつていってしまいますから。」

「なるほど」

そう言つて、真剣にシャープニングが終わったスケーラーの刃の部分を見ている。

それにしても、人がシャープニングしている光景なんて楽しくないだろうに、アラタ先生は私がシャープニングしている手元を興味津々に覗き込んでくる。

アラタ先生って勉強家？

そんな事を思いながらさっさと作業を終わらせて、シャープニングしたスケーラーを消毒液につけた。

「アラタ先生、シャープニングしてるのを見てても楽しくなかったでしょ？」

私がさつきチラツと思った事を口にする

「そんなことないですよ？勉強になるし、ナジオさんと一緒ならどんな事でも楽しいですから。」
と、満面の笑みで返事された。

サラツと職場でそんな事を言うな！！！！！！

思わず赤面した私はうつむいてその場を急いで離れた。

あの人のあの発言は狙ってるのでしょうか？
誰か教えてください。

P M T C ・ 2 (後書き)

はい！ 狙ってると思います！！

今日はさつき歯科の飲み会。

年に数回だけ『親睦会』と言う名の飲み会が開催される。

私は、お酒を飲むのは嫌いではないのだが、職場の人間と職場以外で一緒にいる事があまり嬉しくないというかなんというか……。毎回、微妙な心境で強制参加させられている。

宴会メニューを最初から注文していたようで飲み物以外の注文をする事無く全員で雑談をしながらお酒を口にしていた。

宴会になると自然とドクターチームとベテランチームと下っ端チームに分かれて雑談する事が多い。

私が座っている席はもちろん先輩衛生士のケイコと後輩歯科助手のユキの下っ端チームである。

ケイコは下っ端扱いされているが年齢はアラタ先生よりも上で、私とは結構年齢が離れている。

どちらかと言うと、ベテランチームに所属しても全く問題なのだが、ハルミさんとリサさんと同じ枠組みに入るのがどうしても嫌らしく、下っ端の扱いを喜んであまんじているのである。

私としてはアラタ先生の隣の席に座りたかったのだが、なぜかいつも決まったチーム分けがされているので、今日に限って違うチームに行くのは怪しすぎるので止めておく。

私は先ほどから会話に参加せず二人の聞き役に徹していた。いつもの事だが……。

「この間彼氏がさあ、車で出かけた時に、駐車場で『なんかいい切り返すの?!』って思うぐらい、切り返ししながらなんとか駐車スペースに入れた時は、『運転変わるうか?』って喉元まで言葉が出かかっちゃって大変だったわ!」

「うわあ、1発もしくは2発ぐらいに入れて欲しいよね。」

「そうですね。」

「そうなの！それなのに『自分は車の運転が上手い！』って勘違いしてるらしくって。」

「いるいるそう云う奴！」

「そうですね。」

「もう、ちよつと遅い車とか見つけると煽っちゃって」

「危ないよ！止めさせないと事故るよ。」

「そうですね。」

「そうですねですよ！何回もお願いしてるのに。『ちんたら走ってる奴が悪い！』って云うんですよ！」

「免許取り上げてやりたい！！」

「そうですね。」

「・・・ナジオ、さっきから『そうですね。』しか言ってないけど、話に参加する気あるの？」

「え?!」

ユキの話に適当に返事をしていたらケイコさんに怒られた・・・。

「ありますよ。車の運転でしょ？私結構上手いんですよ？」

「あんた、バイクの免許もってたよね？車も運転するの？」

「はい。ゴールドです。」

「へえ、運転しててゴールドって珍しいね。」

「え・・・珍しいんですか？」

「私の周りにはペーパーゴールドしかいないわよ。」

ペーパーゴールドって事は、免許証は高価な身分証明書って事ですか・・・？

なんて思いつつそこはツッコまずに流す。

「そういえばさ、最近ナジオとアラタ先生よくつるんでるよね？」

と、いきなりケイコが話題を変えてきた。

ドッキン！！と内心焦ったが、片眉をピクリと上げた程度でなんとか動揺を抑え込んだ。

「そういえば、よく二人で話してますよね。」

と、ユキも参戦してくる。

皆好きだよね、

誰かと誰かが仲が良いとか悪いとかゆうネタ……。

「そう言えば、今日、シャープニング講習してたしね。」

「ケイコさんとコウイチ先生も居たのに逃げましたよね?」

「人聞き悪いなあ。一つの作業に何人も要らないと思って他の作業に云っただけなのに。」

コキのネタ振りに私の刺を含んだ一言に遠い目をするケイコさん。

よし、これでこのネタは封印した!

そう言っつて話題を変えようとしたら、自分の名前が登場した事を耳ざとく聞こえたらしいコウイチ先生が「呼んだ?」と、遠くから会話に参戦して来た。

参戦してくんな!!

私の心の叫びは華麗にスルーされて、なぜか全員が私たちの会話に参戦して来た。

「何の話?」

興味はなさそうだけど、取り敢えず?って感じで聞いてきたリサさん。

「今日、スケーラーのシャープニングしてたんですけど、コウイチ先生は逃げてアラタ先生だけナジオがシャープニングしてるのを見学してたって話です。」

私が恐れていた『アラタ先生とよくつるんでいる』ネタからのスタートじゃなくて良かったと、内心胸をなでおろして黙って事の成り行きを見守っている事にする。

「ああナジオ、シャープニング上手いもんね。」

サツキ先生がそう言う

「先日のアラタ先生のシャープニングも見事に修正してましたもんね。」

と、若干アラタ先生に対して刺のある云い方で賛同してくるハルミさん。

私を上げて アラタ先生落としてる?!

サラッと、恥ってくるあたりこの人怖い・・・。

それに対して、あはははと乾いた笑いでスルーしているアラタ先生。「ナジオは備品とか器具の手入れとか積極的にしてくれるよね。材料とかもちゃんとチェックしてくれてるから、必要な時に使えないって事も少なくて助かってるわ。」

サツキ先生に手放して褒められて私は嬉しくて顔を赤らめた。

「そうですね。私も助かってます。」

と、ハルミさんが賛同してくれる。

きゃー!!!嬉しい!日ごろ怒られまくってる分

この一言で今まで頑張ってた来た甲斐が合ったってもんだよ!!!

自分にも人にも厳しいハルミさんに褒められる日が来るとは思っていなかったなので、私は嬉しくて思わず顔をほころばせてた。

「で?僕はどこに出てるの?」

シャープニングの話題の時点で自分の名前が出来てきた意味が判らなかつたらしく、空気を読めないコウイチ先生が聞いてくる。

「究極の選択で、コウイチ先生とアラタ先生。選ぶならどっち?って話をしてたんです。」

と、ケイコさん。

してないよね?!そんな話。

それ、先輩を差し置いて後輩の私が褒められたから意趣返ししてません?!

「へえ〜。そうなんだ。で、ナジオさんどっち? やっぱり僕?」

自分が選ばれる物だと確信しているのかコウイチ先生が聞いてくる。

「迷うことなくアラタ先生でしょ? コウイチ先生『日ごろの行い』
って言葉知ってます?」

私が冷たくそういうと、コウイチ先生が子供のように『ええ〜』と
か言いながら他のスタッフにも聞いている。

ちなみに、ユキとケイコさんはアラタ先生。

究極の選択だつて言ってるのに・・・リサさんは両者以外の選択を
希望。

ハルミさんとサツキ先生に至ってはノーコメントを貫き通した。

結果は想定内だったらしくこちらの予想以上のダメージはないらしく。
く。

へラへラと「やっぱり〜」と笑いながらも、

「まあ、ナジオさんと赤松は仲良いからよしとして、他全員とは思
わなかった。」

と、さりげなく爆弾発言を落とすやがった・・・。

P M T C ・ 3 (後書き)

予想以上に長くなりそうだったので、途中で切りました。
すみません。続きは次回です。

「やっぱり二人って仲良いよね?!」

コウイチ先生のサラツとした小さな爆弾発言をしっかりキャッチして話を広げ長としているケイコさん……。

こうなってくると話がややこしくなってくるので、変に否定はしない。

ここでジタバタ暴れると、逆に怪しまれるだけだし。

「そうですね、さつき歯科の中では一番話が合うかもしれません。」

私が冷静にそう言うと、アラタ先生もニッコリ笑って頷いている。

「話が合うって、いつもどんな話してるの?」

なおも食いついてくるケイコさん

「バイクの話とか、車もの話とか乗り物についての話が多いですよ。」

私が色気も何も合ったもんじゃないがまぎれもない事実を話すと。

「……確かに、この間“爆音”がどーのこーの言ってたわね……」

よもや、そこまで色気のない話をしていとは思っていなかったらしくて若干引き気味に返事をかえすケイコさん。

「でも、良く一緒に帰ってますよね?」

これまたサラツと参戦してくるユキ。

「一緒に帰るって、たまたま玄関先で一緒になって駅まで一緒に行く事もありますよ。」

サラツと流そうとしているところに

「僕はないよ?」

と参戦してくるコウイチ先生。

「……先生、日ごろの行いって言葉知ってます?」
ため息交じりにそう言った私に

「ナジオさんさっきからそればかり。」

と、つまらないといった感じで答えるコウイチ先生。

「私がコウイチ先生との会話を毎回楽しんでいても思っていたんですか？」

「思ってた。」

「・・・ありえませんか。」

「そうなの？」

「今頃気づいたんですか？」

そう言った私に、ニコニコと笑いながらコウイチ先生が、

「大丈夫ですよ。ナジオさんだけにわざと言ってますから！」

と、私個人的にとんでもなくドデカイ爆弾を投下しやがった・・・。

私にだけって・・・ふざけてる・・・こいつマジふざけてやがる！！

「コウイチ先生趣味悪う！女の子にセクハラ発言わざとしてるなんて！！これはナジオに訴えられても文句は言えませんよあゝ」

「そうですね！コウイチ先生、ナジオさんに謝って下さい！！」

「鬼追ドクター、ナジオさんにセクハラ発言してるんですか？」

「鬼追先生・・・」

「最低」

「最低ですよね」

一瞬キレて暴れてやるうかと思ったが、私が動く前にケイコさん・ユキ・サツキ先生・ハルミさん・リサさん・アラタ先生と次々に投げかけられる冷たい視線と言葉に次第に顔色を悪くしていくコウイチ先生。

まさに四面楚歌。

女性陣は女性目線での冷ややかな目線。

アラタ先生も『俺は女性の味方です』的な顔をして冷ややかな目線

をコウイチ先生に向けている。
そのスタッフ全員からの冷たい視線を一身に受けているコウイチ先生。

なんだかな・・・。

日ごろの事を思うと、自業自得だから助けてあげる気にはなれない。しかし、ここまで集中劫火を受けてるのを目の当たりにしていると、ちよつと・・・。

『もつとやれやれ!!』つて、煽る気にはなれなくて・・・。
コウイチ先生もこれを機に懲りて止めてくれれば・・・と思ってコウイチ先生をチラッと見たら。

・・・笑つてやがる・・・。

私が目にしたコウイチ先生は笑つてた。
それはもう嬉しそうに・・・。

うすうす感じてたけど、コウイチ先生・・・M?!。
いや、ドM?!!!!

私は若干引きながらコウイチ先生の微かな笑顔を見て思った。
そつえば、私がいつも先生に云い返すと、嬉しそうに笑つてたわ・・・。

これ以上先生を喜ばせるのも癪なのでさっさと皆を止めるようと。
「皆、止めましょう・・・コウイチ先生が喜んでるから・・・」
私がボソツと言つと、コウイチ先生を責めていた皆が一瞬で止まった・・・。

そして、コウイチ先生の顔を見て全員がドン引きした。

「・・・気持ち悪い・・・」

コウイチ先生の笑顔に思わず声に出してしまったユキ。

うん。判るその気持ち悪さ。

「なんで止めるのお〜。」

と、ニコニコ笑うコウイチ先生に、全員「これ以上引けません！」
つてぐらいにドン引きしてる。

「今気付いたんですけど。コウイチ先生は私がガンガンツッコミ入
れてるのを楽しんでましたよね？」

「あれ？バレちゃった？」

絶対確信犯だと思ってたけど、こんな意図があったとは……

「お酒の席とはいえ、そんなカミングアウトいりませんから。」
私が冷たくそう言う。

「ナジオさんのそういう冷たいところ好きなんだよね〜」

やばい、先生のMスイッチを無意識に押ししてしまったらしい……

「はいはい、こうゆうプレーは二人で勝手にやってください。」
パンパンと手を叩きながら、話を強制終了させたハルミさん。

立ち直りが早く仲裁して下さるのはありがたいのですが、
私とコウイチ先生をひと括りにした挙句

“プレー”って言わないでください……。

「じゃあ、今後二人のプレーは黙認って事で。」

「サツキ先生！黙認しないで止めてください！！」

「ナジオ。自力で頑張れ！」

私の必死の訴えをサムズアップで答えたケイコさん。

そして、また違う話へと話題が変わっていく。

それでも「黙認しないで！」と訴えたら、その話は終わったのよ？
なんなら、コウイチ先生の横の席になれるように替わりましょうか
？とまで言われて黙った。

今回の飲み会でなぜかコウイチ先生のセクハラ発言は私限定で認め
られ、嫌なら自力回避をせよと肩を叩かれた私……。

そして、助けてくれない恨みを込めてアラタ先生を見ると苦笑いを
浮かべて目を逸らされた……。

四面楚歌は私の方ですか？

P M T C ・ 4 (後書き)

コウイチ先生の変態!!

って、変態にさせたのは作者ですがね(苦笑)

「女王様、ドリンクのメニューとって」

「女王様、これ美味しいよ。」

「女王様、この器下げて貰って」

うるさ〜い!!!!!!

コウイチ先生のカミングアウトの後から、いつもと変わらない口調で皆が私の事を『女王様』と呼び始めた……。

しかも、『女王様』と呼びながらこき使われているには納得いかない!!!

それに、諸悪の根源であるコウイチ先生は『コウイチ先生』のままだなんて、もつと納得がいかない!!!

つて、言っても、先生に「おい、DM!」なんて呼びかける訳にかないもんね……。

取り敢えず、私に出来る事は
飲む事!

ひたすら、飲む事!!!

ご飯も食べつつ、私は飲み続けた!

コース料理が終わりそろそろ1次会を終了して2次会に移ろうかと云う頃には、結構な量を飲んでいたので。

ハッキリ言つて、やけ酒ね。

「2次会に参加する人は?」

と、リサさんが声をかけると、私とアラタさん以外の全員が手を上げた。

「俺、明日用事があるんでこれで帰ります。ついでに駅までナジオさん送つて帰ります。」

そう言つて、ふらふらの私を支えてくれた。

「そうね、その様子じゃ女王様は2次会参加無理だもんね。さつさと家に帰って寝なさい。」

リサさんはそう言うのと、さつさと皆を連れて2次会の店へと移動を始めた。

「お疲れさまでした。」

アラタ先生は皆の背中に声をかけてから私を伴って駅に向かって歩く。

皆が遠くまで行った頃を見計らった私は、アラタ先生と自分の体の間に手を置いて押し出すように距離を取った。

「あ〜ら〜た〜さあ〜ん〜!!」

小さな声ながらも地を這うような低温でアラタさんと呼んで睨みつける。

「はい。」

アラタさんも私があれぐらいのお酒で酔っ払わない事を知っている。なので、逃げる事無く静かに返事を返したのだ。

「なんで助けってくれなかったんですか?! おかげでしばらく『女王様』って呼ばれるじゃないですか!!」

私が声をひそめながらもアラタさんに抗議をすると、あらたさんは笑いながら

「あそこで俺が助けた方がもっと変な方向に話が飛んでたと思いませんよ?」

「……いや、絶対あの時保身に走ったでしょ?!」

「……バレましたか。」

「目をそらした時点でバレてますから!!」

「ナジオさんだったら、大丈夫だと思ったので信頼して黙ってたんですよ。それに、その方が面白そうだったので。」

「……怨んでいいですか?」

「……ごめんなさい。」

小さく謝ったアラタさんに私は下から見上げるようにみて

「今度は助けて下さいね。」

と、おねだりポーズ付きで言う

「善処します……」

と、目をそらせて答えるアラタさん。

「……あくまでも言質とらせないつもりですか？巻き添え食らわせますよ？」

「マジですみませんでした。」

先ほどの小さな爆弾が、あれほどまでに被害が拡大するとは思っていなかった。

次回、このような事があれば有無を言わず巻きこんでやる！と心の中で小さく誓い。

駅までいつも以上に離れて歩いた。

二人が知らない後方では、実は2次会に参加すると言っていた全員が二人の事を観察していた……。

もし二人が付き合っているとしたら、二人つきりにしたらいちやくんじゃないか？

という事でこっさり後ろから付けてきて、決定的瞬間を押さえてやるうとしたら、いちやくどこるか殺伐とした雰囲気醸し出す二人。

しかも、二人の距離が恋人の距離ではなく、知り合い以上友達未満の微妙な距離を保っている。

さつき歯科内で渦巻いていたナジオ&アラタペアの「二人のお付き合いしているのでは？疑惑」はなぜか晴らされた。

ナジオはコウイチ先生にとっては『女王様』、アラタ先生にとっては『マニア仲間』というポジションがスタッフ全員の中の心の中に確立されたのであった……。

小話 いつもと違う彼女の姿 ～アラタ目線～

今日は平日だがナジオさんと俺はローテーションの都合上仕事はお休み。

せっかく平日の人が少ない時間帯に出かけようと云う事でいつもの場所で待ち合わせ中。

ナジオさんが、午前中はどうしても用事があつて実家に行かなければならないと事だったので、昼一からの待ち合わせとなった。

前回は鼻血物の愛らしい着物を披露してくれたので、今回はどんな装いで登場してくれるのかとちよつと楽しみだつたりする。

しかし、いつも仕事に来る時の服装はカジュアルなパンツスタイルで、デートのときでもキレイ目なパンツスタイルが多い。

たまには白衣以外のスカートまたはワンピース姿などを見てみたいと云うのも内心あつたりする。

今日はどんなナジオさんが見れるのかとドキドキしながらまたもや約束の時間より早めに付いて待つていた。

ボツと、道行く人を眺めていると、目の端に黒を基調とした中に真っ赤なミニスカートが目を引きパンクな服装の女性が目に付く。まさかなあゝ。

と思いつつもその女性を観察していると、その女性は俯き加減でこちらに向かつて足早に近づいてくる。

丈の短い革ジャンに黒いロングTシャツに胸のあたりにスカル模様がキラキラ輝いている。

入り首には細いマフラーのような物を巻き・真っ赤なミニスカート腰回りにはロングチェーンがジャラジャラとぶら下がり、黒いストッキングがすらりと伸びた長い脚を包んでいる。

“何十cm?!”と思う程の恐ろしく厚底な黒の編上げのブーツを履き。

頭にはどうやってくつつけているのか小さな帽子を斜めにちょこん

と乗せ、耳にはルーズリーフのフォルダーの様にジャラジャラとピ
アスとチェーンが沢山付いている。
あんな厚底ブーツでよくもあんな速度で歩ける物だと感心してい
たら、その女性は迷うことなく俺の方に向かって歩いてくる。

・・・まさか・・・。

と思って見つめていると、女性は泣きそうな表情をしながら真っ直
ぐに俺を見つめている。

・・・やっぱり・・・

和服から真逆すぎるファッションだろ?!

「ええ〜つと、こんにちは。」

「・・・こんにちは」

取り敢えずと言った感じで挨拶をしながらも真っ赤な顔をして俯く
ナジオさん。

いつもナチュラルメイクなのに対して、今日はまつ毛がクルンとカ
ールして、いつも以上にボリュームアップさればっちりアイライン
も入り、目の周りもブラウンとゴールドのグラデーションが見事で
印象的な目力があり、ふっくらとした唇に濃い赤が艶めいている。
いつも見ている爽やかなナジオさんに比べれば、ハッキリ言って“
濃い”メイクなのだが不思議とケバクなくとつても似合っていた。
いや、逆にこの方が全体的に色っぽくていつも以上に綺麗だと思っ
た。とても似合っていてめちゃくちゃ可愛いんですが、その様子では
やっぱりツツコんだ方がいいですか?」

「・・・流される方が辛いです。」

と俯いたまま顔を上げてくれない。

「事情は・・・どこかで落ち着いてしませんか?」

俺がそう言つと、

「出来れば、一度着替えに部屋に戻りたいのですが……」
と小さく自己主張してきたが、めったに見れないスタイルのナジオ
さんをもう少し堪能したい思いが強くて

「取り敢えず、どこかで落ち着きましよう。それからでも遅くはな
いですよ?」

と、俯くナジオさんの手を引いて近くの喫茶店に入った。

「ナジオさん、本当によく似合ってますよ?」

「……同情でしたら結構です。」

「本心ですよ、ナジオさんは何を着ても似合いますね。」

まあ、取り敢えず事情を聞かせてください。」

「それが……」

そいつで語りだし内容はこういうことだった。

今日はナジオさんのお姉さんに用事があつて朝からお姉さんの家
に出かけていたとの事、そして待ち合わせがあるからと家を出よう
とした時に、お姉さんがあやまって(……)ナジオさんの服
にお茶を零してしまったらしい。

慌てたお姉さんが取り敢えず、そのままでは外に出せないから、こ
の服を来て行きなさいと差し出されたのが、甥っ子のリョウセイ君
とジンセイ君とお姉さんの服だったらしい。

あれよあれよと言う間に脱がされ、着替えさせられ、問答無用で化
粧と髪飾りまで施され、『この服装にはこの靴よね』と、ルンル
ンで靴まで履かされたあげく、姿を確認する暇も与えられず、『待
ち合わせに遅れるわよ』と笑顔で家から蹴り出されたらしい……。
家に帰って着替えようにも時間がなく、俺に連絡しよう携帯を取
り出すと携帯のバッテリーは事前に抜かれていたらしい……。
俺を長く待たせる訳にはいかないからおと、仕方がなくこのままの
姿でここまで来たらしい。

完全にお姉さんに弄ばれているナジオさんに何と良いてあげたら
いいのかわ直悩んでしまった。

ただ一つ言える事は、ナジオさんの綺麗な脚線美を見れて『お姉さ

んグツジヨブ』と心の中でサムズアップしたって事だろうか・・・。

「もう、恥ずかしくって死んでしまいそうです！」

と、訴えるナジオに笑顔で

「大丈夫。人間、羞恥心では死ねないんですよ？」

と、笑顔でかわし続け、真っ赤になって恥じらうナジオの表情を心行くまで堪能したアラタであった。

お姉さん、次回を楽しみにしております。

小話 いつもと違う彼女の姿 ～アラタ目線～（後書き）

ちなみに、

ロンTと編みあげブーツはジンセイ

革ジャンとルーズリーフ風のイアリング等のアクセサリーはリョウセイ

スカートとストッキングはネエ

帽子とマフラーは人形にしていた奴から構成されております。

小話 ある日の休憩時間・2 くアラタ目線く

今日は鬼追先生が休みの日なので一人で昼食をとって診療室に戻り、更衣室で着替えをすませて休憩室に入ると、女性陣が山のように積まれた雑誌を個々にパラパラとめくりながら、頭を突き合わせながら何やら話し合っていた。

少し近づいてみると、話の輪の中心は衛生士3人らしい事が判った。

「ありましたか？」

「あつただけけど、見えない。」

「これもダメだわ。」

なんて会話が聞こえてくる。

よく見ると、テーブルの上には紙と顎模型が置かれており、ナジオさんとハルミさんが顎模型を見ながら何やら紙に書き込んでいた。

俺が一番近くに座っていた助手のユキさんに

「何かあつたの？」

と、尋ねると、

「ああ、今度、上顎くわがくちの3から3（左の糸切り歯から右の糸切り歯までの6本の歯の事）までメタルボンド（陶材焼付鑄造冠と呼ばれる中身は金属で外側の部分のみセラミック（陶器）を張り付けた差し歯の事）を入れる事になったんですけど、患者さんが『某アイドルの歯並びみたいにしたい』って言われたそうなんですよ。」

それで、そのアイドルの歯並びがどんなものかとみんなで雑誌を調べて歯並びを見ようとしたら、笑顔の写真はたくさんあるんだけど、歯が見える笑顔の写真が1枚もないんですよ。それで、さっきからハルミさんとケイコさんとナジオさんが三人で頭突き合わせて悩んでるんですよ。」

と、若干遠い目をして教えてくれた。

基本的に元々の歯並びや形に近いものを入れる。

それが一番自然に見えて違和感がないから。

しかし、なかには非常に歯並びが悪くて、それを長年気にされている患者さんがいらつしゃって、希望されればポンティック（樹脂で作った仮の歯）で調節を繰り返してして、出来る限り気に入る形の歯並びにしてメタルポンドを作る場合がある。

ただし、歯の根っこの向きを変えることは出来ないもので、絶対に希望通りの形になるとは限らないが、出来る限りの希望に沿えるようには努力している。

（本気で綺麗な歯並びにしたければ歯列矯正を進めるしかない。）
それで、今回の患者さんの希望が『某アイドルのような歯並びにしたい。』と云う事だったらしい。

「今度、ライブビデオかなんかレンタルしてきて観ましようか・・・」

「雑誌や写真集で判らないんだつたらそれしかないわね・・・。」

顎模型を片手にデッサンをしながら真面目なナジオさんとハルミさんが真剣に悩んでる横で、『もう諦めましょうよ』と云ったオーラーを必死で隠しているケイコさん・・・。

「なんだか大変ですね」

「私たちには判らない話ですよ。」

ユキさんのため息をつきながらパラパラと雑誌をめくって某アイドルを探す“ふり”をし、リサさんに至っては普通に雑誌を読んでいる・・・。

なんだろう、この仕事に対する温度差・・・。

今日もコウイチ先生のアシストについている。

今の治療内容はデンチャー（入れ歯の事）の調整。

入れ歯は樹脂素材で出来ている為、摩耗しやすいのでこまめに調整をしていかねば上手に噛めなかったり、痛みを伴う場合が出てくる。そんなデンチャー調整は、患者さんが訴えている症状に対して的確に処置するために、意味を理解するのが難しい場合がある。

それはなぜかと云うと、患者さん自身が感じる事を言葉で伝える事が難しいから。

今、貴方のお口の中の状態を誰かに伝える事が出来ますか？

たとえば、奥歯が痛くて眠れなかったりします。

痛くて我慢できなくて病院に来院しました。

衛生士またはドクターに「奥歯が痛くて眠れません」と伝えたとします。

すると衛生士またはドクターに

「いつから痛いですか？」

「どう行つた時に痛いですか？」

「言葉にするならどんな痛みですか？」

「奥歯つて具体的にどの辺？指で押さえてみて？」

などと、次から次へと質問されます。

患者さんにしたら、ただ“痛いだけ”なんです。

でも、痛みには様々な種類の痛みがあるんです。

なので様々な質問をして正しく“痛み”の状態を聞きだして症状を探って行く。

だって、患者さんは『歯』が痛いと思つていても、実は『歯肉（歯茎の事）』の方に原因があったり。

『上の歯が痛い』と言つていたけど、原因は『下の歯』だったりする場合もあります。

『ジンジン痛い』

『ズキズキ痛い』

『キーンとした痛み』

『シクシクした痛み』

この表現すべて違う原因が考えられます。

『お布団に入ると痛い』

『何をしていても痛い』

『嚙んだら痛い』

『冷たい物を口に含むと痛い』

『暖かい物を口に含むと痛い』

この表現でも考えられる原因が違います。

ほら、痛いと言った表現だけでもこれだけあるんです。

それを聞いたドクターがレントゲンを見たり口腔内を見て症状を判断して治療方針を立てて治療していきます。

衛生士は、ドクターがより短時間に症状を理解しやすいように、事前に質問をしてドクターに伝えるんです。

『昨日から左上の8番（親知らずの事）にズキズキとした痛みが続いているそうです。痛みは体が暖かくなると痛くなるそうです』

沢山の質問をして患者さんに教えて貰った症状を簡潔にカルテに書いてドクターに伝えるんです。

そして、それをもとに原因を調べて行くのはドクターの仕事なので、衛生士も助手も患者さんが言った言葉を出来るだけそのまま伝える事をします。

ただし、気をつけないと行けない事は、患者さんが表現した内容をそのまま伝えなければならぬ事。

その中に、『私が感じた印象としては・・・』って印象を伝えるのは良いのですが、患者さんが訴えた内容を勝手に解釈して伝えてはダメ。

だから、『なんか、奥の方がドワンドワンした感じがする』って言われたら『ドワンドワンした感じ・・・だそうです・・・』と伝

えます・・・。

そして、先生に『ドワンドワンってどんな感じ?!』って突っ込まれるんですけどね・・・。

勝手な解釈をしてそれが間違っていたら、原因を発見するのに遠回りしてしまう恐れがあるからです。

話がそれってしまったが、今のデンチャー調整の方に話を戻すと私たちはいろいろな症例を見て来ているので、

『とおっしゃっていた患者さんに　をしたら良くなった』

『とおっしゃって　の部分を見たら擦傷症が出来ていた』

などの症例があるので、過去の経験と知識をもとに患者さんが訴えていらっしやる痛みや不具合などを探りながら調整していくのです。そこで、いつも思うのが・・・ドクターが患者さんの訴えをちゃんと理解出来ていない時がある事・・・。

私はドクターがデンチャーを削っている時に視野の確保と削って熱を盛った部分を冷やす為に、横からエアを当てていく。

そうしながら、患者さんがおっしゃっていた事とドクターがされている調整が違つと感じる事が多い・・・。

そうじゃないんだよな・・・そこを削るより、

あそこをレジン（樹脂素材）盛つた方がいいのに・・・。

と、思いつつも患者さんの手前ドクターに否定的な言葉は言えない・・・。

どうしたもんかと悩みつつアシストするのである。

「入れ歯入れますね。カチカチ噛んでみて下さい。どうですか？」
コウイチ先生が調整したデンチャーを患者さんにためして貰いながら質問する。

「・・・？　もうちょっと・・・なんか、こつ・・・」

と、患者さんはまだ入れ歯に違和感を感じている様子。でも、その違和感の原因が判らず上手く説明出来ない様子。

そこで、私は助け船を出す事にする。

「この辺り、噛んでみて頂けませんか？　ここが強く当たってませんか？」

私がツンツンと突いた部分を患者さんが意識したのかちよつと考えて

「あ、そうですね。ここ当たってます。」

患者さんがそう言うと、私は患者さんにニッコリ笑って先生の方を向いた。

すると、先生は患者さんの口腔内かにはめたデンチャーを少し触つて確認してから口腔内から出した。

私は横からエアード乾燥させてレジンを盛る為の筆を渡す。

コウイチ先生は黙って、患者さんが痛いと言った場所の反対側の部分にレジンを盛って

「ちよつとツンとした匂いがしますよ。」

と言って、デンチャーを口腔内に入れる。

固まったところ合いを見計らって口腔内から出して患者さんには椅子を起こして嗽うがいをして貰い待って貰う。

コウイチ先生は先ほど盛ったレジンの余剰な部分を切削している。

そして、私は頃合いを見計らってコウイチ先生の手の中のデンチャーに手を出して、黙ってデンチャーの端の部分をなぞって先生を見る。

私の行動の意味を悟ったのか、先生は私が指でなぞった部分を少しだけ削る。

そして、患者さんの椅子を倒そうとした先生を制して、起こしたまま口腔内にデンチャーを入れて貰うようにジエスチャーする。

デンチャーは日常生活で使う物。

寝ながらの位置よりも、起きている位置の方がはるかに多い。

ならば、最終的な位置確認は座位の方がいいはず。

特殊な事例以外は、寝る時は飲み込む恐れがあるので、デンチャー

は外して寝るように勧めている。

それを悟ってくれたのか、コウイチ先生は患者さんの前に回り込んでデンチャーを口腔内に入れる。

「いかがですか？」

「良くなりました。これなら大丈夫そうです。」

患者さんのOKが出たので、もう一度デンチャーをはずして貰って削った部分を綺麗に研磨して患者さんに返して治療を終了する。

コウイチ先生の白衣に沢山付いた切削粉をエアードリラーで丁寧に飛ばして床に散りばった切削粉を片付け始める。

「ナジオさんナイスアシストです。」

「いえ。」

私は小さく返事を返して直ぐに片付け作業にかかる。

私達衛生士と助手達は一人のドクターだけのアシストだけをやる訳ではない。

沢山のドクターのアシストをこなし、衛生士はドクターの指示のもと咬合調整（かみ合わせの高さ合わせ）などをする。

なので、それなりに知識もあるしドクターのプロ目線ではなく、どちらかと言うと患者さん目線で見る事が多い。

だから、なんとなく患者さんが伝えようとしている事を理解出来るような気がするのである。

ドクターって教科書通りに治療するというか・・・いや、それが悪いわけではけっしてないのだが、人それぞれの症状と言う物が合っ

て、絶対にそれに当てはまるという事はないと思う。

もう少し柔軟に考えれば良いのに・・・って思う事が多くある。私達衛生士は、教科書通りの症例ばかりではない事を痛感させられる事が多い。

学校のペーパーテストがどんだけ良かろうが悪かろうが、『出たとこ勝負』な事が多い。

それをいかに柔軟に生かして治療を進めて行く。学校を卒業しても勉強し続ける。

それが社会人だと思い知らされている今日この頃であった。

学校卒業したら、勉強する事なんてないと思ってたのになあ
）。

調整・i（後書き）

体調不良で更新が遅くなりました。
申し訳ありません。

私は今、防護用のメガネをかけてストレートハンドピース（低速回転の切削用器具）を片手にひたすら削って削って削りまくっていた・
・
・

何をもって？

それは、樹脂で作られた仮の歯。

私は、業務内容の中でティック（ポンティックとも云う仮の歯の事）を作りのが一番好き。

さつき歯科の中で、手早く綺麗にテックを作る事が出来るのは私だと自負している。

あまりにも綺麗に作りすぎて、患者さんに『この歯の方がいいです。』と言われてしまった事がある。

だって、これはあくまでも樹脂で作った仮の歯。

なので、院長には『あまり綺麗に作らないで』と言われている・・・が、血が騒ぐと云うか、職人魂がそうさせると云うか、どうしても綺麗に作ってしまう。

私が今している作業は、補綴物ほてつぶつを入れる予定の部位を治療前に印象（歯の型）をとって、支台歯の形成が済んでからその印象をもとにレジン（樹脂の事）を使って以前の歯の形そのままにテック（仮の歯）を作っているのである。

このテックの作り方が一番簡単で、一番自然なテックを作れると思う。

削りすぎたらもう一度盛ればいいし、高ければ削ればいいんだから、気兼ねなく出来る作業だからか、結構鼻歌交じりで作業していたりする。

（ダメだよ、仕事中に鼻歌唄ったら。）

形成作業を終えて、咬合紙くわごしを用いた咬合調整くわごていせい（噛み合わせがちゃんとあっているか、高さが高すぎないかを確認して調整する作業）

を行い、仮の歯なので、高すぎると割れやすくなるので、あまり高すぎないように調節する。

患者さんに手鏡で確認をして頂き研磨作業を行うと、

仮歯である事・仮止めをしている事・割れやすいのでこの部位では噛まない事・ガムやおもちなどの歯にひつつきやすい食べ物を食べると外れる事を伝えて、担当医のクワイチ先生に仮着セメント（仮止めで使用するセメントの事）を使って仮止めをしてもらおう。

セメントが固まるまでの間にエア―を使って体中にまわりついたレジンの切削粉を落としてから出来る範囲の片付け作業をする。

そして、仮着セメントが硬化したのを確認して、余剰セメントを除去してから治療を終了した。

床を履いて切削粉を片付けて使用した器具を消毒しているとアラタ先生が通りかかった。

「ナジオさんレジンついてますよ。」

そう云って、頭のとっぺんのあたりについているらしい切削粉を取ってくれる。

「ありがとうございます。もうついてません？」

私がそう云うと、アラタ先生は頭の前からつま先まで見て、私をクルッと回転させて背中までしっかり確認してから、

「大丈夫です。いつも通り可愛いナジオさんですよ。」

と、笑顔で行って立ち去って行った……。

あの人は、職場で何を言ってるんですか！！

このあと、赤面してしまって診療室になかなか帰れませんでした……。

「テック（テンポラリークラウンと呼んだりする樹脂で作られる仮の歯の事）やデンチャー（入れ歯の事）の調整でのコツってなんですか？」

駅へと向かう帰り道、アラタさんが私に何気なく聞いてきた。

私が衛生士業務よりもテックやデンチャーの調整を得意としている事を知って聞いてきた質問である。

そういえば、この間、

テックを作り終わって仮着（仮かちやくに着ける事の略）する時に

「ちよつと見せて」と、アラタ先生が私が作ったテックをマジマジと見ていたなあ。

そりゃ、経験でいえば私の方が経験豊富だが、しかし、こつもあつさりどドクターから衛生士にコツを聞こうとするなんて、「プライドを気づけないように説明した方がいいのだろうか？」とこちらが気を使ってしまう……。

「……思い切りのよさでしょうか？」

「思い切り？」

「はい、思い切りです。」

テックやデンチャーは何度でも修正がかのうだから、削りすぎたらレジンを盛ればいいし、高すぎたら削つたらいい。

チマチマ時間をかけて削るよりも、思い切って削り落してしまった方が案外、短時間で出来るもんですよ？」

「ナジオさんが言うとなんだか簡単に聞こえてきますね。」

「言うのは簡単なんですけどね……。あ、それと、妥協です。」

「妥協ですか？」

「はい。深追いはしない方がいいです。」

「なるほど」

これは私の経験から言える事である。

プロ意識というか職人魂と云うべきか、綺麗な物を作りたくなくなってしまつのをグツとこらえて、それなりに見栄え良く、機能的な物を短時間で作るらなければならないのである。

細かいデテールにこだわってはいは患者さんにご迷惑をおかす事になってしまつう。

「判りました。今度は思い切りやって深追いしないようにやってみます。」

にっこりと笑つてそう云うアラタさんを見て私も笑顔になつてしまつう。

咬合調整くわごうていせい（噛み合わせの高さなどを調節する事）は意外と神経を使う。

なぜなら、高さ調節がミクロン単位だから。

高すぎると痛みがでて噛めなくて割れやすくなる。

なので、テックの場合は、当たらないようにザックつと見た目が気にならない程度に削つたりする場合もある。

見た目を補うために使用される物だからあまり噛めなくても良いのである。

つていうか、逆に割れやすいから、テックの部分で噛んで欲しくない。

これが仮の歯だからいいけど、補綴物ほていぶつ（金属などを用いて歯の欠損部分を補う詰め物の事）の咬合調整だつたらとても慎重にならなければならぬ、ザックと削ってしまったら噛めなくなって補綴物を作りなおさなければならぬのでこちらには気をつけながら切削するのだが……。

まあ、今の話は仮の歯なので補綴物程の慎重さはいらぬのだが……。

大きな歯ならともかく、小さな歯のテックを作るのは指の細い女性

である私たちでも大変。

掴むところがなくて固定しにくいから、ポロポロ落としてしまつて落とすたびに消毒しないといけないので、落とさないように作業するのが結構たいへんだったりする。

患者さんのご予定もある事だし、先生の次の予約の患者さんも来院されるだろうから、手早く作る事はとても必要なスキルであると言える。

院長やコウイチ先生なら時間がかかるような作業なら私たちが代わりに作業するのだが、下つ端のアラタ先生は私たちが代わりにする事は院長命令で出来ない。

自力で頑張るしかないのである。

「それにしても、ナジオさんつてプラモデルとか作らせたら凄いの作れそうですね。」

アラタさんがポツリとそう云つた。

「フツフツ、それがですね・・・塗装するのが壊滅的に苦手なんです・・・。」

「え?!意外!!」

私は切削したり組み立てたりとかはとても得意なのだが、色塗り作業が本当に苦手。

せつかく綺麗に組みあがつたプラモデルも残念な塗装のせいで楽しさ半減・・・。

かといつて、未塗装つてちょっと味気ないでしょう?

だから、私はプラモデルは作らない。

最初から塗装してあるプラモデルなら作ってもいいけど、塗装して組み立てるのが楽しいのにそれが出来ないだなんて中途半端すぎる・・・。

「じゃあ、俺が塗装してナジオさんが組み立てる。二人で共同作業で作るつてどうですか?」

「いいですねえ。私、以前からカーゴヘリのプラモデル作りたかつたんですよねえ。」

「なに仕様にしたかったんですか？」
「メディックなんてどうでしょう？」
「良いセンスですね！」
「今度一緒に買いに行きませんか？」
「是非」
「先生は何が作りたいですか？」
「俺は王道でファントムかな・・・。」

この後、プラモデルの話題で仕事以上の盛り上がりを見せる会話が
続いたのでした・・・。

調整・3 (後書き)

ストックがなくなりましたので、しばらくストック作業に入らせて頂きます。

って言うか、そろそろ話しを終盤に向かわせようかと思っています。最後まで書きあげれるように頑張っていきます。

予防歯科・1

「I LOVE YOU! 我喜???! ??? (サランヘー)」

私の発言に爆笑する付き添いのお母さん。

なぜ、私が診療室内で、さまざまな国の言葉で愛を叫んだかと申しますと……。

只今、私は3歳の陸斗君^{りくとう}が歯医者さんでちゃんと機械を怖がらずに治療を出来るように練習をしている最中で(子供は病院が苦手な子が本当に多い。)

何をされるか判らない恐怖心で、歯磨きはおるか、椅子に座る事も、診療室内に入る事も出来ない子供は少なくない。

しかし、痛みが出てしまったからだ、恐怖心など無視して治療するしか痛みを取る事が出来ない。

と、言う事で、痛みが出る前に少しずつ『歯医者さんは楽しいところなんだよ』と、刷り込み・・・失礼、教えてあげる事も必要となってくる。

ちなみに、大人と違って子供は小さな虫歯ぐらいでは痛みを訴える事はない。

なので、痛みを訴えると云う事は、相当ひどい状態である。

初期の虫歯が発見された時点で、治療可能であればドクターが治療もし、ドクターを怖がって治療が無可能であれば衛生士が歯磨きなどを通じて少しずつ機械を口に入れる練習をするのである。

親御さんにしたらもどかしいと思うかもしれないくらいゆっくりと慣れさせていく場合もある。

私たちが恐れるのは、『歯医者さんは怖いから病院に行きたくない』と痛いのを我慢して口の中がボロボロの状態になってしまう事なの

である。

だから、なるべく親御さんは悪い事をして叱る時に、恐怖心をあおる常套句として

『悪い事をしたら病院で注射打ってもらうで!』などの、悪いイメージを抱くような事を子供に言わないで下さいとお願ひしている。

『早期発見・早期治療』が出来ればそれだけ、健康で丈夫な歯で美味しいご飯を食べ続ける事が出来るのである。

『歯が抜けたら入れ歯にした方がいい』なんて軽く考えないでほしい。

自分の歯でご飯を食べれるありがたさは失ってからしか判らないかもしれないませんが、入れ歯や刺し歯で食べるご飯よりも自分自身の歯で食べるご飯の食感は全然違います。

ですから、一本でも多く自分の歯を残せるように指導していつのが私たち歯科衛生士の仕事なのである。

話が大きくそれてしまったが、話を本題に戻してリクト君の治療中。

歯ブラシを使って倒したチェアの上で歯磨きをしようとしたが、リクト君がなかなか口をあけてくれなかつたので、心を開いて不安要素を取りのぞけるようにと、ユニットチェアを倒したままの状態でいろいろ話をしていたのである。

すると、親御さんが「合言葉で正解したら少しだけ口をあけるのはどう?」と助け船をだしてくれたので、それに乗る事にしたのである。

そして、リクト君が私の目を見て言った一言が

『あいのことをどうぞ!』である……。

『……I LOVE YOU』と答えたら。

『ぶつぶー!!あいのことをどうぞ!』

と言われたので、情熱的に言わねばならないのかと悪乗りして

『I LOVE YOU! 我喜???! ???!』と叫んだのである(笑)

何故日本語ではなかったのかと我ながら不思議に思いつつも言われたとおりに言ってみたら親御さんにバカ受けした。

よしー!!

今日、一番の笑い頂きー!!

「ぶつぶー!! 違いますー!!」

「えへえ。だから『愛の言葉』言ったじゃなへー!!」

「・・・あいのことば・・・」

「合言葉でしょ?」

「あいことば」

「そう。合言葉。」

「あいのことばをどうぞー!!」

「・・・好きです。可愛い。愛してます。」

「ぶつぶー! 違います。」

「えへえ、また『愛の言葉』って言ったから言ったのに!」

本人はいたって大真面目。

それに対して、悪乗りして云い募る私と、大爆笑中の親御さん。

「・・・もういいよ。」

そして、根負けして口を開けてくれたリクト君。

よっしゃー!!

私の勝ちー!!

言葉のあげ足を取るような真似をして、我ながら大人げない事をしたな・・・とは思ったが、

ウケたからALL OK! って感じ。

親御さんが笑っている事で、安心してくれたのか先ほどまでの抵抗はいったい何だったのか?

と、思うほど素直に口を開けてくれた。

だからと言って、ここで深追いをして歯医者さんが嫌になって通院拒否をされては困るので深追いはしないで手早く治療を済ませる。「上手に口を開けてくれたから、もう終わっちゃったよ。上手だったね。また歯医者さんに遊びに来てね!」
そう言って治療を終了させた。

子供の言い間違えて本当に面白い。

予防歯科・2（前書き）

すいません。

今回はいつも以上に短いです・・・。

「さつき、何を叫んでたんですか？」

洗い場で手を洗って居る時、アラタ先生が聞いてきた。

もしかして、診療所中に響いてたのか？

なんてこっぱずかしい事をしたんだ……。

私の内心は orz こんな感じになっていたけど笑って誤魔化した。

「あれはね。リクト君が『合言葉をどうぞ』って言えなくて『あいのことばをどうぞ』って言うから、愛の言葉を並べて見ました。日本語で愛を並べるのはどうもノリが悪くなってしまうそうだったので……。」

照れたように私がそう濁すと

「だから外国語だったんですか？」

と、私の顔を覗き込むように聞いてきた。

「日本人って、なかなか自分の想いを相手に伝いえない民族ですからね。」

でも、日本語で『愛してる』って言葉にしにくいのに『I LOVE YOU』だったらツルっと出るから不思議です。」

私が苦笑いをしていると、アラタ先生がすつと私の耳元に近づいてきて

『僕には日本語で伝えて貰えるんですよね？』

小さな声でそう囁いて、洗い場から離れて行った。

私は小さく囁かれた耳を濡れた手で押さえてた。

ゴム手袋ごしにも自分の顔が熱を持っているのが判る。

誰か、仕事中に私をおちよっくて行くあの確信犯をどうにかして下さい。

私が洗い場で固まっていると

ケイコさんが使用した器具を持ってやって来た。

「ナジオ、3歳児に求婚したって?」

「・・・いくらなんでも3歳児に求婚はしません。そこへユキがやって来た。」

「ナジオさん、3歳児に愛を叫んだらしいですね。」

「・・・叫びましたが何か?」

私が開き直ったかの用にそう言いきると

「ナジオ、寿退社は15年後ぐらい?」

私たちの後ろを通過しながらサツキ先生がサラッと発言して立ち去っていく。

サツキ先生の発言に口をパクパクしていると、今度はコウイチ先生が現れたので何かを言おうと口を開く前に「聞きたくありませんか。」と、発言前に切って捨てておく。

「ええ〜!!!」と不平を洩らすコウイチ先生を黙殺。

どうして、この診療所の人間は私が何かをするとからかいに来るの?!?!

予防歯科・2（後書き）

web拍手を設置しました。

良かったらポチッと押してやってください。

ついでにメッセージなんて頂けちゃったら喜びます。ゞ（*）
ノ ヒヤッホウ

（11月27日追記）

「あれはね。」掲載2カ月記念（？）に

web拍手ボタンをポチッと2回拍手ボタンを押していただけると
小話を読めるようにしてみました。

良ければ、2回ポチ凸ポチ凸と押してやって下さいませ。

あと、活動報告でお知らせやコメントもしています。

よければ、そちらの方も遊びに来て下さい。

小話 器用ですね。 ～アラタ目線～

今日は、今話題の韓国映画をナジオさんが「見たい！」と言っていたので、仕事終りに二人で映画館に来て映画鑑賞をする事になった。俺は映画は好きなのだが、映画館で観る事は少なく、もっぱらDVDをレンタルして話題作などを観ていたが、ナジオさんは映画館で観るのが好きらしく、たまに今日のように仕事終りに独りでレイトショーを観に来たりしていたらしい。

知らなかったのだが、映画館によつては20時以降から上映される映画の料金が安くなったり、決まった曜日をレディースデーと称して女性のみお手頃な料金で鑑賞できる仕組みがあるらしい。映画館もなかなか考えているなと正直思ったりした。

それで、今回ナジオさんが見たいと言った映画の内容は、ジャンルの的にはラブコメで男の俺が見ても・・・と思っていたが、案外面白かった。

映画の途中何度もナジオさんの方をチラチラと見て見たが、話に集中しているらしく、俺に見られていると云う事も気付かないぐらいに集中して映画に見入っていた。

主人公達が幸せを掴んでのハッピーエンドで幕を下ろした映画のエンドロールを観ながら、頭の中でこの後の事を考えていた。

仕事を終えて、食事もとらずにそのままレイトショーを観に映画館に足を運んだので、この後は食事に行きたいのだが、今の時間からでは殆どのお店がラストオーダーを終わらせてしまっているはずだ。この時間からでも食べれるお店はこの近くにあったらどうか・・・と、考えているうちにエンドロールも終了してあたりが明るくなつた。

俺は、座った姿勢のまま大きく手をあげて伸びをすると、横でナジオさんも同じように伸びをしながら、

「チョッタ！！ ノムノム チョッタ！！」

と、言っている。

さっきまで韓国語の映画を観ていた余韻がまだ続いているのか？

そんな事を思いながら、ナジオさんの方を見ると

ナジオさんは身支度をしながら

「オッパオー ノム ペゴパヨウ。」

と、普通に韓国語で話しかけられた・・・

しかも、可愛く甘えるように・・・。

韓国語で話しているナジオさんって甘えた感じですよっぴー可愛い！

ナジオさんは韓国語で俺に話しかけている事に気付いていないのか、そのままずっと韓国語で話しかけてくる。

ナジオさ〜ん。

早く気付いて下さい！

俺、韓国語判りませんよ？！

俺が返事をしなかった事で、気付いたのか。

「すみません！ 頭が韓国語モードになってました！ホントすみません。」

と、平謝りされた・・・。

別にいいんですよ。

なんだか、ナジオさんがいつも以上に可愛かったですし。

「ええ〜改めまして、アラタさん、この後 ご飯どうしますか？」

「そうですね。取り敢えず、ここから出てから考えましょうか。」
「はい。」

そうして、俺たちは映画館から出て相談して、ナジオさんの部屋で食事を食べる事にした。

「そういえば、ナジオさん韓国語の勉強は続けてるんですか？」

俺は横を歩くナジオさんにそう問いかけると

「腰を据えてする勉強は出来ていませんが、インターネットの韓国語のニュースとかに目を通したりしてます。」

「すごいですね。ハンゲル読めるんですね。」

「ある程度は読めますけど、意味が判らない言葉が沢山あってその度に自動翻訳にかけて訳して呼んでます。」

「凄いですね、自動翻訳機能まであるんですか！」

「結構簡単なんですよ？ 判らない単語のところを選んでクリックするだけで直訳ぐらいの翻訳は出来ます。世の中ホント便利になりました。」

「もしかして、パソコンでハンゲルを入力出来たりするんですか？」

「もちろんですよ。私のパソコンは 日本語・英語・韓国語入力出来るようになってますから。」

「韓国語の入力ってどうやってやるんですか？」

「??? 普通に、ローマ字入力見たいに文字を決められた文字のキーを入力してローマ字みたいに組み合わせで文字を行きますけど? ???」

「ブラインドタッチで？」

「はい。ブラインドタッチです。」

あ！でも、自分でも不思議な事に、ローマ字とハンゲルはブラインドタッチでスラスラくっくと入力出来るのに、アルファベットを入力する時だけ、キーを見ながら打たないとタイプミスが多いんですよ！！訳わかんないでしょ？」

そう言って、ナジオさんは笑った。

ハイ、意味分かりません。

ローマ字入力とハンゲル入力がブラインドタッチのくせにアルファベット入力の時だけキーを見るって……。ローマ字入力と同じ感覚だとおもうのですが……。

やはり、ナジオさんは天然のようです。

「昔、友達に言われたんですけど、『日本人って大変だね。平仮名と片仮名と漢字を覚えてパソコン入力はローマ字って……一つの言葉なのに4つの文字があるのは覚えるのが大変だね。』って。言われた時には意味が判らなかつたのですが、今なら判ります。英語なら文字はアルファベットを覚えたらいいし、韓国語もハンゲルを覚えたらいい。」

でも、日本語は4つ覚えなないといけないんですからね。しかも、感じに関しては読み方が沢山あってややこしいですしね。歩きながらも、日本語の文字について熱く語り始めるナジオさん。そういえば、考えた事もなかつた。

日常で当たり前に使っている日本語は3種類の文字を自由自在にあやちり、パソコンなどの入力の際にはかな入力かローマ字入力で打ちこんでいく。

日本語ってなんて複雑な言語なんだろう……。

「ほんとだ、日本語って結構複雑だったんですね。」
そう言うと、ナジオさんは ねえ〜？ って言って笑った。

「たまに、電子辞書で意味を調べたりする時があるんですけど、入力する時に自分がいつたい何語を入力したいのか判らなくなってくるんです。もう、ここまで来たら重症ですよ。」
いや、凄いなと思いますよ。

何語か判らなくなる程、俺は言語を勉強した事がないから。
たまに日本語すら読めない時あるし……。

俺たちはナジオさんの部屋の最寄り駅で電車を降りると近くのスーパーによって食材を買い、ゆつくりと部屋に向かって歩いて行く。
『半分持つ』と言って聞かないナジオさんを制してレジ袋の荷物は俺が持つ。

その横で、あたふたと俺を気遣う素振りを見せているナジオさんは本当に可愛い。

そんな素振りを見たくて、職場でもささやかなチョコッカイをかけてしまうのだが……。

「そういえば、韓国語で話しかけられたらすぐに韓国語で会話出来るんですか？」

俺は、英語で話しかけられてもなかなか頭が働かなくてあたふたしてしまっんですけど。」

あたふたするナジオさんを堪能した後に、俺はナジオさんにそう聞いてみた。

「そうですね、すぐにスイッチが入ればすぐに韓国語になりますけど、なかなかスイッチが切り替えれなくて、困る時もあります。」

「ナジオさんでもあるんですか？」

「ありますよ！ 98%日本語で生活してるんですから！」

「え？2%が韓国語ですか？！」

「いえ、1%が英語で残りの1%が韓国語です。」

「日本で生活してたらほぼ日本語ですもんね……。」

「そうですね。」

俺たちはそんな会をしながらナジオさんの部屋に到着した。

そして、ナジオさんが作ってくれた遅めの晩御飯を食べながらナジオさんとあれこれ会話をしながら、ナジオさんとの楽しい一時を過ごした。

そういえば、
意味分らないけど「オツパー」って甘えた言い方が超可
愛かった。

「オツパー」ってなに？

小話 器用ですね。　　くアラタ目線く（後書き）

オツパーとは女性が兄に対して使う言葉で「お兄さん」という意味ですが、身近にいるとつても親しい男性に使われる言葉。

（ちなみに、恋人とかなら年下でも「オツパー」と呼ぶらしい、某ファンミーティングで70代程の女性が20代の男性アーティストに「オツパー」と呼んでいると聞いた事があります。）

基本、韓国では20歳を過ぎたら「アジヨシ（おじさん）」と呼ばれます。

なので、とても仲の良い身内以外の男性に「オツパー」と呼ぶと喜ばれます。

喜ばれるからと「オツパー」を連発すると勘違いされるので滅多やたらと言わない方がいいです。

余談ですが、「アツパー」は「パパ」の事。

友達がよく言い間違えてた（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0685x/>

あれはね。

2011年12月2日01時54分発行